２０１９年度

近畿ＥＳＤコンソーシアム成果発表会・実践交流会

２０１９年１２月２６日・２７日

近畿ＥＳＤコンソーシアム・奈良教育大学

はじめに

新学習指導要領が、幼稚園（教育要領）では平成30年度より全面実施されています。また、小学校では令和２年度より、中学校は令和３年度、そして高等学校では令和４年度より年次進行で実施される予定です。新学習指導要領には前文が付されており、そこに「一人一人の生徒が、（中略）持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。」（下線部は、小学校では「児童」、幼稚園では「幼児」）と明記されたことから、全国の全ての学校園でＥＳＤの理念を反映した教育活動が実施されていくことになります。

これまでは、全国で1100校ほどのユネスコスクールを中心に実践されてきたＥＳＤですが、その理念が学習指導要領の前文に明記され、教育の普遍的な意味として位置づけられた理由を考えてみますと、二つのことが思い当たります。ひとつは子ども達に育みたい「生きる力」の質が変わったということです。これからの時代は、グローバル化の進展やＡＩ・人工知能などの技術革新により、変化の激しい予測困難な時代であると言われています。このような社会を主体的に生きぬいていくためには、自ら課題を見つけ、考え、判断し、行動する力が必要であり、これはＥＳＤが育もうとしてきた力に他なりません。これまで追求してきた「生きる力」が、時代の変化に伴い自ずと質的・内的に変化を遂げたのだと思います。二つ目は私たちを取り巻く「持続不可能な社会状況」です。気象庁は2018年７月の西日本豪雨の要因について「これらの背景としては地球温暖化に伴う気温の上昇と水蒸気量の増加に加え」という「地球温暖化」に言及する見解を示しました。国連の「気候変動に関する政府間パネル（IPCC）」も、100年に１回程度だった大規模な高潮などが、海面上昇により今世紀半ばには、年１回以上発生するようになると警告しています。2015年に国連は、ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）を示しました。現在、世界中で持続可能な社会の実現にむけた取り組みが加速していますが、ＳＤＧｓの目標達成のための教育がＥＳＤに他なりません。

2030年までにＳＤＧｓに掲げられた目標を達成し、持続可能な社会を実現させるためには、技術革新や新しい政策、そして人々のライフスタイルの変容が必要であり、何よりも「教育」でありＥＳＤの貢献がますます期待されています。

奈良教育大学では、大学の３つの柱の一つに、持続可能な社会づくりに貢献できる教員の養成を位置づけ、教員養成と現職教員の研修に取り組んでいます。近畿ＥＳＤコンソーシアムもその一貫で、近畿地方を中心にＥＳＤの推進を目的に、奈良市、橿原市、橋本市、彦根市の各教育委員会のご協力のもと、地元企業や東大寺、ユネスコ協会やNPOといった市民活動の皆様とマルチステークホルダーな連携を通じて活動を行っております。

本成果発表会の子どもフォーラムでは、この１年間にＥＳＤに取り組まれた子ども達による豊かな学びの報告を聞くことが楽しみです。実践交流会では、先生方や実践家、企業の方々との実践交流会から色々学ばせていただこうと思っています。また、東京大学の及川幸彦先生には、毎年、ＥＳＤ研修会をご担当いただき、ＥＳＤに関する最新の情報を伝えていただいています。今年も充実した２日間となるよう、よろしくお願い申し上げます。

2019年12月

奈良教育大学　学長
近畿ＥＳＤコンソーシアム　会長　　加藤　久雄

日　程

【12 月 26 日（木）】

9：50－10：00　開会行事

10：00－11：30　ＥＳＤ子どもフォーラム

①奈良の自然・歴史さんぽ講座

「子どもによる環境スピーチー美しい地球をいつまでもー」

②橿原市立白橿北小学校

「つながった!!　歴史・人・わたしのまち」

③彦根市立西中学校

「身近な人権について考える『私たちにできることって何だろう？』」

11：30－13：00　昼食休憩

13：00－15：30　ESD 実践交流会Ⅰ

第１分科会（司会：橿原市指導主事 鶴田 剛史 氏、圓山 裕史 氏）：大会議室

①奈良市立飛鳥小学校 教諭 圓山 裕史 氏

②やかげ小中高こども連合 共同代表 室 貴由輝 氏

③橿原市立畝傍中学校 教諭 東前 光二 氏

④エリーニユネスコ協会 藤井 伸二 氏

⑤株式会社ファーストリテイリング サステナビリティ部ビジネス・社会課題解決連動チーム 中野 友華 氏

第２分科会（司会：橋本市指導主事 森 和子 氏、島 俊彦 氏）：第１会議室

①大和郡山市立郡山西小学校 教諭 島 俊彦 氏

②福岡市立田隅小学校 校長　遠入 哲司　氏

③草津市立渋川小学校 教諭 中村 大輔 氏

④橋本市立あやの台小学校 教諭 中谷 栄作 氏

⑤森と水の源流館 事務局長 尾上 忠太 氏

第３分科会（司会：彦根市指導主事 廣川 雄一郎 氏、奈良市指導主事 大塚 厚 氏）：次世代１号館

①平群町立平群北小学校 教諭 小谷 文佳 氏

②彦根市立城北小学校 教諭 中村 裕幸 氏

③北谷町立北谷中学校 教諭　石井 貴徳　氏

④円山の自然と文化を守る会　会長 宮尾 芳昭 氏、事務局長 鳥飼 和夫 氏
会員 中村　聡一 氏

15：40－17：10　ESD 研修会（講演会）：大会議室

「海洋プラスチック　何が問題、どう防ぐ」

講師：東京大学 主幹研究員 及川 幸彦 氏

17：10－17：20　閉会行事・挨拶（奈良教育大学副学長 高橋 豪仁 氏）

【12月27日】会場：奈良教育大学 次世代教員養成センター２号館

9：00－10：00　ESD研修会（講演会）：多目的ホール

ESD for 2030・これからのESDの方向性

講師：東京大学 主幹研究員 及川 幸彦 氏

10：00－12：00　ESD実践交流会Ⅱ（発表20分＋質疑10分）

第４分科会（司会：奈良教育大学 中澤 静男 氏、大西 浩明 氏）：多目的ホール

①奈良市立飛鳥小学校 教諭 大西 浩明 氏

②奈良教育大学附属幼稚園 教諭 鎌田 大雅 氏

③浦添市立前田小学校 教諭 仲村 出 氏

④川上村立川上小学校 教諭 川崎 貴寛 氏

第５分科会（司会：奈良教育大学 河本 大地 氏、吉田 寛 氏）：会議室

①春日山原始林を未来へつなぐ会 事務局長 杉山 拓次 氏

②奈良市立都跡小学校 教諭 三木 恵介 氏

③東京都立立川国際中等教育学校 教諭 町田 恵里子 氏

④奈良教育大学附属中学校 教諭 市橋 由彬 氏・吉田 寛 氏

第６分科会（司会：奈良市指導主事 大塚 厚 氏、河野 晋也 氏）：モデル教室

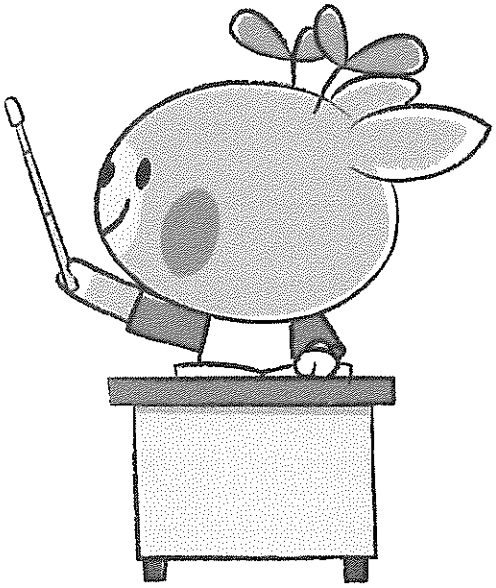
①奈良教育大学附属小学校 教諭　河野 晋也 氏

②長浜市立高時小学校 教諭 足立 康輔 氏

③奈良市立平城小学校 教諭 新宮 済 氏

④奈良教育大学ユネスコクラブ 仲村 幸奈 氏・谷垣 徹 氏

12：00－12:10　閉会行事



奈良の自然・歴史さんぽ　講座　環境部門
「子どもによる環境スピーチ　ー美しい地球をいつまでもー」
奈良市立飛鳥小学校　６年　渡辺　美月

1　日本の環境について考えたこと・・・

日本は美しい国で
環境先進国だと・・・

ごみ処分の現状
日本から出るプラスチックごみ９０３万トン

リサイクルは２３パーセント

残りは焼却処分

そのほとんどが海外でリサイクルに・・・
日本でリサイクルされるのはごく一部

2　プラスチックごみについて

分解することができないため
自然界に捨てられたごみは増えつづける

マイクロプラスチック
5㎜以下の小さいプラスチック
世界中の海でただよっている

3　美しい地球をいつまでも

わたしたちにできることは？

日本は、プラスチックごみの処分を、外国に任せるのではなく、日本で始末しなければならないと思う。私達には、「使う責任」がともなう。これ以上、地球をよごさないためにも、ごみのポイ捨てをしないこと、できるだけプラスチック製品を使わないように心がける。「もったいない」という日本の素晴らしい文化を大切にし、使い捨てになるようなレジ袋を使わずマイバックを使うようにする。

奈良の自然・歴史さんぽ講座　歴史部門

「子どもによる環境スピーチ－美しい地球をいつまでも－」

奈良教育大学付属小学校　６年　石田凱大

仏教賛成派ＶＳ仏教反対派
物部氏が敗れる。

聖徳太子は、とら年とら日
とらの時間にこのように戦
ったら勝てるという夢を信
貴山でみた。

１　元興寺の歴史

５８７年　蘇我氏・聖徳太子×物部氏による崇仏・排仏戦争

６世紀末　法興寺（蘇我氏の氏寺）：日本最初の仏教寺院（現在の飛鳥寺の場所）

６４５年　大化の改新

７１０年　平城京遷都

７１８年　法興寺が平城京へ移され、元興寺となる。

７５７年　五重大塔の建立（１８５９年焼失）

元の法興寺でということで
・・・元興寺

江戸時代に近所の火事に巻
き込まれて燃えてしまう。

智光さんがみた天国の夢を
絵にしたもの

みんなのお寺として
あがめられた

２　信仰

奈良時代の終わり　元興寺の僧、智光が浄土曼荼羅（智光曼荼羅）をあつく信仰

平安時代の終わり　極楽坊がつくられ、智光曼荼羅をまつる

鎌倉時代以降　庶民の極楽浄土を願う信仰によって支えられる

智光曼荼羅をおさめた極楽坊の堂内は浄土

極楽への導き手である地蔵菩薩への信仰につながっていく

天国への入口とされた

お地蔵さんを天国へ導
いてくれる人として

お釈迦様のお墓
遠くからでも分かるように

３　五重小塔

塔の役割：仏舎利（おしゃかさまの骨）をおまつりするための施設

本来、お寺の中心建物

お釈迦様の骨が一番大事

極楽坊にある五重小塔：高さ５．５ｍ　小さくても模型ではない　奈良時代の建造物であり国宝です

すごい！すごい！ここがすごい！

元興寺では３つの本物を見ることができる。それがすごい。

① かわら

今は令和の時代で、何百年も経っているのに、奈良時代に実際に使われていた行基葺きという「かわら」の建物が目の前に立っていること。

② 本堂の柱

本堂の柱に奈良時代の落書きが彫ってあることがすごい。これは、「私が○○寄付したので、天国へ導いてほしい」という願いだそうだ。

③ レプリカじゃない塔

極楽坊にある五重小塔は奈良時代のままの塔だということがすごい。土壁に雨がかからないように屋根の端っこが突き出ていたりして、奈良時代の人のアイデアはすごい。

どうして世界遺産なんだろうか？

同じ世界遺産である東大寺は、2度焼けたけど、人々の思いや願いが実って今の東大寺が建っている。もし、その願いや思いがなかったら、今の東大寺はないと思う。

元興寺は、浄土を信じる「みんなのお寺」である。人々は、天国の入口だと信じて、元興寺を大切にし、何度も訪れたと思う。元興寺には奈良時代のままのものがいくつも残っていて、当時の人々の思いや願いを今の元興寺から感じとることができる。だから、「古都の奈良の文化財」として世界遺産に登録されたと思う。このような、世界にたった一つの「みんなのお寺」をこれからも残していくために、元興寺のことを発信していきたい。

今回、ぼくが考えたこととは！

僕のお父さんは、40年間奈良に住んでいる。だから、元興寺には何回も行ったことがある。僕も、ボーイスカウトの書初めや豆まき、地蔵盆等によく連れ行ってもらった。でも、今回、このさんぽに参加して僕もお父さんも初めて知ることがたくさんあった。いつも、何気に目の前を通ったり、見たりしていたものにはすごい歴史があって人々の思いや願いが詰まっていることに気付くことができた。知ってから元興寺をもう一度訪れてみた。すると、今までの元興寺となんか違う気がした。これはとても大事なことだと思う。奈良には他にもたくさんの文化財がある。知りたいというアンテナを張り巡らせて奈良で生きていきたい。

第２学年　生活科　実践報告

指導者　奈良市立飛鳥小学校　教諭　　圓山　裕史

１．単元名　こうえんはかせになろう！

２．単元の目標

・公園探検を通して、自分自身や身近な人々、社会や自然等の関係や関連に気付く。
（知識・技能）

・身近な人々、社会や自然を自分との関りで捉え、自分の生活について考え、表現する。
（思考・判断・表現）

・身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信を持って学んだり、生活を豊かにしたりしようとする態度を養う。（主体的に学習に取り組む態度）

３．単元について

（１）教材観

校区には、様々な公園があるが、紀寺児童公園（ロケット公園）、南紀寺街区公園（タイヤ公園）、東山緑地公園（アヒル公園）の３つは特に馴染みが深く、放課後にもよく遊んでいる姿が見られる。この３つの公園は広さや設置してある遊具などが違っていて比較しやすい。また南紀寺街区公園は「タイヤ公園」と児童は呼んでいるが、タイヤがないので「タイヤなし公園」と呼ぶ児童もいて、「なぜタイヤ公園にはタイヤがないのだろう。」、「タイヤの遊具は復活するのか。」といった疑問も生まれるであろう。実は、３年ほど前にタイヤの遊具は破損が見られるとの自治会からの要請で奈良市公園緑地課により撤去され、新たな遊具を設置する予算が回ってくる順番待ちである。

こういったことから、公園はなにもしなくてもそこにあるものではなく、身近な人々や社会との関りがあって自分たちが遊べる場所であるということに気付かせたい。

SDGｓとの関連としては、低学年ながらに公園をこれからも使っていけるように、世代間公正の価値観やゴール１１．「住み続けられるまちづくりを」を達成していけるような素地を養いたい。

（２）児童観

この３つの公園を知っている児童が多数であるが、まだ２年生ということもあって、３つの公園の中でも行ったことがない公園がある児童もいたり、校区外から通学している児童や、放課後は学童保育や習い事に通い、公園で遊ぶ機会少ない児童もいたりする。

また、授業前に学級の２６名に公園で遊ぶ機会について聞いてみると、「よく遊ぶ」と答えた児童は８人で、「たまに遊ぶ」が１５人、「ほとんど行かない」と答えた児童が３人だった。ライフスタイルやゲームなど遊び方の変化もあって、公園で遊ぶ機会が少なくなっているのであろう。公園探検を通して、健康や安全に関わること、みんなで生活するためのきまりに関わることなど、生活上必要な習慣を身に付けさせたい。

（３）指導観

公園に調査に行くときには、「すてき」にもなぜ「すてき」なのかということを言語化させる。例えば「ロケットの形がすてき。」ではなく、「ロケットの形の中に色々な遊具が集まっていてすてき。」であると

か、「パイロットになった気分になれるからすてき。」といったように理由も加えて話せるようにしたい。

また、話し合う場面では、ただ「この公園はこんな遊具があるからすてき。」「池や自然があってすてき。」など、その公園の特徴をまとめるような活動で終わるのではなく、３つの公園を比べたり、分類したりすることによって、ある気付きと別の気付きの共通点や相違点、それぞれの関係や関連を確認して気付きの質を高めていきたい。話し合う中で答えの出る「はてな？」もあるであろうが、児童だけでは答えが出ないものや、気付きの質を高めていく中で生まれる「はてな？」もあるだろう。その解決のためにゲストティーチャー（奈良市公園緑地課、自治会長など）に話を聞いたり、質問したりできる時間を設定しておく。

そういった活動の中で気付いてほしい点は、整備されているということである。タイヤ公園の例は遊具に関わってであるが、その他にも草刈りが行われていたり、落ち葉やごみなども地域の人々や行政によって処理されていたりと、誰かによって管理・整備されているということである。それに気付くことで、公園に関して、身近な人々、社会や自然を自分との関りで捉え、公園というみんな（いろいろな世代）の場所だからこそ、誰もがずっと使えるように自分たちの公園の使い方を考え、行動化していくことができるようにしたい。

（４）ESD との関連

・学習を通して主に養いたい ESD の視点

【多様性】：３つの公園を調べ、比べることで公園の多様性に気づくことができる。

【連携性】：奈良市公園緑地課の人から話を聞き、行政と地域が協力して公園を管理していることに気づくことができる。

【責任性】：公園がこれからもきれいで安全であるためには、自分たちも公園を利用する地域の一員として責任があることに気づくことができる。

・学習を通して主に育てたい ESD の資質・能力

<コミュニケーション力>

公園の「すてき」「はてな？」を話し合う際には、理由をつけて話すようにし、発表のスキルとしてのコミュニケーション力を育てる。

<システムズシンキング>

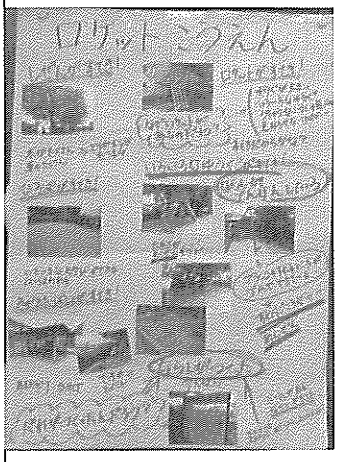
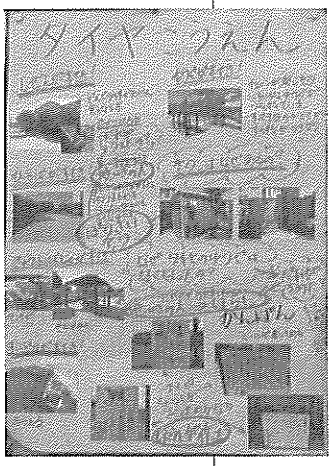
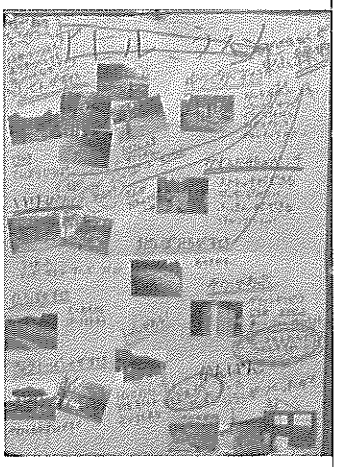
公園を様々な視点から多面的に捉えることでシステムズシンキングの基礎を育む。例えば、公園調査では利用者という視点で捉えさせ、ゲストティーチャーの話からは、管理という視点で捉えさせる。

４．評価規準

知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
①公園の「すてき」や「はてな？」を見つける。 ②身近な人々、社会や自然等の関係や関連に気付き、生活上必要な習慣を身に付ける。	①「すてき」や「はてな？」を比べたり、分類したりして考えている。 ②自分との関りで捉え、意見を言うことができている。	①意欲や自信をもって話し合ったり、ゲストティーチャーから学んだりしている。

５．単元展開の概要

全１２時間

主な学習活動	学習への支援	◇評価　・備考
１．めざせ！こうえんはかせ！！ 公園について知っていることを発表する。 ２．こうえんちょうさ①～③ 「すてき」や「はてな？」をさがす。 ↓ こうえんちょうさで気づいた「すてき」や「はてな？」を話し合う。 ※３つの公園で調査→話し合いをそれぞれ行う。	・校区にある公園の名前を確認したり、どんな遊具があるかを聞いたりして、公園について思い出せるようにする。 ・気づきが足りないと思われる児童には声をかける。 ・振り返りのために写真を撮っておく。 ・「すてき」や「はてな？」について写真を確認しながら確認する。 ・比べたり、分類したりすることによって、共通点や相違点、その関係や関連を考えることができるようにする。 ・次回のゲストティーチャーへの質問も考えておく。	①公園の「すてき」や「はてな？」を見つける。（知・技） ①「すてき」や「はてな？」を比べたり、分類したりして考えている。 ②自分との関りで捉え、意見を言うことができている。 （思・判・表）
  		
３．こうえんをつくる人に聞いてみよう。 ４．こうえんをこれからも楽しくつかおう。	・奈良市公園緑地課との事前の打ち合わせで児童の質問なども確認しておく。 ・自分たちで調べたことやゲストティーチャーからの話を振り返りながら、考えられるようにする。	①意欲や自信をもって話し合ったり、ゲストティーチャーから学んだりしている。（主） ②身近な人々、社会や自然等の関係や関連に気付き、生活上必要な習慣を身に付ける。（知・技）

６．成果と課題

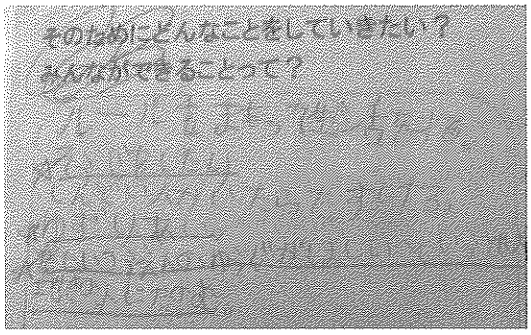
今回の実践による成果を次の３点から考察を述べる。(1)行政と地域の連携について、(2)対話的で深い学びについて、(3)児童の変容についてである。

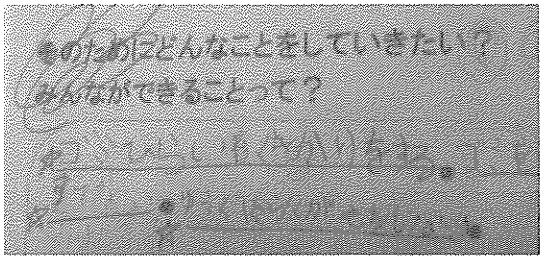
(1)行政と市民の連携について

児童は公園探検をしていく中で、「木が倒れないように補強してある。」、「花が植えてある。」、「草刈りがされている。」といったようなことを見つけ、「誰かが公園を管理している」ということに気付いていった。そして、どの公園にも設置されている看板に「奈良市」や、「奈良市公園緑地課」と書かれているのを見つけ、「公園は奈良市が管理しているのではないか。」という予想を立てることができた。そこで、奈良市公園緑地課の職員から話を聞くことで、公園は奈良市と地域の人が協力して管理しているというつながり（連携性）に気付くことができた。さらには、自分たちと地域、そして奈良市との関係について構造的に考える児童も出てきた。

例えば「タイヤ公園のタイヤがなぜなくなったのか。」という疑問に対して、学習前には「誰かがけがをしたらしい。」といった噂でしか理解をしていなかったが、自治会から「劣化により危ない」という要請を受け、奈良市が撤去を行ったという事実を知り、「新しい遊具を自治会長さんにお願いしてもらいたい。」と振り返りに書いている児童も見られた。これは、システムズシンキングの基礎が育まれたと考えられる。

また、今回調べた３つの公園は、それぞれ街区公園・児童公園・緑地と別れており、遊具だけでなく健康に配慮したベンチや屋根付きの休憩所なども設置されていたり、池や遊歩道など自然を活かしていたりと、公園が子どもだけでなく地域の人みんなの憩いの場所になっていることに、公園の多様性の良さにも気付くことができた。





(2)対話的で深い学びについて

自分が見つけた公園の「すてき」を話す際には、理由もつけて話すようにしていたので、調べる段階から気付きの質や発表のスキルとしてのコミュニケーション力の向上は図ることができた。さらに、３つの公園を調べるために、「調べる→共有する」を繰り返すことで、段々と質の高まりを感じることができた。また、「ブランコの座るところがゴムになっている。」と気付いた児童に対して「学校のブランコは座るところがかたいけど、これなら安全だね。」と話していたり、「防」の文字がついた倉庫を見つけ、「学校にも同じ文字がついた倉庫があったよ。」と学校に帰って、何が入っている倉庫なのかを確かめたりと比較をしながら対話的に活動し、質の高い気付きを見ることもできた。

(3)児童の変容について

最後に、自分たちにできることを考える場面では、「ごみを拾う」であるとか「自治会の草刈りや落ち葉拾いに参加する」など、公園をきれいにする地域の活動に参加したいと多くの児童が書いていた。これは、公園を利用する地域の一人としての責任性の芽生えや、誰もが公園を気持ちよく使えるようにといった世代間公正の価値観を少し持つことができたと考えられる。このことから、本実践を通してSDGsの目標11【住み続けられるまちづくりを】達成していくための素地を低学年ながらに育成することができたと考える。

やかげ小中高こども連合（ＹＫＧ６０）　実践報告

一般社団法人やかげ小中高こども連合
共同代表　　室　貴由輝

【概要】

やかげ小中高子ども連合は、矢掛の小中高生が矢掛町をより好きになるために、自分たちでできること、したいことを見つけ、それを実現していく活動を行っている団体です。子どもたちの主体的な活動を大切にし、地域の大人や学校の教員が、その活動を見守り、サポートしています。異年齢の子どもたちによる活動は、大人の想像を超えた視点や発想を生み出すとともに、それぞれの年代の子どもたちに新たな気づきや学びが起こっています。

【設立の経緯】

平成 25 年 9 月に矢掛商店街・やかげ文化センターで開催された「全国町並みゼミ矢掛分科会」において、矢掛小学校・矢掛中学校・矢掛高校の有志メンバーが矢掛のまちや歴史について紹介し、まちづくりの新たな提案を行いました。これをきっかけに地域に密着した商いが、いつまでも続けられ、住民の快適な生活が確保できる魅力的な町並みを作るために、こどもの視点からさまざまな提案を行ったり、行事に企画参加したりするプロジェクトを実施しよう「小中高こども連合」が結成されました。

また、平成 26 年 5 月には、自分のふるさとを大好きだといえる、自分たちにできることを考えて、自分たちで行動できるそんな子どもたちが増えてほしいという思いから、矢掛町合併 60 周年記念の一つとして「矢掛で育つ子どもの未来についてはなすカフェ」が開催されました。矢掛町を知り、矢掛町から学ぶことを通して、地域の中で自分も何かやりたいという気持ちを強くした子どもたちが実行委員になりました。この実行委員のメンバーと「小中高こども連合」のメンバーがほとんど同じであることから、「小中高こども連合」と「矢掛で育つ子どもの未来についてはなすカフェ」の活動が合流し、「やかげ小中高こども連合」となり、その中心メンバーが「ＹＫＧ６０」という名称で活動することになりました。

【活動の様子】

毎年 5 月に全体会を開き、1 年間の大きな活動内容を決めます。年間を通して各自が取り組みたいテーマを決め、活動内容ごとにチームを構成します。このチームには小学生、中学生、高校生が混在し、活動の内容について話し合います。最初は学校種ごとに分かれていますが、徐々にそれぞれの意見や考えを取り入れ、計画はまとまっていきます。このチームでの活動は、あくまでも主として取り組む活動で、他のチームが企画している活動にも自由に参加できます。また、途中でチームを変わることも可能です。

全体会以降は、月に 1 回土曜日の午後に活動日を設定しています。ここではチームごとに計画にもとづいて活動しますが、部活動やその他の学校行事や地域行事等で参加できない児童生徒もいますが、参加した生徒で活動を進めていきます。まったく計画通りに進まないことや、チームによっては参加者がいないこともありますが、計画通りに進めることを求めません。大人は、非常に広い囲いのなかで自由に活動するのを『放牧』という感覚で見守ります。最終的に計画したことが年度内にできないことや、大きく形が変わることもあります。非常にしばりの緩い活動です。逆に計画したイベント前になると自分たちで日程を調整して集まり、準備をすることもあります。

活動の内容によっては、費用が必要になったり、外部機関との連携が必要になったりする場合があり

ますが、そのような際に大人スタッフが、必要に応じて経費を支払ったり、関係事業所に連絡をとったりします。最近では中高生が、直接事業所に連絡をとり、話を進めていることもあります。

このような活動を小中高生が一緒に行っていくことで、それぞれの立場や年齢に応じた考え方を尊重し、互いに刺激し合いながら成長していきます。目標としていた企画や行事が終わったあと、年度末に振り返りを行いますが、計画通りに活動が進まなかったり、まったく実現しなかったりした場合でも、子どもたちには大きな変容がみられます。

平成30年7月の「西日本豪雨災害」は、矢掛町にも甚大な被害をもたらしました。また、矢掛高校には、真備町から通っている生徒も多く、70名を超える生徒が被災しました。仮設住宅での生活を余儀なくされている生徒や心理的ストレスを抱えている生徒も多く、安心できる居場所として、基本的に毎日開放している。

【主な活動実績】

・やかげゴミ視察ツアー
・ＥＳＤ世界会議エクスカーション
・ごみ問題ＣＭ作成
・「やかっぴー大福」商品化、販売
・雲の上カフェ
・発達障がいを持った親子との交流会
・メテオインパクト×YKG60 ガンプラ教室
・English Day Camp in Yagage
・凸凹親子町あるき交流会アテンド
・居場所づくり事業
・「やかっぴーかき氷」商品化、販売
・消しゴムはんこワークショップ in 宿場まつり
・Re:アートプロジェクト
・矢掛町生涯学習課×YKG60「やかげお勧めツアー」
・岡山大学国際オフィス L-café×YKG60
・Inaka walk in Yakage
・自然のなかで遊ぶ親子ツアーin 矢掛
・矢掛小唄踊り　置き行燈プロジェクト
・リユース食器事業
・矢掛ダヨ！全員集合　イエーイ夜市

【育まれた力】

一人ひとりが自分の得意なことを活かし自分軸で動き、また他の人の得意な力を借りて協働する力がついています。矢掛という地域で自分のやってみたいことを表現していく力が育ち、地域の人との交流により、年代を超えた人との多様なつながりができ、地域のために何かしたいという想いや郷土愛が育まれています。現代社会の課題を自分事としてとらえ、主体的に課題解決のために自分ができることを考えようとする姿勢が育っており、これからの地域を支える人材として周囲からも期待されています。

【受賞歴】

・「第３回岡山高校生ボランティアアワード」大賞受賞（H28/02/11）
・「第４回岡山高校生ボランティアアワード」大賞受賞（H28/09/19）
・「ESD 岡山アワード 2016」岡山地域賞受賞（H28/10/29）
・矢掛町「末永三喜太賞」受賞（H28/11/05）
・総務省「ふるさとづくり大賞」総務大臣賞受賞（H29/02/04）
・パナソニック教育財団「子どもたちの“こころを育む活動”」優秀賞受賞（H29/12/20）
・「第２６回コカ・コーラ環境教育賞」活動表彰部門　優秀賞受賞（R1/8/）
・岡山県教育関係功労者表彰（R1/11/1）

第１学年　総合的な学習の実践報告

指導者　橿原市立畝傍中学校
教諭　　東前　光二

１．単元名

畝中フェスタ

２．単元の目標

・わたぼうしコンサートを見ることで、障害を持たされた人のための多くの活動や手話を知る機会とする　…（知識・技能）

・特別支援学級生による音楽発表と３年生による畝傍夜間学級の報告をするなど、活動や学習内容を表現する場とする。またそれを全校生徒が聞く中で、発表する者の思いを知り、理解しようとする心を育てる　…（思考・判断・表現）

・手話のレリーフ作りをすることで関心を強め、これからも学んでいく姿勢に繋げていく　…（主体的に学習に取り組む態度）

３．単元について

（１）教材観

世の中には様々な個性を持った人達が様々な形で繋がっていて、それは別の世界の話ではなく自分の身近なところにある。フェスタを通して人権に関する多くの発表を見聞する中で様々な人たちの思いに触れ、成長していってほしいと思う。

（２）生徒の実態

本校は人権教育を大切にしており、３年間を通して様々な人権教育に取り組むためのカリキュラムを作成している。障碍者差別、部落差別、在日朝鮮人差別、男女差別、人種差別などについて計画を立てて学んでいるが、その学びや発表の場として「畝中フェスタ」という行事を行っている。全学年が体育館に入って行っている。学年により学びの深さには多少の差はあるが、常日頃から人権に関する取り組みを行っているので、生徒達の学ぼうという意識は高く、より深い人権感覚を養うための良い機会になっている。

（３）指導観

・外部から来て頂いた「わたぼうしコンサート」の方の思いをしっかり受け止め、積極的にコンサートに参加できるようにさせたい。

・特別支援学級の生徒の発表や３年生の有志が夜間学級の生徒さんから学んだことの発表をしっかりと見ることで、学習することの大切さを学ばせたい。

（４）ESD との関連

・学習を通して主に養いたい ESD の視点

【連携性】：様々な立場の人の発表を見ることで、より多くの人と繋がり、思いを共有することができる。

【責任性】：レリーフ作りを通して皆が協力し、学校の財産となる物を残すことができる。

・学習を通して主に育てたいESDの資質・能力

様々な立場の人と関わることで相手を理解し、どのような立場の人ともコミュニケーションをとれる力を身につけさせたい。

４．評価規準

知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
・わたぼうしコンサートや特別支援学級の発表を通して、障碍者の思いを知り、理解しようとする態度を養う。 ・夜間学級で学ぶ人たちの思いを知り、学習することの大切さに気づかせる。	・特別支援学級の生徒達は自分達の音楽活動を発表することで、自分の思いを表現する力を養う。 ・３年生の有志は夜間学級の生徒さん達の思いを知り、それを如何に確かに全校生徒に伝えればよいかを考え、表現する力を養う。	・学んだことをその時だけに終わらせるのではなく、後の畝中生に伝えるためにレリーフという形で残せるよう皆で協力する態度を養う。

５．単元展開の概要

全８時間

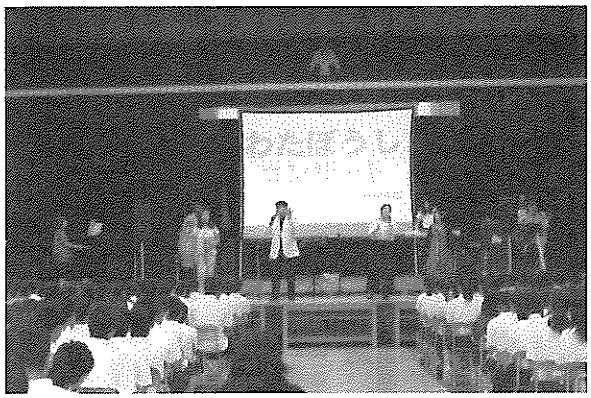
主な学習活動	学習への支援	◇評価　・備考
１．わたぼうしコンサートを見る。	・ＰＴＡの方に協力して頂き、コンサートのための準備を進める。事前に活動内容を聞き、生徒に紹介して事前学習をする。	わたぼうしコンサートや特別支援学級の発表を通して、障碍者の思いを知り、理解しようとする態度を養う。（知・技）
２．特別支援学級の生徒の発表を見る。	・日頃から特別支援学級の生徒の活動の様子を紹介し、フェスタに向けて他の生徒が盛り上げてくれるよう雰囲気作りをする。	特別支援学級の生徒達は自分達の音楽活動を発表することで、自分の思いを表現する力を養う。（思・判・表）
３．３年生による夜間学級の生徒さんとの交流で学んだことの発表を見る。	・３年生と夜間学級の生徒の交流のための連絡を密にとり合う。他の生徒に活動内容が伝わり易いように映像などを交えての報告ができるよう準備する。	特別支援学級の生徒達は自分達の音楽活動を発表することで、自分の思いを表現する力を養う。（知・技） ３年生の有志は夜間

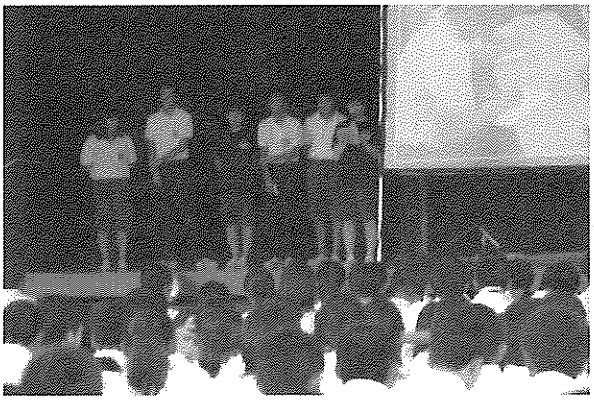
		学級の生徒さん達の思いを知り、それを如何に確かに全校生徒に伝えればよいかを考え、表現する力を養う。（思・判・表）
４．指文字のレリーフ作りをする。	・全員が作業し易い教材を使い、レリーフ作りを担任が指導して完成させる。出来上がったものを生徒昇降口前に掲示し、達成感を味わわせる。	学んだことをその時だけに終わらせるのではなく、後の畝中生に伝えるためにレリーフという形で残せるよう皆で協力する態度を養う。（態度）

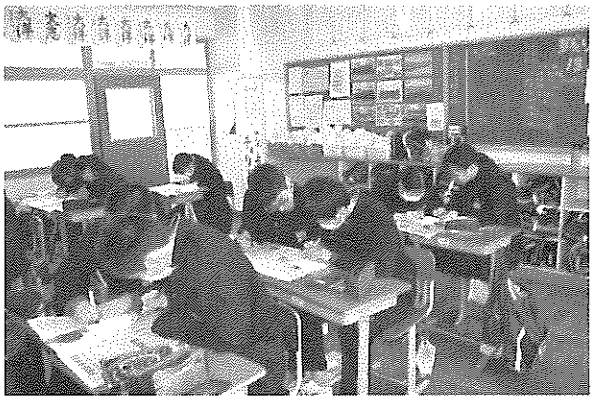
６．成果と課題

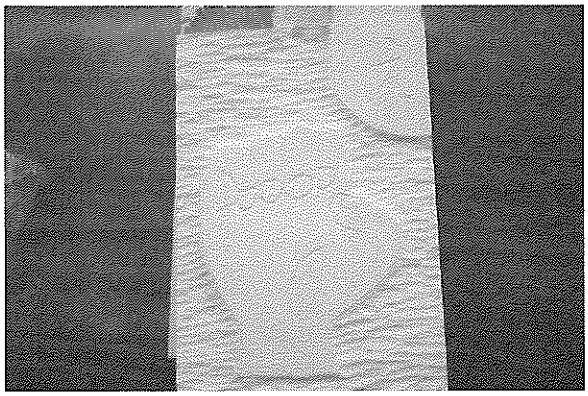
・世の中には様々な個性を持った人達が様々な形で繋がっていて、それは別の世界の話ではなく自分の身近なところにある。みんなが幸せに生きていくためには相手のことを見た目で判断するのではなく、相手の個性を知り、理解しようとする心が大切だということに気づいた生徒が多かったように思う。
・自分たちは今まで当たり前のように学習してきたが、学習する機会を持てなかった人達の声を聞くことで実はとてもありがたいことだと気づき、学習することの大切さに気づいた生徒が多くいた。
・指文字のレリーフを作ることで、手話に対する関心を強めることができた。またそれを校内に掲示することで、畝傍中学校のこれからの活動の中に手話に対する取り組みを長く続けていく良い機会にしたい。
・保護者の方に生徒達の生き生きとした発表を見てもらうことで、畝傍中学校では生徒達にどんな力をつけていきたいかを知って頂く機会にすることができた。
・わたぼうしコンサートについてはＰＴＡの方が積極的に関わって頂き、連絡を取ったり準備に協力して頂けた。学校とＰＴＡが協力して、生徒達に学びの機会を持たせることができた。
・夜間学級の発表に当たり、生徒が積極的に地域や地域外の大人の方と交流する機会を持つことができ、地域のイベントにも生徒が参加できるよう声を掛けて頂けた。
・校内に指文字のレリーフを掲示することで、来校された保護者の方に畝傍中学校が手話への取り組みも大切にしていることを知って頂き、関心を持って頂く機会にすることができた。
・わたぼうしコンサートを学校で開催することは今までになかったので連絡方法や取り組みの仕方について悩んだが、自分たちの力だけで進めるのではなくＰＴＡの方の力を借りることで、スムーズに計画を進めることができた。学校という狭い世界に拘るのではなく、広く門戸を開放して物事を進めていくことが大切だと思った。
・わたぼうしコンサートで知る機会を得た指文字をレリーフにすることで、生徒達に手話をより身近なものに感じさせることができた。

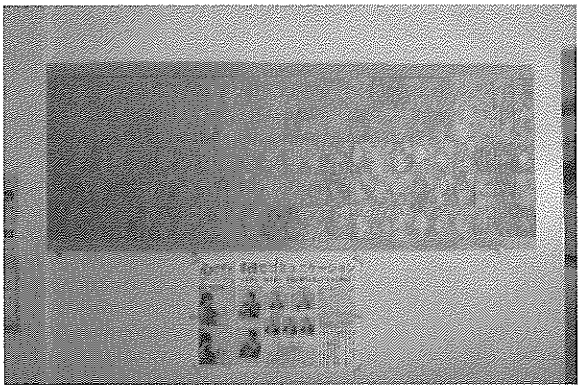
・今年度初めてわたぼうしコンサートを学校に招致することができたが、この取り組みを１年限りのものにするのではなく、長く取り組めるものにしていきたい。またＰＴＡと協力して進めることができたのを良い経験として、これからも多くの機会に保護者や地域の方達の力を借りながら、より良い学びの機会を多く持てるようにしていきたいと考える。











ユネスコ協会 ESD パスポートの活動について

エリーニ・ユネスコ協会　　藤井伸二
(大阪府ユネスコ連絡協議会ユネスコ協会 ESD パスポート専門委員
大阪府立北摂つばさ高等学校教員)

はじめに　個人的経過

ユネスコ協会　長い歴史のある団体。個人的には断続的かつ部分的な関わり。

全国ユネスコ指導者研修会という高校生全国大会に関わる。　(1993～2002 年)

その後、この高校生全国大会が途絶え、その後ユネスコスクールがスタート。

個人的には、2007 年に二校統合で開校する高校に転勤。

2011 年 4 月から東日本大震災復興支援を組織し、米田伸次先生と再会する。

2012 年夏、創立 6 年目の勤務校が震災復興活動を軸にユネスコスクール登録される。

2013 年 6 月 23 日　日ユ協連主催の ESD パスポート制度設計に少し関わる。

2013 年 10 月　　大阪の複数の高校で ESD パスポートを導入(今年度で 7 年目)

I　ユネスコ協会 ESD パスポートとは

内容あ　ＥＳＤパスポート　「学校と地域が連携して生徒の社会貢献活動を促進する」

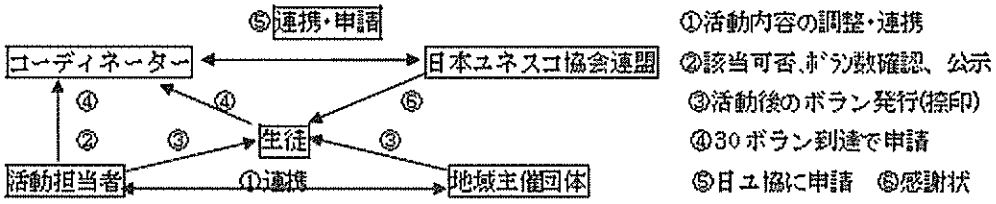
① 生徒が地域の団体が主催する社会貢献活動に参加する　あるいは学校主催で地域と連携して社会貢献する。

② 活動参加時間をポイント化し記帳、主催者が確認する。2 時間未満で 1 ボラン、2 時間以上で 2 ボラン。

③ ３０ボランに達したらコーディネータが確認のうえ、日本ユネスコ協会連名に申請用紙を提出する。日本ユネスコ協会連盟、又は連名加盟のユネスコ協会からボランティア認定証が発行される。調査書などに記載できる。

④　活動の記録は、入学時から現在までの活動をポイント化する。来年度以降の展開は効率化を工夫する。本人申告による地域ボランティア活動の実績：
担任が確認できれば担任の捺印で記載する。

取り扱い方法



活動担当者	あ　活動コーディネート、必要に応じて公示 い　該当可否、ボラン問い合わせ→ＵＳコーディネータ へ う　生徒のパスポート記入を指導 え　確認の捺印、または、サインによるボランの発行 お　発行ボランの一覧表→ＵＳコーディネータ へ
(担任)	あ　本人申告の地域ボランティアの確認 い　該当可否、ボラン問い合わせ→ＵＳコーディネータ へ う　生徒のパスポート記入を指導 え　確認の捺印、または、サインによるボランの発行 お　発行ボランの一覧表→ＵＳコーディネータ へ
ＵＳコーディネータ	あ　該当可否、ボラン数の判断 い　３０ボランに到達した生徒の申請書の記入指導、申請手続き
地域主催団体	あ　活動の承認印の発行（必要に応じて）
日本ユネスコ協会連盟	あ　感謝状の発行

Ⅱ　大阪におけるユネスコ協会 ESD パスポートの実施経過

年度	日付	国、日ユ協、大阪のユ協	北摂つばさ高校を中心に大阪の高校の動き	晴	鶴	今	追	春	KI	佐	泉	市	西	能	羽	つ	松
2013	6月23日	**日ユ協の制度設計会議**	北摂つばさ高校から報告(気仙沼ボランティア)														
	6月28日	(いじめ防止対策推進法成立)															
	8月23日		つばさ高校生徒指導研修で社会貢献打ち出す														
	10月24日		ESDパスポートを職員会議で提案														
	11月23日	(近畿ブロック研究会)	北摂つばさ高校・箕面ユ協から報告														
	12月24日		北摂つばさ高校終業式でESDパスポート配布														
	1月26日	**エリーニ ユネスコ協会主催**	ESDパスポート体験発表会(コリア国際学園)						○			○			○	○	○
	1月31日		北摂つばさ高校、親切、社会貢献を軸にいじめ防止方針														
	3月31日	**日本ユネスコ国内委員会「多様化の時代におけるユネスコ活動の活性化についての提言」**															
2014	4月1日		北摂つばさ高校、生徒手帳にESDパスポート編入														
	11月4-8日	(ユネスコ世界大会　岡山)															
	12月21日	エリーニ ユネスコ協会主催	ユネスコスクール交流会(One World Festival for Youth)														
	2月8日	エリーニ ユネスコ協会主催	ESDパスポート体験発表会(One World Festival)		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
2015	6月28日	**大阪府ユネスコ連絡協議会設立**															
	12月26日	**大阪府ユネスコ連絡協議会主催**	ESDパスポート体験発表会	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○
			(One World Festival for Youth)高校生90他計120名														
2016	12月23日	大阪府ユネスコ連絡協議会主催	同上　高校生82他計117名	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○
2017	12月23日	大阪府ユネスコ連絡協議会主催	同上　高校生80他計105名	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○
2018	12月24日	大阪府ユネスコ連絡協議会主催	同上　高校生54他計85名	○	○		○	○	○	○	○	○		○	○	○	○
2019	12月15日	大阪府ユネスコ連絡協議会主催	同上　高校生51他計71名	○	○		○	○	○	○	○	○		○	○	○	

2013-14 年　エリーニ ユネスコ協会が主催してユネスコスクールの高校を組織
高校とそれぞれの地域ユ協との関係で ESD パスポートを運用できるか。
市毎に組織されるユ協で、都道府県立が多い高校を組織できるか。
地域ユ協が高校を組織することは、持続可能か。

Ⅲ大阪における高校ユネスコスクールを組織するプラットフォーム

2013 年までに複数の中学高校が震災ボランティアに取り組んでいた。
子どもの変容を実現している実践を持続させるべく支援すれば
ユネスコスクール共通のプラットフォームになるのではないか。

2015 年 6 月 28 日大阪、エリーニ、堺、箕面の 4 ユ協で大阪府ユネスコ連絡協議会を結成。
老舗である大阪ユネスコ協会の中馬弘毅会長が府ユ連会長に就任
➡ESD パスポートで震災ボランティアをはじめとした活動を支える。
➡高校教員、更に小中学校教員と府ユ連が連携できる。
➡年間 4 回程度、担当者会議を実施させていただく。
➡高校教員、小中教員の実務能力とネットワーク力を引き出す。
➡ESD パスポートを体験発表会、報告書を三点セットで運用中。
➡報告書は府立図書館、国会図書館に寄贈.成果物の蓄積を継続中。

Ⅳ日本ユネスコ国内委員「多様化の時代におけるユネスコ活動の活性化についての提言」

この文書(2014 年 3 月 31 日)で、ユ協とユネスコスクールの連携で若者のユネスコ活動への参加を促すこと、NPO 等の多様な活動をユネスコの目標実現のための活動として位置づけること、等が提言されている。そのためのツールとしてユネスコ協会 ESD パスポートが設計されたと理解している。その活用に拘ることで、幅広い高校生の活動を引き出し、その延長上にユネスコ活動への若者の参加拡大を実現したい。

服のチカラを、社会のチカラに。

株式会社ファーストリテイリング

ファーストリテイリングのサステナビリティ活動について

環境負荷の増大、貧困、難民問題、人種差別、テロ、地域紛争など、世界では今、一刻の猶予も許されない問題が山積しており、人類の長期的な生存自体が危ぶまれています。これらの課題解決に向けて、国連は 2015 年 9 月、「SDGs（持続可能な開発目標）」を加盟 193 カ国 すべての合意で採択。「（世界中の人々が）共同の旅に乗り出すにあたり、誰も置き去りにしないことを誓う」というメッセージを発するとともに、国際機関と自治体、NGO・NPO、企業が協働して目標を達成していくことを目標の一つに位置づけました。

ファーストリテイリンググループにおいても、世界各地の取引先工場を含むすべての従業員が不平等なく、安全で働きがいのある労働環境を実現していくこと（目標 8）、大量生産に伴うエネルギー消費量や二酸化炭素排出量を削減し、かつ長く着られる上質な服をつくっていくこと（目標 12）などは、グローバルな事業を営むうえで重要な課題です。

そこでファーストリテイリングは、長年にわたってこれらの課題解決を目指して取り組んできた、社内外のステークホルダーとの協働を一層強化していくため、「服のチカラを、社会のチカラに」というサステナビリティステートメントを策定し、People,Planet,Community の 3 つの領域を軸に取組みを行っています。

■People

人権を尊重し、安心・安全な労働環境と、
一人ひとりがいきいきと輝ける成長の場を提供します。

■Planet

環境負荷の削減で持続可能な事業を実現し、
本当に安心して買える服を提供します。

■Community

服を着る喜び幸せ、暮らしの充実に繋げ、
調和ある発展を実現します

ESD への取り組み

ファーストリテイリングが行う次世代教育プログラム

“届けよう、服のチカラ”プロジェクト

活動内容

“届けよう、服のチカラ”プロジェクトは、ファーストリテイリング（ユニクロ・ジーユー）と国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）とのパートナーシップのもとに取り組む、児童生徒向けの体験学習活動です。

プログラムは、大きく分けて「出張授業」と「子ども服の回収活動」の２つ。

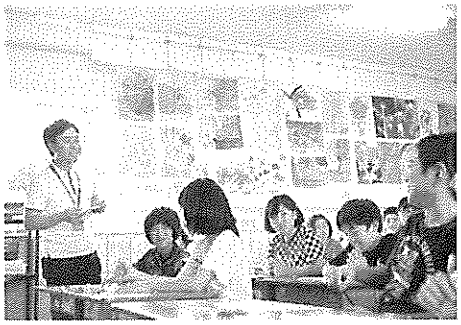
出張授業では、学校の近隣の店舗従業員が講師を務め、世界の難民問題について提起します。授業ではクイズやワークを使い、「いま私には何ができるのだろうか？」と児童生徒が、「世界と自分とのつながり」を熟考する機会を、服の回収活動では、誰に呼びかけるか、どのように回収するか、児童生徒が自由にアイデアを出し合い実行する機会をつくっています。

集まった子ども服は、UNHCR を通じて、世界中の難民キャンプ等で服を必要としている人々に届けられます。回収して終わりではなく、活動の最後には、難民キャンプへ服を届けた様子の写真を学校にフィードバックし、活動の振り返りに使用いただいています。

活動開始の経緯

「服」の生産から販売までを担う企業の責務として、服の価値を最後まで最大限活かしたいという想いから、店舗にて、着なくなった商品の回収活動を 2006 年から開始。回収した服のほとんどがまだ着られる状態であったことから、世界で服を本当に必要としている難民キャンプ等の方々へのリユース支援を始めました。

しかし、難民キャンプで生活を送る約半数は 18 歳未満の子どもであり、寄贈連携機関から来る服の要請は「子ども服」が多くの割合を占めています。そこで、地域の学校と協働して子ども服を回収する活動を考案。身近な「服」を通じて、子どもたちに国際課題に目を向け、自分たちにも出来る社会貢献があると気づくきっかけにして欲しい、プロジェクトを通じて ESD で育むべき思考力や分析力、コミュニケーション力などを身につけて欲しいという想いもあり、2013 年度から現在の“届けよう、服のチカラ”プロジェクトを開始しました。



実施対象学年　小学校 1 年生～高校 3 年生
（特別支援や盲学校、定時制等含む）

授業に要する時間　出張授業：45～60 分
回収活動：学校のニーズに合わせて時間数選択可能

実績

2013 年度の開始以降、毎年参加校が増加。2019 年度は、46 都道府県から 442 校、約 4 万人の児童生徒が参加してくださっています。2013 年度の開始時から、これまで延べ 1889 校、約 20 万人の児童生徒が参加しています。

出張授業には近隣店舗の従業員の参画を図ることで、児童生徒が地域で働く社会人と接し、企業や仕事に興味を持つ機会にもしていただいています。『「世界」や「平和」というのは大きなテーマですが、児童生徒にとって慣れ親しんだユニクロ・ジーユー、そして身近な服を入口とすることで、「自分にも何かできるかもしれない」と児童生徒が勇気を持てた』という声を担当教員の皆様からもいただいています。

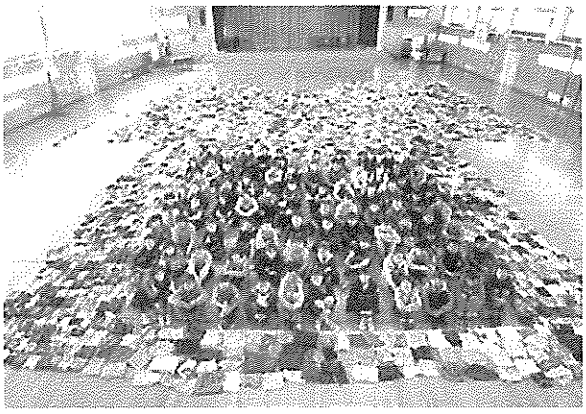
また、服の回収活動は、チームで協力し試行錯誤しながら考えることで、児童生徒が自ら積極的に行動するきっかけにもなっています。さらに地域と協働することにより、電話や訪問等のマナー、相手の立場に合わせた伝え方の必要性などの気づきや学びが生まれ、課題解決能力が育成されます。また、協力してくれる地域の人の姿や集まった服を見ることは、児童生徒の達成感や自己有用感にもつながっています。

奈良県での参加実績（2017 年以降）

2019 年　大和郡山市立片桐西小学校
五條市立北宇智小学校
奈良市立飛鳥小学校
大和郡山市立矢田小学校

2018 年　私立奈良大学附属高等学校
奈良市立飛鳥小学校

2017 年　橿原市立金橋小学校
私立奈良大学附属高等学校
奈良市立飛鳥小学校
御所市立葛小中学校
国立奈良女子大学附属中等教育学校



第３学年　理科実践報告

指導者　大和郡山市立郡山西小学校　教諭　　島　俊彦

１．単元名

「身の回りの生物 ～生物多様性の保全意識を高める昆虫学習～ 」

２．単元の目標

・身の回りの昆虫と周辺の環境との関わり、成長の過程や体のつくりについての理解を図り、複数の昆虫を観察しながら観察する技能を身に付けることができる。（知識・技能）

・身の回りの昆虫について追究する中で、差異点や共通点を基に、昆虫の成長について問題を見いだし、表現することができる。（思考・判断・表現）

・身の回りの昆虫を愛護しようとしたり、主体的に問題解決しようしたりすることができる。（主体的に学習に取り組む態度）

３．単元について

（１）教材観

本内容は、指導区分「B 生命・地球」に当てはまるものである。児童が校庭や地域などに生息する昆虫を探したり飼育したりして観察する活動などを通して、昆虫と環境との関わりや昆虫の成長のきまりや体のつくりについて理解することを目標とする。

本内容における学習対象は、昆虫である。共通の学習経験を保障するという観点から、実際の指導においては、校庭を観察範囲に設定し学習を進める。本校の校庭には、畑や池、草木の多いところなど、昆虫が生息する条件の整った場所が幾つかある。そのため、どのような場所にどのような昆虫が生息しているかを考え、実際に探しに行くことが可能である。

また本実践においては、外来種昆虫アカハネオンブバッタを教材化し、児童の生物多様性を保全しようとする価値観と行動が、どのように変容するのかを検証することを目的に研究を展開した。学習過程や評価の詳細については、当日の報告にて示す予定である。

（２）児童観

本学級の児童は、理科学習に対して好意的な態度で授業に取り組む者が多い。１学期には、身の回りの生物を観察したり、自然の事物・事象についてのメカニズムを、実験により明らかにしたりする活動を通して、理科学習の進め方を身に付けてきた。１学期は、飼育や観察を通してチョウの育ち方や、体のつくりについて学んだ。そこでは、一定の生育過程があることや、頭・胸・腹の部分によって体が構成されていることを理解した。

チョウに興味・関心をもった児童の中には、休み時間に校庭へ出て、昆虫採集に没頭する者も多くいる。また、捕ってきた昆虫は教室後方で飼育し、眺めて楽しむ児童も多くいた。一方、昆虫が苦手という児童も多数在籍しており、昆虫好きと苦手な児童に二極化されている。

（３）指導観

実際の指導に当たっては、３つのことを意識する。１つ目は、既有知識や経験を活用することである。予想の際に「校庭にはどのような昆虫が生息しているか？」「それらは、どのような場所に生息しているか？」などの問いを設けた上で、調査活動に取り組ませる。児童が自身の

既有知識や経験活用して予想を立てることで、見通しをもって調査活動に取り組めるので、観察の質も高まり問題解決の力を養うことが出来ると考える。

２つ目は、理科の見方・考え方を働かせることである。本単元では、昆虫が周辺の環境と関わって生きていること、きまった成長過程や体のつくりがあること、またそれらは一定ではなく多様であるといった生物多様性に関わる概念的知識を児童に獲得させることを狙う。児童には、調査活動や観察を通して、校庭には様々な種類の昆虫が生息していることや、同種であっても色・形・大きさが異なることを見出させたい。それらの特徴は差異点や共通点を見いだすことによって浮かび上がる事物である。児童の学びを個々に留めず、学級全体で共有し考察することによって、児童は本単元で狙う理科の見方（多様性）・考え方（比較）を働かせて問題解決を行うことが出来るようになると考える。それにより、児童が生物多様性を意識できるようになることにも期待したい。

３つ目は、生物への愛着を高めることである。学級に昆虫が苦手な児童が在籍することは前述の通りである。理由を聞くと、「昆虫の姿に気色悪さを感じる」との答えが多く挙がった。児童の苦手意識を克服するために、川上村森と水の源流館職員の古山氏に協力を請う。古山氏とﾃﾚﾋﾞ電話をつなぎ、昆虫の姿（各部位の特色）や習性などについて教えてもらう。古山氏から昆虫について専門的な知識を教えてもらったり、興味関心をひくような情報を伝えてもらったりすることによって、昆虫に対する児童の苦手意識を克服するとともに、昆虫好きの児童が更に好きになれるようにしたい。

（４）ESD との関連

・学習を通して主に養いたい ESD の視点

【多様性】…①昆虫の成長過程や体のつくりに着目し、種や種内の多様性に気付くことができる。
②生き物には外来種・在来種を含め多様な種が存在することに気付くことができる。

【相互性】…①昆虫と環境の関わりに着目し、生態系の多様性に気付くことができる。
②外来種はグローバル化の進展などによって、人為的に他国や他地域から移入された生物であることに気付くことができる

【責任性】…外来種に関する問題は、人為的に引き起こるため、生物多様性の保全に向けた責任ある行動をとる必要があるということを、理解することができる。

・学習を通して主に育てたい ESD の資質・能力

システムズシンキング…①昆虫の体のつくりと環境などを、関連付けて考えることができる。
②外来種に関する問題は、グローバル化を背景に意図的あるいは非意図的であるに関わらず人為的に引き起こるという問題の背景や実情を、多面的・総合的に考察することができる。

クリティカルシンキング…外来種問題のように、グローバル化によって人為的に引き起こる問題があることを認識し、生物多様性の保全に向けた、よりよい解決策を考察することができる。

４．評価規準

ア 知識・技能	イ 思考力・判断力・表現力	ウ主体的に学習に取り組む態度
①身の回りの昆虫は、周辺の環境と関わって生きていることを理解している。 ②昆虫の育ちには一定の順序があることや、体は頭、胸及び腹からできていることを理解している。 ③複数の昆虫を比較し観察する技能を身に付けている。	①身の回りの昆虫の様子やその周辺の環境との関わりを比較して考察し、自分の考えを表現している。	①身の回りの昆虫に興味をもち、観察しようとしている。 ②身の回りの昆虫に愛情をもって関わったり、生物多様性を尊重しようとしたりしている。

5．単元展開の概要

全 10 時間（⑧～⑩は発展的学習）

主な学習活動	学習への支援	◇評価
1．どこにどのような昆虫が生息しているのだろう① ・知っている昆虫の名前を出し合う。 ・知っている昆虫がどのような場所に生息しているかを考える。 ・（校庭の）どこにどのような昆虫が生息していそうかを予想する。	●担任が捕ってきた昆虫の話から学習を導入する。 ●児童の既有知識や経験をもとに話し合わせることで、予想する際の材料とする。 ●予想を確かめるために調査をするという見通しを、児童にもたせる。	ウ① （主体的）
2．昆虫を採集し観察しよう②③ ・校庭に出て、昆虫採集をする。 ・捕ってきた昆虫を観察し、カードにまとめる。 ・カードを校内地図に貼って共有し、気付いたことについて話し合う。 ・話し合いを通じて挙がった問いについて考える。	●観察対象の昆虫を捕まえさせる。 ●細部まで観察できるよう、観察カップを使用させる。 ●色・形・大きさに着目させる。 ●カードが貼られた校内地図をもとに昆虫のすみかと暮らしの関連について考察させる。	ア③ （知・技） イ① （思表判）
3．昆虫の体のつくりや育ちを調べよう④⑤⑥ ・幾つかの昆虫の体のつくりを観察し比較する。 ・幾つかの昆虫の育ちを観察し比較する。 ・古山さんから、昆虫の姿や習性などについて教えてもらう。	●頭・胸・腹のつくりを視点に、差異点や共通点を調べさせる。 ●昆虫観察キットやデジタル教材を活用し複数の昆虫の体のつくりや育ちを捉えさせる。 ●昆虫のすがたとくらしなどの習性や食べ物と体の口の形などの特徴について教えてもらう。	ア② （知・技） ア① （知・技）
4．昆虫カルタを作ろう⑦	●カルタで遊ぶことを通して、楽しみな	ウ②

・単元を通して学んだことを振り返り、カルタを作る。 ・作ったカルタを使って、友達と遊ぶ。	がら児童が学習内容を定着できるようにする。	(主体的)
以下、第５～７次(⑧～⑩)は、生物多様性の保全意識を高めるＥＳＤ実践として、外来種の昆虫であるアカハネオンブバッタを教材化し、研究を展開した。		
５．外来生物って何だろう⑧ ・外来生物の既有知識やイメージを話し合う。 ・外来生物とはどのような生き物なのかを理解する。	●外来生物という言葉を知っているか否かを確認し、言葉からイメージできることや既有知識を表出させる。 ●代表的な外来生物を紹介し、本来の生息国と移入の理由を把握させる。	ウ① (主体的)
６．オンブバッタを採集し調査しよう⑨ ・オンブバッタを捕獲し、在来種と外来種を識別する。 ・アカハネオンブバッタの移入経路や拡散状況を確認する。	●身の回りにいる外来生物としてアカハネオンブバッタを紹介する。 ●捕獲調査前に、在来種と外来種のどちらが多いか予想を立てさせる。 ●結果を基に話し合わせる。	ア③ (知・技) イ① (思表判)
７．外来種との付き合い方を考えよう⑩ ・外来生物による生態系などへの影響について話し合う。 ・在来種を守るために自分たちにできることを考える。	●外来生物が増加することでどのような影響があるかを考えさせる。 ●外来生物に関する問題の原因が人為的なものであることを確認する。 ●自分達にできることを考えさせる。	ウ② (主体的)

６．成果と課題

本実践で得られた成果は２点である。１点目は児童にとって身近な昆虫を教材化することが、生物多様性について実感を伴った正しい理解を児童に促すとともに、保全意識を高める上で効果的であることを、授業実践と評価を通じて明らかにしたことである。２点目は小学校第３学年理科単元「身の回りの生物」において、外来種を扱った具体的な学習過程及び学習方法を提示できたことである。

	実践前	実践後	児童の記述（代表的なものを筆者抜粋）
多様性	６名	２４名	・外来種とは、外国などからきた生き物。アライグマ、アカミミガメ、アメリカザリガニ、マングース、ブラックバスなどの生物がいる。　など
相互性	０名	１４名	・外国から船やひこうきで来た生き物。他の国から人の手で持ちこまれた外来種がふえているのは、もとをたどれば全て人間が悪い。外来種は自分で来たくて来たわけじゃない。　など
責任性	０名	１４名	・在来種同士を交尾させることなど、外来生物を増やさないように自分たちにできることを考えて、本当にやりたいと思いました。　など

また、課題も挙げる。それは教科教育におけるＥＳＤの展開である。上記の図のように、本実践における児童の価値観の変容を確認することはできたが、行動の変容までを評価することが出来なかった。ＥＳＤは価値観と行動の変革を標榜する教育である。教科横断的な視点で児童の学びを繋ぎ、行動化を促す時間や場の設定をすることが必要であると考える。この点は、今後の研究課題としたい。

第5学年総合的な学習の時間 学習指導案

福岡市立田隈小学校
遠入 哲司

1. 単元名 「自然からのメッセージ」

2. 単元の目標

・自然に生きる生き物の現状について調べ，プラスチックごみが大きな影響を与えていることに気づく。
（知識・技能）

・プラスチックごみと海の生き物とのかかわりについて調べ，関連付けて説明すると共に，生き物の現状を改善するために，プラスチックごみを減らす方法について自ら証拠を探し，考えを作りだすことができる。
（思考・判断・表現）

・生き物を守るために，プラスチックごみを減らす方法を考え，周りの人と共に行動しようとすることができる。
（主体的に学習に取り組む態度）

3. 単元について

（教材観）

日本は早くからリサイクルに力を入れ，環境教育にも積極的に取り組んできた。その結果，ペットボトルの分別回収などに取り組んでいる人は多い。一方で，現在はプラスチックごみによる海洋汚染が問題となっている。これは，プラスチックごみが投棄されていることや，プラスチックのリサイクルが十分ではない（マテリアルリサイクル 23%，ケミカルリサイクル4%，発電によるリサイクル 56%）こと，回収されたもののプラスチックごみがリサイクルされずに放置されていること等が原因と考えられる。放置されたプラスチックや細かく分解されたマイクロプラスチックが海に流れ出し，それを摂取したり，絡まったりした多くの海の生き物が落としている。それだけではなく，プラスチックごみを摂取した魚をさらに人間が食べることによる人体への影響も叫ばれるようになってきた。プラスチックごみへの対応は，海に住む生き物だけではなく，世界中にとって深刻な課題であるといえる。

本校の校区では，15 年前から学校のすぐ横を流れている室見川水系河川清掃が行われており，毎年，河川のごみ拾いに取り組んでいる。また，以前から廃油石鹸の制作等，環境問題に積極的に取り組む方々がおり，このような活動を子ども達にも広めたいという願いをもっている。

本校区で，プラスチックごみの問題について取り上げることは，世界で起きている課題と身近な人々が行っている活動を関連付けて考えることができること，身近な調査活動が可能であること，また，このような活動に参加できる環境があることなどの点から意味があると考える。

SDG's ④「質の高い教育をみんなに」
⑪「住み続けられるまちづくりを」
⑫「つくる責任つかう責任」
⑭「海の豊かさを守ろう」
⑰「パートナーシップで目標を達成しよう」

（児童観）

本校の児童はまじめであり，学習状況調査のデータによると，「困っている人がいたら助ける」「人の役に立つ人間になりたい」「校区のよさを外国の人などに伝えたい」などと回答する割合が非常に高く，よりよい社会のために積極的にかかわろうと考える子どもは多い。しかし，一方で，「身近な地域の活動に参加している」と回答する割合は低く，実際に，主体的に社会にかかわろうとする姿はあまり見られない。

学習については，「総合的な学習の時間では，自分で課題を立てて情報を集め整理して，調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいる」「学級の友達との間で話し合う活動を通じて，自分の考えを深めたり，広げたりすることができていると思う」と回答する割合が高く，総合的な学習の時間における，調査，表現，交流などの活動を好む傾向がある。

この学習を通して，プラスチックごみの問題について取り上げることで，自ら調べ，話し合い，課題を解決しようとする能力が育つこと，また，これらの活動を通して，校区のよさを認識し，これからも校区のよさを続けていこうとする態度が育つと考えられる。

（指導観）

指導に当たっては，次の３点の工夫を行う。

○ルーブリックの活用

ルーブリックを活用し，学習の導入の段階で学習の流れや目標を明確にすることにより，自分自身が学習を通してどのような姿になりたいかをイメージできるようにする。子ども達の学習の様子を見取り，「十分か」「まだ工夫できるところがあるか」「目標設定が難しくないか」などの観点から指導・助言を行うようにする。

※ルーブリック表は別紙

○調査・表現活動の工夫

調べたことを，分かりやすくまとめるために，３段階プリントを活用する。

【プラスチックごみを減らす為に】…自分の視点を明確にする。

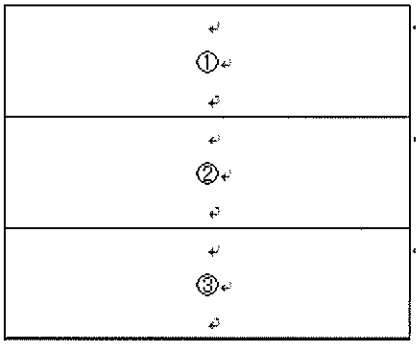
①プラスチックのリサイクルを進めることが大切だと思う。
②プラスチック製品を使わないことが大切だと思う。
③プラスチックごみの影響をみんなに知らせるべきだと思う。

【自分の考えがプラスチックごみを減らすことにつながる理由】…関係性を明確にする。

①リサイクルが進めば，ごみとなるプラスチックが減るから
②プラスチックを使わなければ，プラスチックごみが出ないから
③プラスチックごみの被害を知れば，ごみを捨てる人が減るから

【具体的な証拠】…根拠を明確にする

①プラスチックリサイクルの有効性，具体的な方法　等
②プラスチック製品を使わない運動の実際　など
③知らせたい事実　など



基本形として，左のような発表資料に自分の考えを整理するようにする。必要な子には，自作資料を作成することを認める。

○交流活動の工夫

交流活動にあたっては，時間を区切り，3 段プリントを活用して，1 対 1 で多くの友達と意見交換させるようにする。

「リサイクルを進める」「プラスチックを使わないようにする」「プラスチックごみの影響を知らせる」の視点の中で，自分と考えが異なる子どもとの交流を必ず行うようにし，自分と友達の考えを比較するようにする。

また，交流では，発表する側は「1 分以内で分かりやすく伝えること」，聞く側は「内容が理解できたか」「原稿を見たか，見ないか」「声の大きさ，速さは適切か」の観点から評価するようにする。

交流後は，友達の意見も参考にしながら，自分の考えを再度整理する。

⇒発展として，「室見川水系清掃後」の川の様子を提示し，プラスチックごみの問題は，個人の行動だけで解決するものではなく，多くの人々の協力，協働が必要であることに気づかせ，学校だけではなく，多くの人に考えてもらう方法についてさらに考えさせていきたい。

4. 評価規準

知識及び技能	思考・判断・表現	主体的に学びに向かう力
①生き物と私たちの生活とのかかわりを説明することができる。 ②プラスチックごみを減らす方法について資料をもとに考えることができる。	①プラスチックごみを減らす方法について，交流活動を通して自分の考えを説明することができる。 ②交流活動を通して，自分の考えを深め，広めることができる。	①自然を守り，プラスチックごみを減らすために自ら行動しようとする。 ②プラスチックごみを減らす必要性や行動について，周りの人に伝えようとする。

5. ESD との関連

（主に関連する ESD の価値観）

生物多様性などの自然環境の保全を尊重する

海の生き物の状況改善について考え，行動することは，自然環境の保全に直接かかわることに なる。また，私たちが水産資源を食料として活用している以上，私たちの健康・安全とも大きくかかわることである。この学習を行うことは，人間を含めた生物多様性の保全につながっている。

世代内の公正と世代間の公正

現在の自然環境は，私たちが祖先から受け継いだものである。学習を通して，私たち人間の行動が自然環境に大きな影響を及ぼしていることを学ぶことで，これからも，私たちが自然から得ていた恵みをこれからの世代に残していこうとする態度を育てることにつながっていく。

自然教室で海岸清掃をする子ども達

子ども達が集めたプラスチックごみの一部

実践報告

郷土を愛し、持続可能な社会の実現に向けて、主体的に行動できる子どもの育成
「地域の人々とつくる『渋川ＥＳＤ（いいまち・しぶかわ・だいすき）ミュージアム』の実践

滋賀県草津市立渋川小学校
教　諭　　中村　大輔

１　はじめに

草津市立渋川小学校は、周辺地域の都市化による人口増加に伴い2003年に開校された。渋川学区は、急激な開発により自然が失われたことや、転入者が多く、人と人とのつながりが希薄なこと、それに伴って地域への愛着が育ちにくいことなど、まちづくり上で課題がある。そうした背景を踏まえて、環境教育のねらいを、地域の身近な自然やくらし、文化について学び、学びを通して、人と人とのつながりを創出し、ふるさとへの愛着や誇りを深めることとしてきた。

このように捉えたとき、地域協働で取り組む環境教育は、持続可能なまちづくりを担う次世代育成の要であると言える。このようにＥＳＤの視点に立った環境教育を進める上では、教材の「つながり」、人の「つながり」、能力・態度の「つながり」の３つの「つながり」を大切にしてきた。教材間の「つながり」を教職員が意識して取り組めるようにと、ＥＳＤカレンダーを作成し実践している。

全校の子どもたちが、環境学習に取り組んだ成果をまとめ、『渋川ＥＳＤミュージアム』を毎年開設している。地域に情報を発信することで、さらなる人と人とのつながりづくりや交流を深める場となっている。本稿では、５年生を対象にした滋賀の郷土料理を活用した環境教育プログラムの開発研究について紹介する。

渋川ＥＳＤミュージアム

２　滋賀の郷土料理を活用した環境教育プログラムの開発研究

（１）研究目的

郷土の食文化を学ぶことで、子どもたちに琵琶湖の水や魚介といった恩恵に支えられているくらしがあることに気づかせることができれば、琵琶湖をはじめ郷土に対する愛着や誇りが深まるに違いないと考え、郷土料理を活用した環境教育プログラムを開発することにした。

（２）研究方法

環境教育プログラムの作成に当たり子どもたちの郷土料理に関する食経験と意識、食生活の状況を把握するために、県内の公立小学校全228校から層化抽出法により70校を抽出し、５年生を対象とした質問紙調査を実施し、4,863人から回答を得て分析した。その結果を踏まえ、５年生を対象に郷土料理を活用した授業を実施した。プログラムには環境教育がめざす「行動化」の観点を取り入れ、子どもたちが郷土料理について、体験したり調べたりするだけでなく、わかったことをまとめたり、伝えたりする活動を取り入れた。実践を通して、どれだけ郷土への愛着や誇りが深まったかについて、事前・中間・事後の３回のアンケート調査や、体験ごとの自己評価シートをもとに検証した。

（３）郷土料理を活用した実践

質問紙調査の結果からは、特に琵琶湖の魚介を使った郷土料理が継承されにくくなってきている現状が明らかになった。また、郷土料理をよく食べている子どもほど郷土料理の価値を認め、残したいと回答している結果が得られ、食べる体験の大切さが明らかになった。

結果を踏まえて、複数の郷土料理を地域の人々から学んで作る体験を組み入れるとともに、郷土料理が継承されにくくなっている現在の課題に対して、子どもたちが博物館を作って広報するという行

動化を取り入れたプログラムを作成した。その際に具体的に重視したポイントが６つある。

①郷土料理を学び始めるきっかけとなる導入の工夫

②様々な郷土料理の調理・試食体験

③郷土料理に携わる人々との出会い、その思いに触れる体験

④郷土料理の魅力を伝えるための展示物の作成

⑤郷土料理の魅力を伝えるための世代を超えた地域の人々との交流

⑥レーダーチャートを活用した自己評価シートでの振り返り、学びのチェック

（4）結果と考察

プログラムを考える際に設定した６つの重視した点を中心に振り返った。

①郷土料理を学び始めるきっかけとなる導入の工夫

地域の食の話から入ったことで、自分の住む地域やくらしと郷土料理が繋がっていることを意識できたことはよかった。郷土料理の問題を自分事として捉えさせたことで学ぶ意欲が生まれ、その直後に子どもたちの中から、郷土料理の博物館を作りたいという声が出て、学習の見通しももてたという点でよい導入であったといえる。

②様々な郷土料理の調理・試食体験

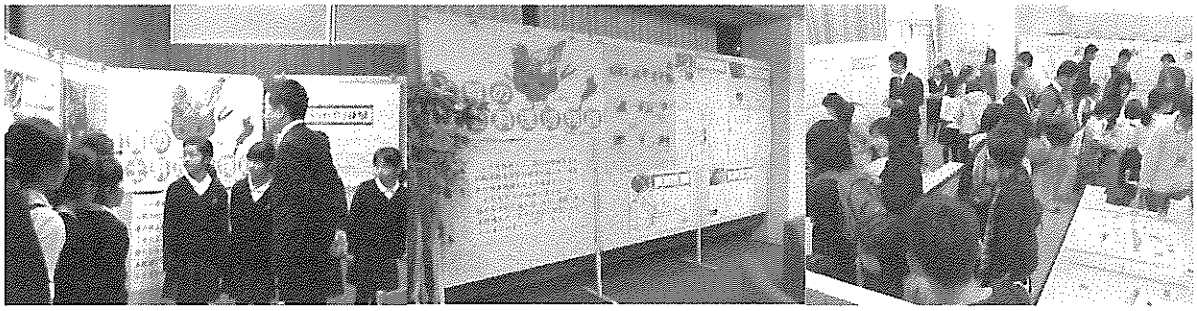
様々な体験を取り入れることで、子どもたちに郷土料理を作ることの楽しさやおいしさを感じさせることができ、価値化へつながることがわかった。また、複数の体験から郷土料理の多様な価値に気づかせることもできた。

③郷土料理に携わる様々な人に出会い、その思いに触れる体験

自己評価シートの自由記述欄には、郷土料理を教えて下さった方々への感謝の言葉が数多く見られた。50 人を超える講師と出会い感謝の念を強く感じていたことからも、人と人とのつながりの広がりや深まりがみられたことがわかる。

④郷土料理の魅力を伝えるための展示物の作成

郷土料理を継承していくために何ができるかを子どもたちに考えさせ、その結果として、博物館作りに取り組ませるという流れを大切にした。このように主体性を大切にした博物館作りによって子どもたちは、大きな達成感を得ることができた。ただ郷土料理について知るだけではなく、伝えるために博物館を作ったり、伝えられたりできたという経験が重要である。実際に博物館作りの後の自己評価シートの平均値が、他の活動より高かった。博物館を校舎内に開館しただけでは見学できる人が限られることから、巡回展を開催することにした。それによって数千人に対して郷土料理を啓発したり、学習成果を発信したりできた。



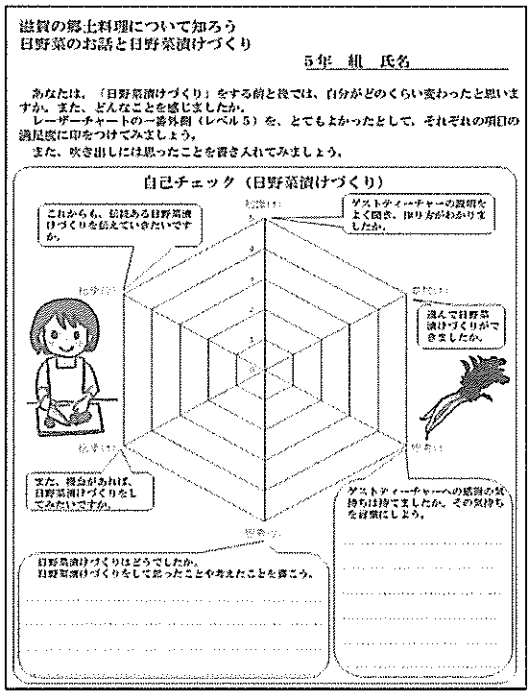
滋賀県庁、草津市役所、地元公民館、大型商業施設などでの巡回展示

⑤郷土料理の魅力を伝えるための世代を超えた地域の人々との交流

直接出会って顔を見て、郷土料理の価値を伝える経験は、伝えられたという自信につながったと感じている。郷土料理という共通の話題で地域の多くの人々と交流できたことは、それ自体が地域への愛着になっていると感じている。

高校生との試食交流会　　企業を回っての試食交流会　　地域を回っての試食交流会

⑥レーダーチャートを活用した自己評価シートで振り返り、学びのチェック



滋賀の郷土料理について知ろう
日野菜のお話と日野菜漬けづくり

5年　組　氏名

あなたは、「日野菜漬けづくり」をする前と後では、自分がどのくらい変わったと思いますか。また、どんなことを感じましたか。
レーダーチャートの一番外側（レベル5）を、とてもよかったとして、それぞれの項目の満足度に印をつけてみましょう。
また、吹き出しには思ったことを書き入れてみましょう。

自己チェック（日野菜漬けづくり）

	知識1	知識2	参加	思考1	思考2	伝承1	伝承2
梅干し作り	4.6		4.2	4.4	4.3	4.2	4.0
アメノイオご飯	4.3	4.5		4.6	4.6	4.2	4.3
ふなずし作り	4.6		4.3	4.6	4.4	3.7	4.2
郷土料理の話	4.6		4.7	4.7	4.5	4.1	4.4
琵琶湖の話	4.6	4.5		4.7	4.4	4.0	4.2
丁稚羊羹作り	4.8		4.4	4.7	4.5	4.3	4.4
博物館作り	4.7		4.5	4.8	4.6	4.3	4.6
日野菜漬作り	4.6		4.5	4.7	4.6	4.2	4.3

図1　自己評価シートの平均点

自己評価シートを取り入れたことは、子どもたちの満足度を把握するのに効果的だった。図1は、それぞれの活動ごとの自己評価シートの平均点を項目ごとに表したものである。体験後の子どもたちの自己評価からは、どの活動にも高い満足度を示していることがわかる。講師や教えて下さった方々への感謝の気持ちを持てたか（思考1）では、活動を重ねると徐々にその数値が高まる傾向があり、回を重ねるごとに関わって下さる方への感謝の念が高まっていったと考えられる。伝えていきたいと思うか（伝承2）では、どの体験も高い値を示した。なかでも博物館作りは特に値が高く、行動化して実際に伝えたという自信が満足感を生んだことが推察される。

事前・中間・事後の3回のアンケート調査から、学習が進むにつれて、郷土料理を残していきたいと思う子や、郷土料理を伝えるために自分にも何かできることがあると思う子の割合が高まっていった。

図2　郷土料理を残していきたいと思うか

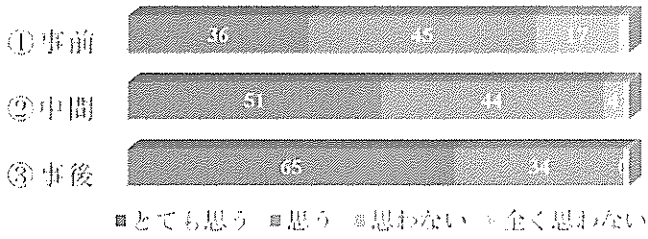
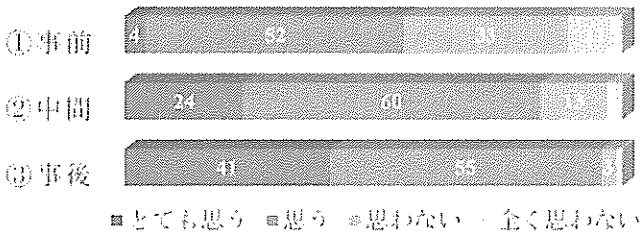


図3　伝えるために自分にも何かできることがあると思うか



様々な体験を取り入れることで、子どもたちに郷土料理を作ることの楽しさやおいしさを感じさせ

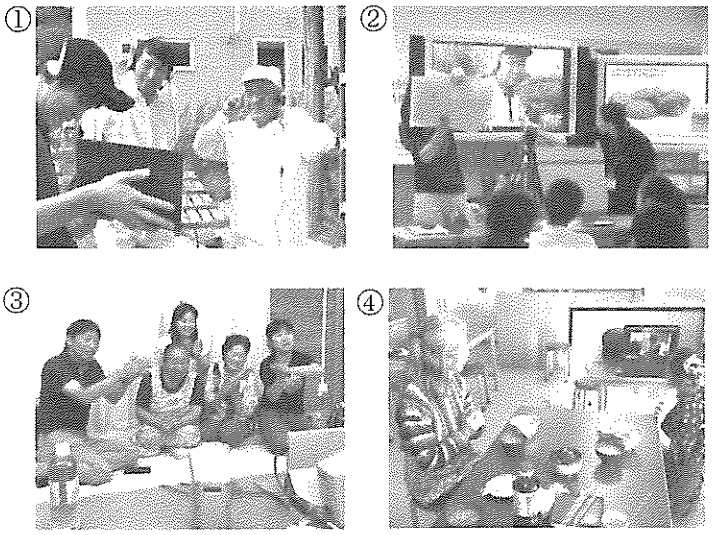
ることができ、多くの人との出会いや複数の料理の調理体験から郷土料理の多様な価値に気づかせることもできた。また、郷土料理を継承していくために何ができるかを子どもたちに話し合わせ、主体性を重視ながら伝える活動（博物館作り）に取り組ませることで、達成感や満足感、自己有用感を高め育むことができた。

3　滋賀の郷土料理学習から世界農業遺産学習へ

6年生では、郷土料理学習を発展させて料理の食材を生み出す滋賀の農林水産業について学んでいる。滋賀県がめざしている「琵琶湖と共生してきた農林水産業」の「世界農業遺産」への登録と関連付けて、この学びを「世界農業遺産学習」と呼んでいる。魚のゆりかご水田や、茶の発祥の地である近江茶、草津野菜「ベジクサ」など、人と出会いながら食の体験を取り入れた学びを行ってきた。さらに日本各地とテレビ会議システムを活用して積極的に交流をしている。北海道から沖縄県までの小学校や環境教育施設とライブ中継で繋ぎ、予め送られてきた地元食材を使って各地の郷土料理作りを体験したり、滋賀の郷土料理を伝えたりしている。県外との交流を通して外から滋賀を見る経験が、他県のくらしや文化を尊重する態度と同時に郷土への愛着の深まりを生むことにも繋がっている。

図4 テレビ会議システムによる遠隔地交流

	交流先	内容
①	北海道	鶴居村の林業に学ぶ
②	大分県	椎茸栽培に学ぶ
③	福島県	ずんだ餅づくり
④	愛知県	ボラ雑炊づくり
⑤	千葉県	小学校と郷土料理交換交流
⑥	熊本県	荒尾海苔の海苔巻きづくり
⑦	長野県	おしぼりうどんづくり
⑧	奈良県	大和薬膳に学ぶ
⑨	三重県	大杉谷のお雑煮づくり
⑩	沖縄県	小学校と郷土料理交換交流



学習の最後には、3クラスが学びの成果を発表し合う『渋川小世界農業遺産シンポジウム』を地域の人々や保護者を招いて開催した。さらにその模様を、国内7か所にテレビ会議システムで同時中継することで、子どもたちの学びの成果を発信できた。

4　子どもの学びを支援する組織づくり

本校の環境教育のプログラムは、教員、保護者、地域、行政、研究機関、企業が参加した環境教育の支援委員会を組織し、検討を重ねながら実践してきた。環境教育の実践は、子どもたちの主体性を大切にしながら進めてきたが、これまで子どもたちのアイディアを地域で支援する仕組みが有効に機能してきた。

環境教育の支援委員会

5　おわりに

地域の課題解決に向け、子どもたちは、考え行動してきた。子どもたちの中に芽生えた世の中に役立っているという意識が自己有用感を高めていた。今後も地域協働で取り組む環境教育を、持続可能なまちづくりを担う次世代育成と捉え推進していきたい。

第４学年　総合×社会×国語「われら　みんなの　応援団」実践事例

橋本市立あやの台小学校　中谷栄作

１．年間カリキュラムにおける位置づけ

「生きるってどういうこと？」という大テーマのもと、ＥＳＤカレンダー（図１）を作り、つながりを意識したカリキュラム編成を行っている。あらゆる授業にエッセンスを加えておき、子どもたちが自らつながりに気付いていくように授業をつくった。また、できるだけ本物に出会い、課題意識や目的意識に切実性と臨在性が与えられるようにも意識した。

本実践事例は、主にＥＳＤカレンダー内の A・B・C 部分について、９か月間実践してきたことをまとめた。これからも子どもたちの根底にある「何のために学ぶのか」「何のために生きるのか」の答えを、子どもたちと共に探っていきたい。

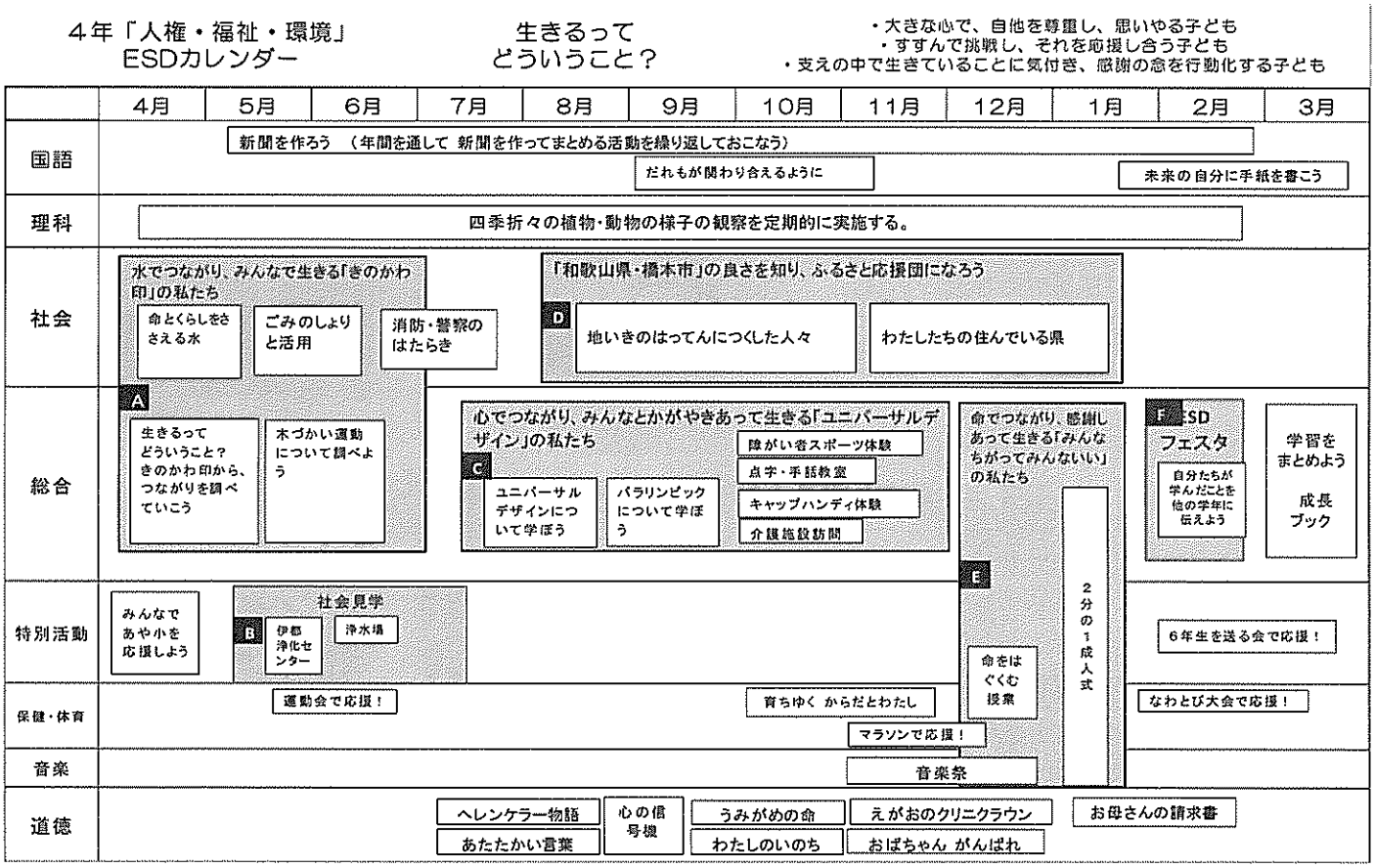


図１．４年 ESD カレンダー

２．単元の目標と概要

A と B の目標

自分たちの生活を支えてくれている人や自然の働きを知り、感謝と恩返しの気持ちをはぐくむこと

主な学習内容

①：水：当たり前に使っている水は、たくさんの努力と思いで作られていると気付く。

②：森：できるだけ使わない「エコ」だけでなく、考えて使う消費のあり方で、自分たちにできることがあると気付く。

③：人：伝え広げることが応援の一つになることを知り、伝えることに意欲をもつ。

C の目標：ユニバーサルデザインの心をもって、みんなを応援できるようになること

「かわいそうで終わるな」を合言葉に取組を進めた。

３．ＥＳＤの観点（Ａ・Ｂについて）

①ＥＳＤで育てたい見方・考え方

相互性と連携性	公平性と責任性	有限性と責任性
水資源や森林資源と人の生活は互いに働きかけあうシステムであり、循環する中で人と人、人と自然、自然と自然が違いに関わり合っていることを社会科の教材や人との出会いから学ぶ。	子ども兵の問題、学校に行けない子どもの問題などから自分たちの生活における当たり前が保障されていない国の実態を知ることから、公平・公正な社会の実現のために自分たちが当たり前に感謝し、それを守り広げていく努力をするべきであると学ぶ。	水資源や森林資源が有限であることから、自分たちも協力して守っていく必要があることと、その難しさを学ぶ。

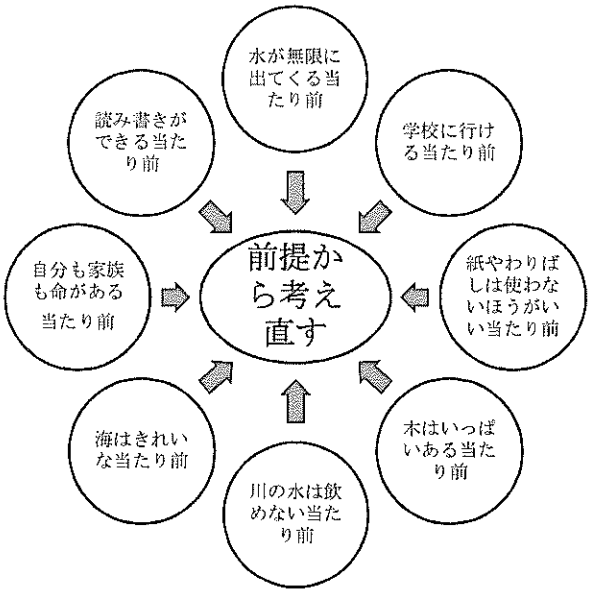
②ＥＳＤで育てたい資質・能力

批判的思考力	自分たちの生活に対して、このままでいいのか、という視点で課題を見つけ、改善策を追求していく中で身につける。
未来像を予測する力	これまでの自分たちの生活スタイルを続けることがいかに環境負荷が大きく、水資源や森林資源を守る仕事をしている人々の思いを踏みにじっているかを知り、それを続けることで未来の環境を悪化させることを学び、活動意欲を高めていく中で身につける。
多面的・総合的に考える力	水だけ、森だけ、人だけ、を守る考え方ではいけないことから、いろんな立場に立って考えることが必要であることを学ぶ。また、世界の子どもたちの暮らしを知ることで、自分たちの生活が世界の常識ではないことを知り、生き方についても考え直し、学ぶ。
つながりを尊重する態度	紀の川じるしを合言葉に、自分たちが水、木、魚、人、すべてのものとつながっていることを学ぶ。それを教えてくれる大人たちとの出会いのなかで、思いを伝え合ってつながることの大切さも学ぶことで、その態度を培う。
進んで参加する態度	応援団になることを合言葉に、自分たちにできることを探し、「かわいそうで終わらない」「自分にもできることがあるはずだ」という意識で学習を進める中で、その主体的な態度を培う。

③ＳＤＧｓへの貢献　目標４、１１、１２、１４、１５、１６

④ＥＳＤとしての価値

子どもたちにとっての「当たり前」を問い直すために、様々な角度からアプローチをかけた。子どもたちはたくさんの課題に直面するたびに自分たちの思い込みの多さに気付き、次第に「当たり前と思っていることを、前提から考え直すこと」が習慣化していく。そうして世の中を見返す習慣は、批判的思考力を支える視点である。また、前提を支えてくれている自然や人の仕事に気付くことで多くの物事に尊敬と感謝の気持ちをもつことができる。まちづくりを考えるうえで、それらの気持ちを養っておくことは非常に大切なことである。



5．４月～７月の実施概要

学習活動	学習への支援	◇評価　・備考
【総】尾上さんとの出会い①「川上村の源流の水の良さを知る」	・視覚・触覚・味覚で水のよさを味わわせる。	◇源流と下流の水を比べて、課題意識をもつことができているか。
学習課題　「私たちの水はどこからきて、どこへ行くのだろう」 新聞にまとめて尾上さんに伝えよう		
【社】命と暮らしを支える水 【行事】下水処理場見学 【総】子ども兵について 識字率について 【国】グループで新聞をつくろう 【総】尾上さんとの出会い②「水の学びを森につなげる」	・子どもたちの問いから授業を組み立てる。 ・水の循環を知り、自分たちが紀の川を汚すこと、水を無駄にすることが源流の水を汚すことになることを知る。 ・森の存在にも触れる。	◇自分たちの「当たり前」を守ってくれている自然や仕事に対する尊敬と感謝の気持ちをもつことができているか。
学習課題　「なぜ　木を使ってくれてありがとう　なのだろう」 「紀の川じるし　ってどういうこと」　新聞にまとめて尾上さんに伝えよう		
【社】ごみの処理と活用 【総】わりばしくらべ 紀の川じるしの学校 高野山で間伐体験 樹木医さんの話を聞こう 歌詞をつくろう うめぼしづくり体験 【国】一人で新聞をつくろう 【道】石っこ賢さん（宮沢賢治） 【総】尾上さんとの出会い③「水と森と人のつながりをまとめる」	・子どもたちの問いから授業を組み立てる。 ・水と森は相関関係にあることで、自分たちが消費者としてできることがエコ以外にもあることを知る。 ・一人ひとりが自分の考えの深まりを新聞に文章化できるように支援する。	◇自分たちの「当たり前」を守ってくれている自然や仕事に対する尊敬と感謝の気持ちを、周りに伝えようとしているか。
生活課題　「これからも私たちにできる応援を考えて、取り組み続けよう」 １０月に出会うまでに取り組んで、尾上さんに胸をはって出会えるようにしよう。		
【社】消防・警察の仕事 【総】未来を考えよう（キャリア教育）		◇どの仕事にも「思い」「願い」があることを知り、尊敬と感謝の気持ちをもっているか。

子どもたちの学習の流れが違和感なく進んだことで、自分たちで学びを進めている感覚をもたせられたことが、カリキュラムとしての良さだと感じた。ふるさと学習としても、子どもたちが自分たちのまちのよさを知ったこと、つながっている他の地域のことを知ったことは大きな意味がある。１０月に川上村で歌う子どもたちと作った歌の歌詞には、大切な学びが凝縮されている。その歌を歌うときには尾上さんをはじめ、この学習で関わった方々の顔を思い出し、「受け取った思いに、胸を張って向き合えるように生きよう」という学んだときのまっすぐな気持ちに立ち戻って、自然や未来のことを考えた行動ができる生き方をする意識の礎にしてほしい。

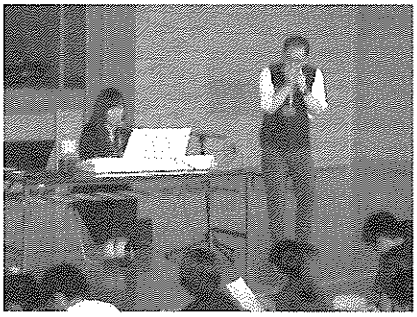
6．九月～十一月の実施概要

学習活動	学習への支援	◇評価　・備考
【総】車いすに乗った人に、なんと声をかけるだろう。	・担任が車いすで登場し、これから車いす生活なのだと演技。	◇自分の中の本音と建前の意見を葛藤させているか。
学習課題　「かわいそうで始まり、かわいそうで終わっていいのか」を調べ、みんながかがやいて生きるにはどうすればいいか考えよう		

【道】ヘレン・ケラー 【国】手と心で読む（点字教材） 【体】車いすバスケット体験学習 【総】パラリンピック学習 教材→「I'm possible!」 【道】心のあく手・心の信号機 【総】高齢者体験学習 【総】視覚障がいと聴覚障がいについて聞き取り学習 【総】車いす体験学習	・障がいのある人が守るべき「弱い存在」と認識している自分たちの偏見に気付かせる。 ・できることとできないことがある、という点で平等であることに気付かせる。 ・自分に立ち向かい、命を輝かせて生きる姿に感動させる。 ・自分の命を輝かせたいと心から思える瞬間を作る。	◇自分たちの「当たり前」が人を傷つけてしまうことがあることに気付き、自分にできるやさしさを工夫しようと意識できているか。
学習課題　「自分たちの心に起きた変化を、応援団として大人に伝えよう。共に生きるユニバーサルデザインの社会づくりに協力をしてもらおう」		
【総】ユニバーサルデザインとバリアフリーを調べよう 【国】誰もが関わり合えるように（スピーチ作成） 【総】スピーチで学びを伝えよう 発表内容を振り返ろう 【保】命をはぐくむ授業 （生命の誕生について）	・他人事やきれいごとだけで終わらないようなスピーチになるように、体験したり聞き取ったりしたことを自分事にして考えさせる。 ・一人ひとりが自分の考えの深まりをスピーチに文章化できるように支援する。	◇当たり前をどう変えていくべきか、自分の調べたことと、自分の変えたいことを思いとともに伝えることができているか。また、伝えられたことを受け止められているか。
学習課題　「応援団である自分たちがたくさんの応援の中で生きていることに気付こう。その応援に感謝する気持ちと、応えらえる大人になる決意を、２分の１成人式で伝えよう」		
【総】この１０年の社会の出来事 【道】お母さんの請求書 【国】今年の一句を作ろう 【総】この１０年の私の出来事 【総】生き方宣言を作ろう	・自分も、目の前の友達も、誰もが誰かの宝物であることに気付き、尊重すべきである客観的な事実に気付かせる。	◇自分とのつながりを意識して生き方宣言を考えらえるか。

川上村を訪問し、歌で交流をする。これも「共に生きる」であることを感じさせ、テーマのつながりに気付かせる。

学習が大きなつながりを成し、ここに記載していない授業の間にもどんどんとつながりを意識した実践ができた。４年生の教材は「身の回りの当たり前を見直すこと」が共通価値なのだと、改めて感じ、それ自体がSDGｓの達成に大きなかかわりがあるように思う。子どもの中に「SDGｓを調べたい」という児童が出てきているので、高学年に向けて、その種をまいておくことで、あと２年間で大きく花咲くのではないか、と期待感でいっぱいである。



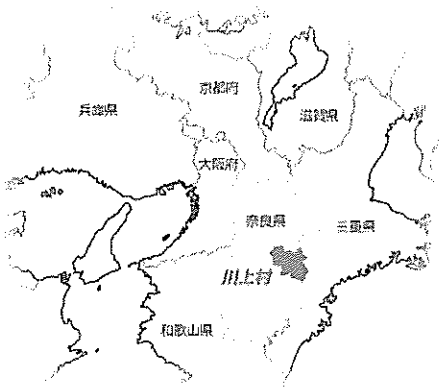
「地域 ESD 活動推進拠点」との連携による授業づくり

授業づくりで地域と人がかがやき、つながる。

森と水の源流館（奈良県川上村）
公益財団法人 吉野川紀の川源流物語
事務局長　尾上　忠大

1. 川上村プロフィール

川上村は、奈良県の南東部にあり、紀伊水道へと流れ出る「紀の川」（奈良県では「吉野川」）の源流に位置します。村の面積の95%が森林で、スギやヒノキの優良材を産んだ吉野林業の中心地として栄えました。一時は 7,500 人を超えた人口は平成 27 年国勢調査で 1,313 人、現在高齢化率は 57%超と過疎が進んでいます。しかし「下流にきれいな水を流す村」「都市にはない豊かな生活」をめざすさまざな取組みにより移住者が増加傾向にあります。



2. 水源地の村づくりと『川上宣言』

村には大きなダムが 2 つあります。昭和 49 年完成の大迫ダム（農林水産省）と計画から 50 年以上の時を経て平成 25 年、運用に至った大滝ダム（国土交通省）です。ダムができた後を見据え、平成 6 年に“樹と水と人の共生”をキャッチフレーズに「水源地の村づくり」がスタート。平成 8 年には、次の 5 箇条からなる『川上宣言』を発信しました。

- 私たち川上は、かけがえのない水がつくられる場に暮らすものとして、下流にはいつもきれいな水を流します。

- 私たち川上は、自然と一体となった産業を育んで山と水を守り、都市にはない豊かな生活を築きます。

- 私たち川上は、都市や平野部の人たちにも、川上の豊かな自然の価値にふれあってもらえるような仕組みづくりに励みます。

- 私たち川上は、これから育つ子どもたちが、自然の生命の躍動にすなおに感動できるような場をつくります。

- 私たち川上は、川上における自然とのつきあいが、地球環境に対する人類の働きかけのすばらしい見本になるよう努めます。

3. 森と水の源流館について

『川上宣言』の具現化、行動化として、川上村（役場）では、最源流地で手つかずのまま残った天然林のうち約 740ha を購入。「吉野川源流－水源地の森」と称して保全することとしました。その森を守る意味や自然の魅力とともに、源流部での暮らしを伝えるため、平成 14 年に「森と水の源流館」を開設。運営は、公益財団法人吉野川紀の川源流物語が担っています。施設内には森のジオラマと５面スクリーンを備えた「源流の森シアター」をはじめとする展示があります。

4. 活動のキーワードは「源流学」

またこの財団では開館当初から「水源地の森ツアー」や「吉野川紀の川しらべ隊」などフィールドでの体験プログラムを開催しています。「源流学」とは、源流において人と自然の役割について考え、行動し、その体験の中から１人１人が答えを見出していく取り組みです。源流の自然、環境、生き物、生活、風土、人や物の交流、産業、歴史、遊び、等さまざまなことを知り、行動していくことが「源流学」であると考えます。今では都会の生活で失くしてしまった豊かなものやコト、また生きる力につながることを楽しく体験しながら伝えようと試みています。そのようなひと時を求めて、あるいはそのような環境に住まいしてみたいと考える機会になればと思います。

5.「紀の川じるしの ESD」って？

あわせて私たちの活動テーマになるものが「流域連携」です。川でつながるところの人々、途中で取水され、水道水や農業用水として届くところの人々、さらには、水は届いてなくても、広い意味で森や山の恩恵を享受する京阪神地域など都市部の人々を対象としています。地域づくりや環境学習といった切り口での利用があります。全国の例を見ると、たとえば山梨県小菅村を源流とする多摩川は、東京都や神奈川県の大都会へ注ぎ、長野県根羽村を源とする矢作川の下流域には愛知県豊田市があり、トヨタ自動車を中心とした自動車産業が集積しており、企業ぐるみの連携がみられます。この紀の川流域では、大都市や大企業との連携像を期待することは困難です。源流部では林業、中流では果実や野菜の農業、河口部ではしらす漁などの漁業といった、質の高い第一次産業をつないでいることから、全長 136km の川を１本の商店街と見立て、「源流から海まで、恵みをつなぐ」を合言葉とする「紀の川じるし」という取組みを立ち上げました。定期的に「紀の川じるしの見本市」という物産展を仕掛けています。そして、これまでの活動で構築された上中下流地域のつながり、人のつながりをいかし、持続可能な社会を担う教育を推進する「紀の川じるしの ESD（Education for Sustainable Development）」を進めています。流域それぞれの課題を共有し、特産品や人をネットワークしながら、教材化し、地域をつなぐ取組みを続けています。この取組みは 2018 年度版の『環境白書』でも紹介されました。

6. 地域 ESD 活動推進拠点に登録。また近畿 ESD コンソーシアムの一員として「森と水の源流館授業づくりセミナー」を開催

森と水の源流館は、文部科学省と環境省によって開設された「ESD 活動支援センター」へ「地域 ESD 活動推進拠点」として登録しています。(2019.11.26 現在、全国で 102 件が登録) 学校現場・社会教育の現場の ESD を支援・推進する組織・団体として役割を果たすことを目指しています。

また奈良教育大学を核として、教育機関や教育・学習施設、また企業などが参加する近畿 ESD コンソーシアムに加わり、ESD 演習として「森と水の源流館授業づくりセミナー」(7 月～1 月の間に 5 回) が開催されます。奈良県内と和歌山県内の小学校の先生が、同じ「源流」にあたる川上村で、水の恵みや吉野川分水をテーマとした授業を実際につくり、実践いただき、その成果や課題を共有しています。

7. 授業づくり協力の実践例

奈良市立平城小学校

5 年生　「国土の森林を未来につなげよう　未来につながる平城っ子の木づかい」(2015～2017 年度)

5 年生　「ポスターで『日本の森林を守りたい』という思いを伝えよう」(2018 年度)

5 年生　「秋篠川のめぐみを未来へ」　(2016～2018 年度)

4 年生　「うつくしい水を流し続ける村・奈良県川上村」(2014～2015 年・2019 年度予定)

大和郡山市立郡山西小学校

4 年生　「水の恵み～川上村から学ぶ持続可能な水の流し方～」(2017 年度)

6 年生　「わたしたちの生活をよりよくする政治」(2018 年度)

3 年生　「こん虫のかんさつ」(2019 年度)

川上村立川上小学校

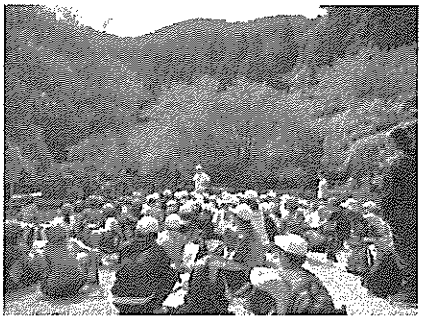
5 年生　「ダムカレーから学ぶ“水源地の森”」(2018 年度)

和歌山市立有功東小学校

6 年生　「川上村から和歌浦をつなぐ紀の川　紀の川につながる千手川」(2018 年度)

橋本市立あやの台小学校

4 年生　「われら紀の川じるしの応援団」(2019 年度)



8. 授業づくり参画の心得　～授業づくりは、先生だけができる醍醐味！～

「授業づくりセミナー」や実践協力の機会をいただく中で、私が気づいたこと、学ばせていただいたことがいくつかあります。

・「授業をつくる」のは先生であり、私たちは「素材を提供する」役割である。

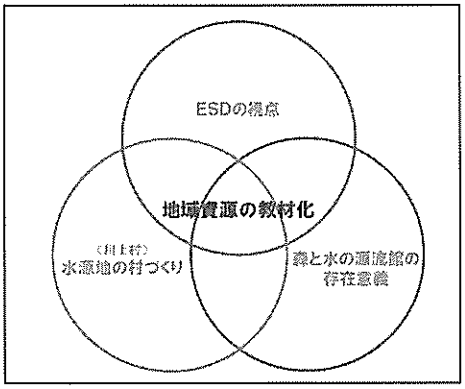
学習指導要領と教科書のテーマにもとづき、授業を計画し、つくっていくのは先生だけができる醍醐味だということを聴かせていただいたことがあります。「先生はそれをじっくりと楽しみながら考えるが、ただ地域にはどのような教材となる資源や素材があるのか、またどのようにして具体に授業に取り入れるかが難しい」ということでした。私たち「地域 ESD 活動推進拠点」となる施設、機関では、平素の活動を通じて、そういった部分をサポートできる「引出し」を持っていると考えています。

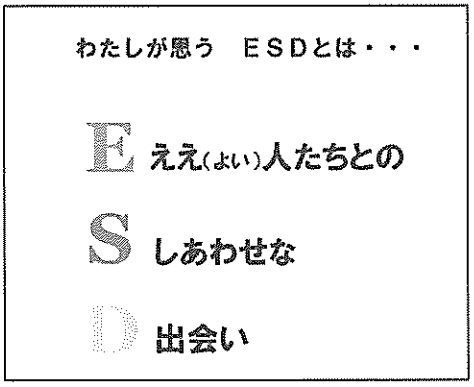
・ゲストティーチャーは「授業をする」のでなく、先生の授業に「そう」こと。

しかし、その「引出し」で授業をしていると誤解してはいけないと、最近では心がけています。以前はいただいた 45 分や 90 分の授業時間を全部使って、用意していったことをすべてお話させてもらうことが授業と思っていましたが、いま ESD に取組む先生方との授業の中では、逆に私たちが話す時間よりも、児童たちの意見を聴かせていただき、それに対する感想や意見を述べさせていただく時間が多くなっていると感じます。そのためには、事前に先生の考える授業のねらいや進め方について打ち合わせをし、それを共有させてもらって教室に伺うことが、ゲストティーチャーには必要だと思っています。

9. 授業づくりにかかわることで、地域がかがやく

ESD の授業づくりを進める先生方とのコラボレーションは、私たちにとっても実に有意義であると感じています。「ESD は当事者意識を育てる参加型学習」といわれます。それは児童生徒だけでなく地域住民があらためて地域の良さや、課題を見出し、さらに課題解決について考える機会となるからです。それを重ねることとで、地域への愛着、地域を大切にする心、そして地域の担い手意識を育成するということです。さらに私が実感しているのは、先生方の授業づくりに対して、私たちの「引出し」の多様な人々をつなげることによって、地域がどんどんよくなっていくという感覚です。2018 年度に行われた川上小学校の授業では、学校とともに、村長から職員までの役場、住民、大人も、子どもも、みんなが「水源地の村」がめざす方向に向かっていっしょに取組むことができたよい事例だと思います。また 2019 年度の橋本市立あやの台小学校の授業では、音楽によって「伝える」ということが大人から子どもへ、子どもから大人へ、源流域の人から中流域の人へ、中流域の人から源流域の人へと広がって、心に沁み入り、残ったように感じます。音楽づくりでかかわっていただいた東吉野村在住の松谷文美さんにおいても、水による流域のつながりと源流地域の役割をあらためて知っていただくとともに、音楽の可能性をさらに豊かに広げていただく機会になったとお聞きしました。地域資源を教材化することによって、学校、地域、拠点、「三方よし」の効果を感じています。





You tube 検索 「尾上忠大 」
onoue@genryuu.or.jp
森と水の源流館
http://www.genryuu.or.jp

第１学年　道徳科学習指導案

アフリカの果てまでイッテＱ！

平群町立平群北小学校　小谷　文佳

１．単元名　アフリカの果てまでイッテＱ！(道徳教科書　サバンナの子どもたち)

主題名　世界の子どもたち　内容項目Ｃ　国際理解・国際親善

２．単元のねらい

・日本とセネガル(アフリカ)との共通点や、良いところをみつける活動を通して世界の国々に関心を持つ。

・自分たちと言語や生活スタイルが違う海外の人々に対して〝世界のなかま〟という意識を持ち、今後どのように生活していくか考える。

３．単元について

○ねらいについて

本主題の指導内容は、国際理解と親善の心を持った児童を育てようとするものである。「国際理解教育」とは、外国の人々や異文化の中に自分たちと同じような多くの感性や思いがあることに気付き、それを大切にしながら国際親善に努めようとする心情を育てることであり、様々な場面で国際交流が盛んになっていく今後の社会において、大切な人権感覚である。

○指導について

世界の中でも本単元では、アフリカのセネガルを中心に取り上げる。その理由として、まず１つ目にクラスにアフリカのナイジェリアにルーツのある児童Ａがいることである。同じ幼稚園やこども園から入学してくる児童が多い中、児童Ａは違う市から引っ越してきた。入学前、児童Ａ自身は周りの児童と見た目が違い、日本人ではないことからうまく馴染めるかどうか、不安な気持ちがあると母親から聞いていた。しかし、入学後、児童Ａは自分から積極的にコミュニケーションを取り、今ではみんなの輪の中で楽しそうに笑っている姿が見られる。そんな中、他の児童から「児童Ａのお父さんはどこの国の人なの？」「どうして肌の色が違うの？」と素朴な疑問が投げかけられることもある。今回の学習を通して、たくさんのセネガルやアフリカの〝良いところ〟〝共通点〟に注目させて、身近に感じてもらいたいと思った。２つ目に児童らに大人気のALTの出身地がアフリカのウガンダだということである。児童らは外国語の授業をとても楽しみにしており、休み時間も自ら誘って一緒に遊び、陽気で楽しい先生と積極的に関わりを持っている。そのため今回の学習のセネガルについても身近に感じることができると考えた。３つ目に、青年海外協力隊の方を通して、セネガルで小学校教師をしている、「ムスタファ・ジェーンさん」をゲストティーチャーとして招く機会を得ることができたからである。映像や写真だけでなく、実際にその国の方と触れあうことで、一気に距離が縮まり、自分ごととして捉えることができ、経験として残すことができると考えた。

本単元では、同じ年齢の海外の小学生に視点を向けて共通点や良いところに気付かせていきたい。そのために導入では、世界中どの国の子どもたちも大好きな『遊び』を通して出会いの場面をつくり、遊びから国の様子について興味を持たせていきたい。ジェーン先生を招く際にも簡単な歌や手遊びなどで交流し、最後には、日本の遊びをセネガルに伝えるために、贈り物やビデオを作成して送る活動を通して、楽しみながら国際理解を図っていきたい。

自分と発展途上国の人をよく知らずに比べると、身の回りの情報や生活経験から「かわいそうな人」「貧しい人」と捉えてしまう児童も少なくないかもしれない。そうではなく、地球には言葉や文化が違っても自分たちと「同じ」心や思いを持った人たちが生活しているということを感じてもらいたい。そして、今後様々な国際問題に出会ったときなどに、自分の国のことだけ考えるのではなく、『世界のなかまとして、自分たちに何かできることはないか』という国際的な視野で物事を考えられるようになってほしい。

４．ESD との関連

○学習を通して主に養いたい ESD の視点

・アフリカの子どもたちに対して〝世界のなかま〟という意識を持ち、関心を持つ。【連携性】

・アフリカのよさに気付き、国際的な視野を広げる。【多様性】

○学習を通して主に育てたい ESD の資質・能力

④コミュニケーション力：アフリカの遊びを通して学級の子どもたちと交流したり、セネガル人のゲストティーチャーと進んで交流したりする。

○ESD で育てたい価値観

②世代内の公正：途上国の人たちへの配慮

④お互いの人権・文化を尊重する。：生活や学習の様子、遊びを通して。

○貢献できる SDGｓ

４：質の高い教育をみんなに
10：人や国の不平等をなくそう
16：平和と公正をすべての人に

｛世界の国々に感心を持ち、仲間意識を持つことで、今後の生活において問題意識の視点を持つ。｝

５．学習活動の概要

全４時間

	主な学習活動	主な発問と予想される児童の意識	指導上の留意点
1	・セネガルやアフリカの国々の遊びを体験してみよう。	●アフリカの遊びをやってみよう。 ・日本の遊びと似ているね ・おもしろいなぁ ・どこの国の遊びかな？ ・休み時間にもやってみたい！	・できるだけルールが簡単な遊びを提示する。 ウサギとイヌ(南アフリカ) へびごっこ(南アフリカ) ホウバ・バンディラ(ブラジル) クウェペナ(ウガンダ) サッカー(セネガル) バンテマ・アクラクロ(セネガル)
2	・セネガルについて、クイズを通して知ろう。	●セネガルってどんな国？ ・セネガルやアフリカについてはじめて知った。 ・ALT の先生の出身地や児童 A のお父さんの出身地とも近いね。 ・行ってみたいなぁ。	・担任による授業。 ・パワーポイントを使用し、写真や地図を活用する。 ・日本と比較させる。 ・セネガルの観光地や服装、食べ物、街の様子、娯楽など良い印象を与えられるような内容にする。
3	・セネガルの小学校の先生から、生活や小学生の様子について教えてもらおう！	●セネガルの手遊びで仲良くなろう。 ●元青年海外協力隊の方・ジェーン先生からセネガルの子どもたちのお話を聞く。	・セネガルのジェーン先生をゲストティーチャーとして招く。 ・写真や動画を活用する。 ・民族衣装や生活のようすにつ

		・ここがすごいなぁ、いいなぁ ・子どもたちの笑顔がすてきだなぁ ・日本の歌も歌ってるよ！ ●質問コーナー ・質問してみたい！ ・日本とはここがいっしょだね ・日本とはここがちがうね ●ゲーム 「ダンラーリー・スーラ-ルー」 「ハイタッチゲーム」	いて教えてもらう。 （元青年海外協力隊の方に通訳をお願いする。） ・できるだけジェーン先生の声、話が聞けるようにする。 ・ジェーン先生主導で簡単なゲームを行う。 ・手遊びや歌といった言語を超えた活動で交流を図る。
4	・日本の折り紙をセネガルの子どもたちに伝えよう。	●お礼を込めて、折り紙で花を作って贈り物をする。 ・日本の遊びを伝えたい。 ・喜んでくれるといいなぁ。 ●折り方を動画で取る。	・セネガルのことをたくさん学習したので、「今度は日本の文化をセネガルに伝えよう。」という動機付けをする。 ・折り紙で作った花束、折り方の動画・折り紙をセネガルに送る。 ・送ったビデオレターに対する、セネガルの子どもたちからの反応がもらうことができれば、児童に見せる。

６．成果と課題

今回の実践を通して、４．で述べた「学習を通して主に養いたい ESD の視点」の連携性（アフリカのこどもたちに対して〝世界のなかま〟という意識を持ち、関心を持つ。）と多様性（アフリカのよさに気付き、国際的な視野を広げる）の視点から見られた、児童の価値観や行動の変容を、（１）授業前の様子、（２）授業中の様子、（３）授業後の様子、の３つの観点から考察を述べていく。

（１）授業前の様子

まず、児童は第２次で初めてネガルの子どもたちの写真を見たとき、「かわいそう。」「お金がない。」といったイメージを持っているようだった。それは、「靴は履いていなくてはだしかな。」「ケイタイは持ってないやろうなぁ。」「ごはんは手をつかうの？毎日食べるのかな。」「家はきっと木でできていると思う。」などの質問や反応から感じとることができた。テレビなどの情報や、生活経験からくる先入観があって『自分たちと同じ』というイメージはほとんど持っていないような様子であった。

また、これまで児童Ａとの関わりにおいても“クラスのなかま”という認識は持ちながらも、深い友達関係としての関りが多くは見られなかったり、児童Ａの父親が参観に来るということが多くあって視線や興味は持ちながらも、子どもたちなりにそのことについてどう触れたらいいのか、迷いもあったりするような印象があった。

（２）授業中の様子

そこで、まず授業全体の導入として、たくさんの南アフリカ系の遊びを取り入れた。児童らは初めて知る遊びをみんなでいっしょに楽しむことを通して、様々な国に興味を持った。休み時間にも児童だけで遊びをする姿もみられた。「どんなところでこの遊びをしているのかなぁ」という発言も見られた。

そして第３次の、ジェーン先生に出会う日の授業では、事前にセネガルの素敵なところや子どもたちの楽しそうな表情といったプラスの面を児童に伝えられるようにお願いした。ジェーン先生が教室に入ってきた瞬間は、初めて接するアフリカ系の方を見て、動揺と緊張感が感じられた。しかし、授業の導入でセネガルの歌遊びをしてもらうことで、次第に緊張もほぐれて楽しい雰囲気になっていった。紹介の動画にはセネガルの子どもたちが日本の童謡を歌っている姿があり、児童は驚きながらも、嬉しそうに自然と一緒に口ずさんでいた。また、来校した、日本人の青年海外協力隊の方とセネガル人のジェーン先生が結婚するというお話も聞かせてもらったとき、「(海外の人と)結婚できるの？」と驚きの声があがった。でも話を聞くうちに「なかよしだと思った！」「ぴったりだね～」とすぐに受け入れることができていて、「ぼくもセネガルの子と友達になってみたいなぁ～」と話している子もいた。ナイジェリアの父をもつ児童Ａに関する話は、あえて児童に言うことはしなかったが、児童たちとＡも同じように国籍を超えて心を通じ合っている関係だと気付いた児童もいただろう。最後にジェーン先生に自国のゲームをしてもらった。ゲームの説明は、日本語でも英語でもなく、セネガルの言葉とジェスチャーを使って行ってもらった。児童は一生懸命ジェーン先生の方を見て、理解しようとしていた。ゲーム中も呼びかけ役のジェーン先生のほうを嬉しそうにじっと見て、正解したらジェーン先生がハイタッチをしてくれて、まちがえても頭をなでてもらってとても喜んでいた。言葉が通じなくても、ジェスチャーなどで心を通わすコミュニケーションがとれるということを実感できたのではないかと思う。授業初めの様子とは比べ物にならないくらい、互いに心の壁がなくなっていったのが分かった。

（３）児童の授業後の様子

授業を終えて、児童からいくつか価値観や行動の変容ととれる反応を３つ紹介したい。まず１つ目に、国語でカタカナの学習をする際、「セ」や「ネ」など、セネガルの国名やジェーンの先生の名前に含まれる文字が出てきた際、たくさんの児童が競ってその言葉を発表しようとしていた。初めに遊びを通して知った国の名前を含め、自然と教室でその言葉が出てくるようになった。２つ目に、図書室の世界地図の本から、自主的にセネガルの場所や写真を見つけ、「あったよ～！」と教えに来てくれる児童がいたり、国旗の本からもセネガルの国旗を探し、自由帳に写して描いている児童もいたりした。そのことをクラス全体に広めると、「僕も見つけたい！」という声も聞こえてきた。３つ目に、学級の児童はＡに対して、これまで通り仲良くするだけでなく、地図を見て「○○ちゃんのお父さんの国はどこなの～。」「セネガルとも近いね！」などとＡに自分から聞いてみている姿が見られたり、「英語も話せてすごいね！」とＡ自身にも興味をもったり、自然とコミュニケーションをとることが増えてきた。今では、これまでは担任も入って一緒に遊んでいることが多かった休み時間中の関わり、「遊びに行こう！！」と互いに声を掛け合ってＡを含めた児童だけで遊ぶことが増え、さらに距離が近づいたように感じられた。

今回取り組むにあたって、小学校１年生という発達段階で、どのように国際的な連携性や多様性の視点と出会わせると良いのか、偏見や差別を生むことのないように児童Ａに関したことも含めて十分に配慮する必要があり、迷いや悩みもあった。しかし考えていたよりも、児童の関り方や、受け取り方は自然体で、ジェーン先生とも打ち解けるのが早く、大人に比べて先入観もすぐに打ち払い、心を通わせる場面をたくさん見ることができた。児童の心の素直さ、純粋さについて改めて気付かされた。このように、幼いうちの経験が心を耕し、今後、中学校、高校、といったその先の人生において、“世界のなかま”として国際的な社会で生きていく基盤となっていくことを願う。

生活科・総合的な学習の時間を軸とした校内研究

彦根市立城北小学校
校内研究主任　中村　裕幸

１．研究主題

主体的・対話的で深い学びが実感できる探究的な学習の創造
～教科等横断的なカリキュラムの構築を目指して～

２．主題設定について

【学校教育目標】

自他を尊重し　未来にたくましく生きる子どもの育成　～きらり☆輝く城北小～

【今年度の重点】

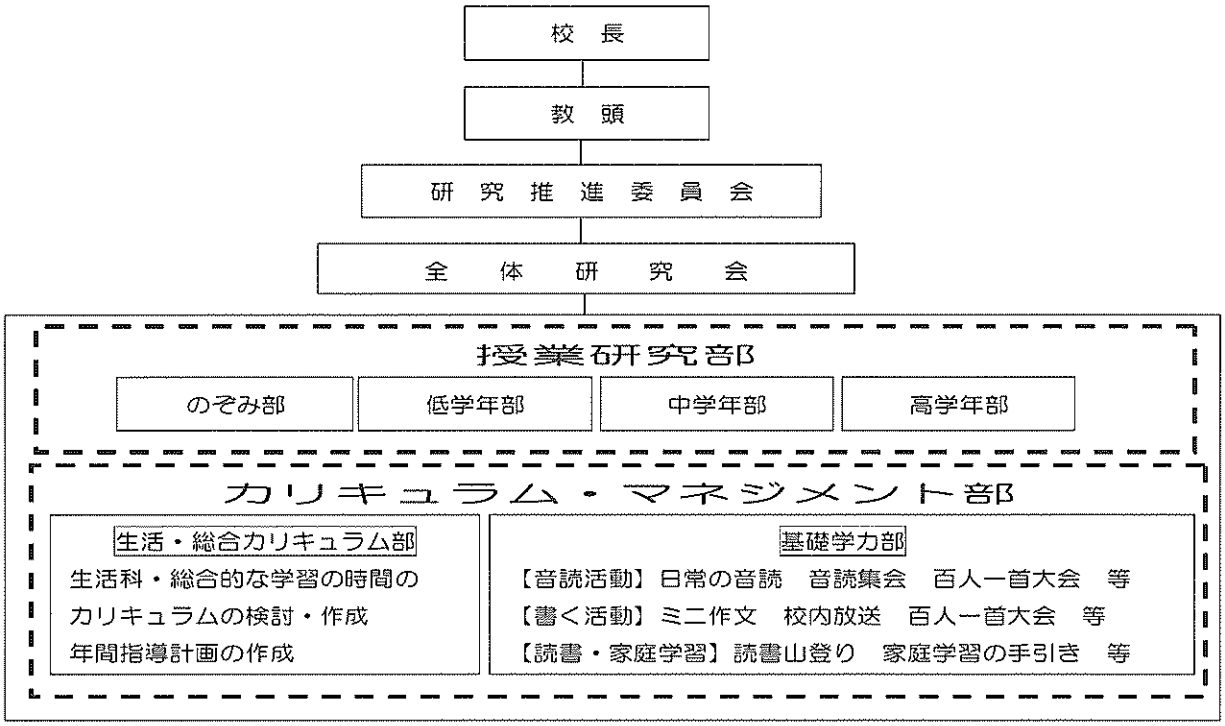
ふるさと城北のよさに気付き、語れる子ども、地域に貢献できる子どもの育成
世界に、そして未来に目を向け、夢を語れる子どもの育成

低学年は生活科、中・高学年は総合的な学習の時間を窓口に、子どもが主体的・対話的で深い学びを実感することができるような、探究的な学習のカリキュラムの構築を目標とした。このことは、国語科や算数科など、教科学習で身に付けたことが生活科や総合的な学習の時間の中で生きて働く場面を意図的に仕組むことにより、子どもたちが実感したり納得したりしながら感動体験を繰り返し積むことにつながり、ESDで育てたい資質・能力を包括した学習となる。そしてその感動体験が原動力となって、意欲的な学び、深い学びが継続的になされるのでないかと考える。加えて、教科等横断的に生活科や総合的な学習の時間の学習と他教科との関連を図ることにより、国語科や算数科の学習を通して子どもに付けたい力を明確にした授業づくりを展開しようとすることで、教員の授業改善を進め、より効果的で効率的な教材開発に発展できると確信している。

３．研究推進概要

月	内　容
4	研究推進委員会（研究内容・計画）
5	校内研究会（本研究の方向性に関する研修）
6	**授業研究会（第2学年）生活科「どきどき　わくわく　まちたんけん」** **授業研究会（第3学年）総　合「城北たんけん～この町　大すき～」**
7	１学期の実践報告、１学期の振り返り、２学期の計画
8	生活科・総合的な学習の時間のカリキュラム編成に関する研修会
１０	**授業研究会（第4学年）総　合「だれもが住みよい町　城北」** **授業研究会（第5学年）総　合「めざせ！彦根のアピールプランナー」**
１１	**研究発表会・授業公開（第1学年）生活科「じぶんでできるよ　～かぞく　ニコニコ　大さくせん～」** **（第6学年）総　合「ふるさとCMプランナーになろう」** **授業研究会（特別支援学級）生単・自立「のぞみフェスティバルに先生を招待しよう！」**
１２	２学期の実践報告、２学期の振り返り、３学期の計画
1	実践記録集の執筆
2	次年度年間指導計画作成、研究の振り返りと次年度の方向性

４．研究組織図



５．成果（○）と課題（△）

【全体】○　カリキュラム・マネジメントの推進により、教科等横断的にカリキュラムを計画
　　○　６年間を通して、自然環境・社会環境の多様性と相互性の理解を深める流れの確立
　　△　幼稚園あるいは中学校との接続や連携により、より効果的なカリキュラムとする

【１年】○　自分で集めた情報を適切に分類して気付きを促すなど、理由を大切にする思考過程
　　○　ペア学習を通して、類似点や相違点を見付けるなど、協働的に問題に取り組む学習活動
　　△　児童の発言等からさらに気付きを促し、思考を深めることを目的とした発問が不十分

【２年】○　「１年生に伝える」というめあてを意識した、目的意識が明確になっている授業
　　○　目的に応じて内容や方法を決めるだけでなく、「理由」を追究する思考の深まり
　　△　発表に向けて、「内容」と「方法」を同時に考える思考作業の難しさ

【３年】○　伝える内容とその「理由」を考え、交流することでよりよい考えを導く追究過程
　　○　思考ツールを活用し、より深く「理由」を考えるなど、整理・分析の仕方の学び
　　△　子どもの課題意識と指導者のねらいの関係が弱く、目的からのズレが見られた

【４年】○　目的達成するための「手段」として、「プログラミング」を取り入れた先進的な授業
　　○　「めあて」を意識して取り組むための授業展開や子どもの発言の生かし方
　　△　現地調査の時間がかけられず、地域の実態に基づいた情報が少なかった

【５年】○　学習活動のモデルや既習の発表方法を示すなど、子どもが見通しをもてる指導
　　○　優先順位を付ける活動から、情報不足に気付き、調査を追加する必要性を実感
　　△　考えの根拠に合った情報が活用できず、主観的な理由で判断してしまっていた

【６年】○　実態把握のための調査活動やその調査結果から課題の解決方法を追究する学習の流れ
　　○　ＣＭの特性から目的に対しより効果的で効率的な方法を探る思考過程の経験値をもつ
　　△　対象が外国人で、内容のみならず言語理解の課題も含んでおり、目的が複雑化した

第３学年総合的な学習の時間　学習指導案

北谷町立北谷中学校 教諭 石井　貴徳

１．単元名「沖縄の宝（うちなーぬたからむん)」「うちなーぐち」

2. 単元の目標

・世界に存在する言語の種類と今の言語の現状を知り、沖縄にあるうちなーぐちについて調べ、発表することができる（知識・技能）

・討論において失われつつある言語の現状から守るべきかどうかを客観的に考えて自分の意見を述べることができる。また、言葉を話さずに自分の意思を相手に伝える方法を考え、表現することができる。(思考・判断・表現)

・沖縄のうちなーぐちについての歴史や地域による違いを意欲的に調べたり、うちなーぐちを使って意欲的に話すことができる（主体的に学習に取り組む態度）

３．単元について

（１）教材観

現在、世界では 7000 の言語が使用されているが、そのうち半数は今世紀中に消滅するといわれている。もっと言うと「2 週間に 1 つの割合で言葉が消滅している」のである。このような事態になった原因としてよく指摘されるのは、植民地化やグローバリゼーション、都市部への人の移動などや、地震などの天災で言葉の使い手が亡くなってしまうことなどが挙げられる。しかし、そのような原因よりももっと重要なことはそれによっておこる結果つまり、「言語が失われることは文化が消滅することを意味する。」ことである。現在、うちなーぐちとよばれる沖縄方言を含む琉球方言は 2009 年のユネスコによる言語の消滅危険度評価で危険評価、つまり消滅する恐れのある言語として挙げられている。我々のまわりでもうちなーぐちを話す者が高齢化により、どんどん少なくなっていく中で、かたや若い世代はうちなーぐちと共通語である日本語をかけ合わせた、「うちなーやまとぐち」とよばれる言葉を話している。つまり文化の継承が少し違った形で起こっているのである。現在、沖縄本島では純粋なうちなーぐちを話す者は少ない。しかし、そのような貴重な方言が多少表現が違ったとしても若い世代から高齢者などのすべての世代において日々の生活の中に浸透し、当たり前のように使われていることから、守るべき沖縄の宝としてうちなーぐちを取り上げて扱うのにふさわしい教材と考える。また、うちなーぐちは他の方言と比べると理解が難しい方言の部類に入ると思われ、地域や世代などでも違いが見られるため、非常に興味深い教材であると思われる。

（２）生徒観

教材観でも述べたが現在の中学生が使っている言葉のほとんどがうちなーやまとぐちであり、本当のうちなーぐちとはいいがたいところもある。さらにこのうちなーやまとぐちは若い世代の流行りを受けて日々変化しており、新しく生まれた言葉も多い。地域による変化もある。そのような新しい言葉の意味も曖昧な状態で使う生徒が多いため、誤解が生まれることも多い。また、現在の親の世代と比べても本土からの共通語が浸透してきており、うちなーぐちの活用頻度はどんどん少なくなっている。親の世代であっても以前は祖父母のうちなーぐちを話せなくても聞くことができた人数も今では本当に少なくなってきている。さらにその子供たちの世代では全く理解できない者がほとんどであることは想像に難くないだろう。そんな状況にある生徒たちにとって、うちなーぐちについて考えることは普段使っている言葉の源を辿る学習として意欲的に取り組みやすいと思われる。

（３）指導観

沖縄の宝は数えきれない。しかし、人々の生活・文化に一番根付いている言葉や方言に対する意識が低いと感じることがある。「言語が失われることは文化が消滅することを意味する。」という言葉は誇大表現ではない。言葉があるだけで、ない場合と比べ人は何百倍ものコミュニケーションをとることができる。そこから表れる感情や雰囲気が人を動かすこともあるだろう。このうちなーぐちの学習を通して言葉の大切さやその言語が生まれた歴史、うちなーぐちが伝播し、伝わっていった流れや現在のうちなーやまとぐちとの違いなど、分かっているようで分からなかったことを学習できる機会としたい。

（４）ＥＳＤとの関連

・学習を通して主に養いたいＥＳＤの価値観

【多様性】：うちなーぐちを含めた世界の言語の種類やその実態を知ることを通して文化の多様性に気づくことができる。

【有限性・責任性】：地域で話されているうちなーぐちを調べることによって昔から話されてきた言葉が衰退し、消えてしまうかもしれない状況を考え、後世に残そうとする態度を養う

【相互性・連携性】：祖父母の代から話されてきたうちなーぐちを話す取り組みを行うことでうちなーぐちを世代間のつながりをつくり、みんなで守り、周りに広げていく心を養う

・主に関連するＳＤＧｓ

目標 4 すべての人々に包摂的かつ公平で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会をを促進する

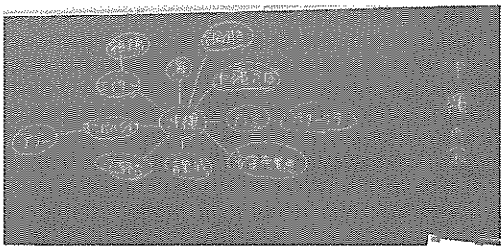
4.7　2030 年までに、持続可能な開発のための教育及び持続可能なライフスタイル、人権、男女の平等、平和及び非暴力的文化の推進、グローバル・シチズンシップ、文化多様性と文化の持続可能な開発への貢献の理解の教育を通して、すべての学習者が持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする。

目標 10 各国内および各国間の不平等を是正する

10.2　2030 年までに年齢、性別、障害、人種、民族、出自、宗教、あるいは経済的地位その他の状況に関わりなく、すべての人々の能力強化及び社会的、経済的及び政治的な包含を促進する。

４．評価規準

知識及び技能	思考・判断・表現	主体的に学びに向かう力
①世界に存在する言語の種類と今の言語の現状を知る ②沖縄にあるうちなーぐちについて調べ、発表することができる	①討論において失われつつある言語の現状から守るべきかどうかを客観的に考えて自分の意見を述べることができる ②言葉を話さずに自分の意思を相手に伝える方法を考え、表現することができる	①沖縄のうちなーぐちについての歴史や地域による違いを意欲的に調べることができる ②うちなーぐちを使って意欲的に話すことができる



＜沖縄の宝のウェビング＞

＜うちなーぐちを残すべきかの討論の場＞

＜沖縄ハンズオンによるうちなーぐち講話＞

5．学習活動の概要

全６時間

	主な学習活動	学習への支援	◇評価・備考
見つめる	●最近のニュースについて考える 「どんなニュースが記憶に残っているかな？」 Q問いあなたの考える沖縄の宝はなんですか？ ●出てきたものをグループ分けをする ●模造紙に書いて発表する ●出てきたものを黒板に貼って比較 ●出てきたものの中から「うちなーぐち」について考える	・最近のニュースPP使用 （近所の火事、バイク事故、首里城） ↑できるだけ身近なものから県内まで ・個人でのウェビング→6人グループでの話し合い ・グループ分けが難しいところは「海・陸」などの大きなカテゴリーから考えさせる ・発表の役割分担をする ・共通しているものを把握する ・おじい、おばあの使っているうちなーぐちってわかる？	ワークシート コミュニケーション力 発表・模造紙
深める	●世界で話されている言葉の種類と現状について（滅亡する言語、滅亡した言語） Q問いうちなーぐちは守るべきか？ （討論活動） ●言葉のない世界を体験する ●言語＝文化であることの紹介と2009年のユネスコの提案を知る ●もう一度うちなーぐちは守るべきか考える	・ＰＰを使って視覚的に言語の現状を伝える ・討論：自分の考えをワークシートに書き、賛成・反対のゾーンの席に移動する。それぞれから議長を１人ずつ選出し、討論をスタートする。途中と最後にゾーンの移動を許可する。（みんなの意見を聞き、考えが変わった人の為） ・ロールプレイ（２人セット：片方がもう一人に対して紙に書かれたお願いを言葉を使わずに（ジェスチャーなどを使って）相手に伝え、理解できるかどうか） ・ＰＰを使って説明する ・グループで話し合い活動を行い、グループごとの意見を発表する	※知識及び技能① ※思考・判断・表現① ワークシート クリティカルシンキング コミュニケーション力 ※思考・判断・表現② 行動観察 ワークシート
調べる	【ＰＣ室＆図書室】 Q問いみんなのしらないうちなーぐちの秘密を見つけよう ●グループで調べる（４人グループでＰＣ室と図書室で半々にする） ●次時までにＰＣ＆図書室で分からなかったことについて親、祖父母、地域の人からインタビューしてくる（宿題）	・ＰＣや図書館の本を利用してうちなーぐちについて調べる （各教室にあるしまくとぅば読本も利用してよい） ・調べる内容について悩んでいるグループには「歴史・地域・今と昔」などのテーマを与えて促す ・地域の公民館や老人クラブ、文化センターや町立図書館などを利用してくるように促す（写真などを撮影して資料もＯＫ）	ワークシート 宿題のワークシート

まとめる	【ＰＣ室＆図書室】 ●前時＆宿題で調べたことを新聞形式にまとめる （もし、できなかった場合は宿題）	・壁新聞のひな型配布（A0サイズ） ・グループで役割分担を行い、書く場所やレイアウトを決めておくと進めやすい ・色鉛筆、マーカー、色紙、ハサミ、のりなども準備	行動観察 ※主体的に学びに向かう力① ※知識及び技能② コミュニケーション力 システムズシンキング
伝える	●前時に作った新聞を発表する ●発表した新聞を張って展示し、お互いに読み合う ●うちなーぐちを使っている海外の国を紹介する ●海外の国の言葉の中にうちなーぐちと同じ表現があるのはなぜかグループで話し合う	・発表の役割分担をする ・壁新聞の展示だけでなく、集会時のすき間時間でのうちなーぐちクイズや給食時の放送による啓発も行う。 ・中国語、タガログ語、インドネシア語の中でうちなーぐちと同じものをピックアップする ・話し合いが進まないようであれば、伝わった時期などヒントを与え、促す	※知識及び技能② 発表 システムズシンキング コミュニケーション力
深める	【体育館 or 多目的室】 ●町内 NPO（沖縄ハンズオン）に講演を依頼し、全学級を対象に講話を行ってもらう。 ●その後、各学級に分かれて実際にコミュニケーションアクティビティを行う ●3 年生で踊るエイサーの地謡の歌詞の意味を考える	・実際に生徒が使っているうちなーやまとぐちとうちなーぐちのちがいを教えてもらう ・各教室に講師を配置し、実際にうちなーぐちで話してもらうことによって単に言葉の羅列ではなく、表現の仕方やコミュニケーションの取り方を学ぶ。 ・エイサーで歌われている唄の意味を単語の流れから考えてみる	コミュニケーション力 ※主体的に学びに向かう力② 長期的思考力

６．成果と課題

はじめ、沖縄の宝として挙げられたものはやはり首里城（７０％）でうちなーぐちは７％のグループしか挙げなかった。その理由として「当たり前に使っているから」が多く、次いで「言葉と宝が結び付かない」が多かった。しかし、この活動を行っていく中で「うちなーぐちって知っているようであまり知っていない」や「言語が２週間に１つ消えているのに危機感を感じた」など感想が増え、終盤では「自分が使っている言葉がどうやってできたのかが分かった」、「おじいやおばあの話をもっと聞いてみたい」、「自分たちの地元の方言を探したい」などの意見が出てきて、今まで身近にありすぎて気に留めなかったものの大切さを改めて実感したという意見が多数を占めた。また、言葉を使わないロールプレイアクティビティではほぼ100％の生徒が「楽しい」と答え、さらに「言葉を使わないで伝えることって難しい」や「言葉って何気なく使っているけど実は結構重要ということが分かった」などの意見が挙がった。課題としてはやはり生のうちなーぐちに触れる活動の選択肢があまりなく、その分野を開拓することが重要である。ここからの発展として地域でのうちなーぐちの違いなどを学校間交流などで行うことも自分たちが使っている言葉を認識するうえで大切であると感じる。

『まるやまの自然と文化を守る会』

背景

かつて　良質のヨシ生産地として
ヨシ産業が栄えていた

次第に　生活様式の変化に伴い、
ヨシの需要が減少
＋中国から廉価なヨシが輸入

やがて　地域住民も高齢化しており、
ヨシ産業は衰退してきている

問題　自然と文化を守るにあたって、
地域住民だけでは難しい

目的

事業者、行政、大学、地域住民、
環境保全ボランティア団体など、
様々なステークホルダーの
連携した取り組みにより…

地域の価値を再発見し、
まちづくり活動を進めるとともに、
滋賀県の宝である琵琶湖の保全に役立てる

まとめ

目的　円山地域のまちづくり
琵琶湖の保全

活動　企業の取り組みに協力
地域のイベントに参加

成果　経済的な基盤を作るきっかけ
地域住民との信頼関係

課題　協力関係を築くにあたって障害となるものを把握する
持続的な繋がりを作るためには相手の立場を理解する
活動や製品に持続性のある価値を付加させる
同じに見えて違うといった工夫を凝らす

今後の方向性

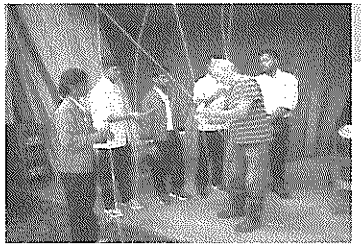
方針①：経済的自立を目指した活動の確立
（儲けるというのではなく損をしない程度）

➡ 取組①：観光物産協会、㈱まっせ等と連携した、
有料のエコツアーの実施

方針②　学校での環境学習への協力体制の確立
（今年度は具体的な成果を得られなかった）

➡ 取組①：小学校や中学校の担当教員の考えを聞き取り、
具体的な学習内容を提案

活動①　～産との連携～



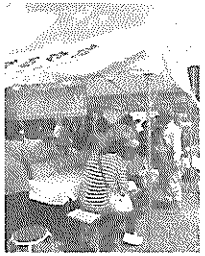
ＣＳＲ活動に熱心な企業との連携

㈱日吉が受け入れている海外研修生を紹介してもらい、円山地域を案内し、ヨシそのものやヨシ製品を通じた異文化交流。

近江八幡観光物産協会との連携

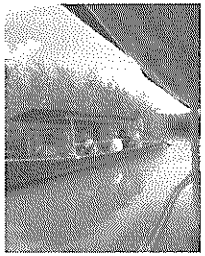
竜王アウトレットパークで開催された観光ＰＲイベントにて、ヨシズ編みなどのヨシを使った工作体験。

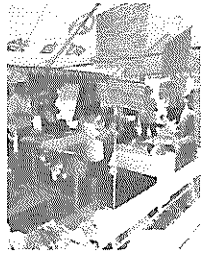
活動②　～官との連携～



滋賀県環境政策課との連携

夏休みの恒例行事となりつつあるびわ活の一環として円山町で開催されたイベントにて、生き物観察、水郷めぐり、ヨシ工作など、自然と触れ合う場を提供。





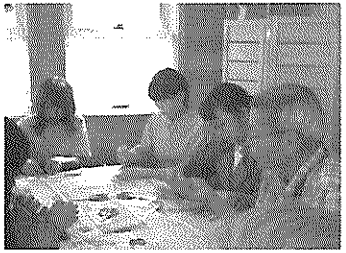
他にも・・・

近江八幡市教育委員会、八幡中学校、島小学校といった教育機関を訪問し、環境学習に取り入れてもらえないか打診。

活動③　～学との連携～

立命館大学との連携

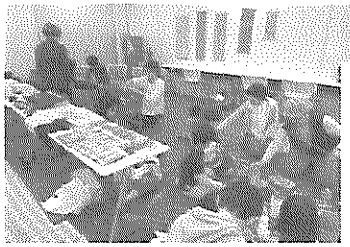
フィールドワークを主体とした授業の一環で、水郷めぐり、ちまき作り、ヨシ工作などを体験した上で、受講学生がエコツアー案を作成。



他にも・・・

京都大学の森里海連環再生プログラムにおける活動において、円山地域を取り巻くヨシなどの環境に関する学習に協力。

活動④　～民との連携～



こども園保護者会との連携

こども園の保護者会が主催のイベントにて、よし笛演奏、紙芝居、ヨシ灯り制作やヨシズ編み体験など、ヨシを題材に、親子での体験を企画。

他にも・・・

島学区の文化祭において、ヨシを使った笛や額縁の工作体験ができるコーナーを担当するなど、地域行事にも積極的に協力。

成果①　～産との連携～

ＣＳＲ活動に熱心な企業との連携

円山の自然や文化、ヨシの利用可能性については、異文化圏の方からみても魅力的であることが分かった。

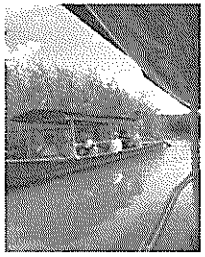
近江八幡観光物産協会との連携

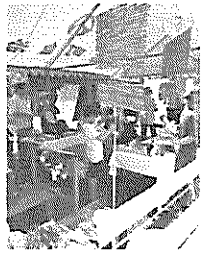
活動を継続していくにあたって必要となる経済的な基盤を作るきっかけとなった。

成果②　～官との連携～

滋賀県環境政策課との連携

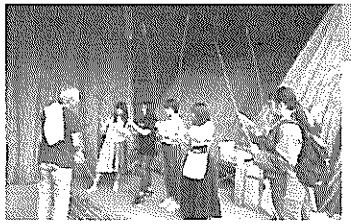
びわ活ガイドブックに掲載されることで、他府県からも多くの方に来ていただき、円山の自然や文化を伝えることが出来た。





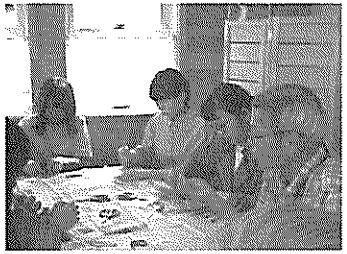
和船に乗っての水郷めぐり、よし笛の生演奏、ヨシを使った工作体験、まち歩き、といった多様な活動ができたことは好評であった。

成果③　～学との連携～



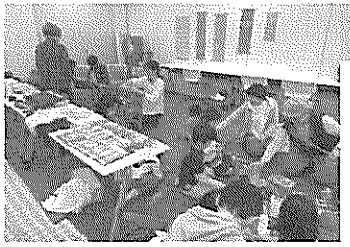
立命館大学との連携

京都や大阪で遊ぶ傾向が高い立命館大学の学生は、琵琶湖での体験等をしないままに卒業される方が多いが、この体験を通じて滋賀の良さを発見してもらうことができた。



県外出身者が多いことを踏まえると、発見してもらったことを発信する機会にも繋がった。

成果④　～民との連携～



こども園保護者会との連携

地域の活動に積極的かつ継続的に参加することで、信頼関係が生まれてきた。

子どもを対象とした活動に協力することで、保護者として同伴される子育て世代の方々の意見を聴く機会にもなった。

課題①　～産との連携～

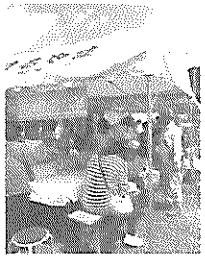
ＣＳＲ活動に熱心な企業との連携

通訳を介してでは、十分な意思疎通ができたとは言えず、異文化圏の方が感じたことをもっと深く掘り下げていければ、関係人口獲得の新たな糸口となり得る。

近江八幡観光物産協会との連携

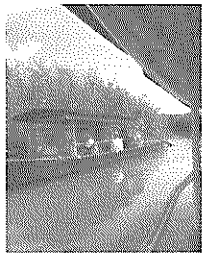
経済的に自立するためには、活動に何らかの価値（目新しさという価値だけではない、持続性のある付加価値）が必要。

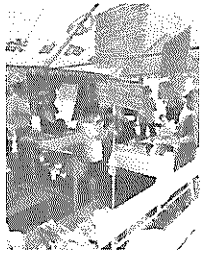
課題②　～官との連携～



滋賀県環境政策課との連携

当日になってバタつくシーンが見受けられたため、事前申込を受け付ける方が良いかどうかを検討する必要がある。



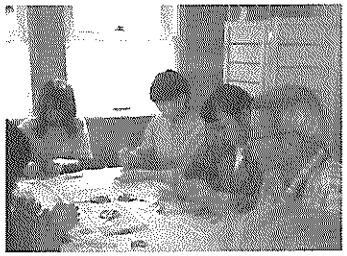


環境学習への協力については、学校側からの積極的な反応は無かったが、何が障害となっているのかを把握する必要がある。

課題③　～学との連携～

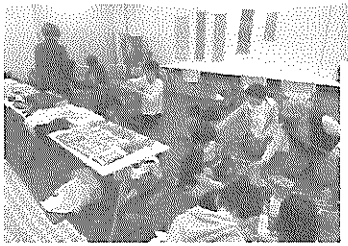
立命館大学との連携

持続的に連携のできる関係となりたいが、就職活動やクラブ等の活動に時間を割かれることに起因して、一過性のものとなってしまった。



外部講師による講座ではなく、研究室単位とのつながりができれば、卒論のテーマ次第ではあるが持続的に連携のできる関係を作れる。

課題④　～民との連携～



こども園保護者会との連携

対象が地域である以上、毎年同じことを続けていては飽きられてしまう可能性もあるため、定期的に刷新したり、同じに見えて違うといった工夫を凝らす必要がある。

内容はもちろんのこと、周知の仕方によって、興味の湧き方には大きく差が出ることにも留意しておく必要がある。

ＥＳＤ研修会Ⅰ「海洋プラスチック　何が問題、どう防ぐ」

講師：東京大学 主幹研究員 及川 幸彦 氏

ＥＳＤ研修会Ⅱ「ESD for 2030・これからのESDの方向性」

講師：東京大学 主幹研究員 及川 幸彦 氏

第６学年　総合的な学習の時間　実践報告

奈良市立飛鳥小学校
教諭　　大西　浩明

１．単元名　　奈良町の町名　－町名から地域に誇りをもち、地域に働きかけられる人を目指して－

２．単元の目標

・奈良町の町名には、様々な謂れや由来があることを知り、町名や地名には意味や歴史があることを理解する。（知識・技能）
・奈良町の町名について調べたり、気づいたことを話し合ったりする活動を通して、地域の歴史について考えたり、表現したりする。（思考・判断・表現）
・奈良町の町名の由来を意欲的に調べ、奈良や飛鳥を大切にしようとする意欲や実践力をもつ。（主体的に取り組む態度）

３．単元について

（１）教材観

奈良町とは、奈良市中心市街地の南東部に位置する歴史的な地域である。平安末期の 11～12 世紀頃、東大寺、興福寺、春日大社、元興寺の周りに、寺社の仕事に携わる人々によって形成された。中世以降は、「寺社のまち」、「商工業のまち」、「観光のまち」として、人々の営みとともに発展してきた。奈良町は、豊かな歴史や文化が育んだ、町家などの歴史的な建物や伝統行事が残り、多くの人々を惹きつける魅力あふれる「まち」である。現在は、その街並みを活用した飲食店があったり、さまざまなイベントが開催されたりして、多くの観光客が訪れる地域となっている。

そんな奈良町の町名には、さまざまな謂れや由来がある。たとえば、十字路の小路だったところは「辻子」、行き止まりだったところに突き抜けて新しい道ができたところは「突破」、新たに家が立ち並んだところは「新屋」、寺の門があったところは「御門」、元興寺や興福寺の建物の跡は「堂」「院」などの名前がついている。他にも、元興寺の鬼の行方を見失った場所は「不審ヶ辻子町」、陰陽師たちが住んでいた町は「陰陽町」という名前がついている。このように、町名にはそれぞれに意味や歴史があり、元興寺を中心としたこの地域の長い歴史を感じることができる。本校の校区は、奈良町の一部を含んでいる。

これらの町名の由来を調べたり、考えたりする活動を通して、自分たちの住む地域への理解を深め、地域への誇りと愛着を深めることができると考える。そして、長く守られてきた地域だからこそ、これからも自分たちが大切に引き継いでいこうとする意欲と実践力を育てることができると考える。

（２）児童観

本学年の児童は、１年生から５年生までの世界遺産学習を通して、飛鳥や奈良の魅力や素晴らしさについて学んできた。５年生では、薬師寺・唐招提寺の見学に行くなど、世界遺産「古都奈良の文化財」そのものの魅力や素晴らしさについて学んだ。また、校区にある世界遺産として春日山原始林について学習し、春日山原始林の魅力と現在の問題について知り、これからの自分たちにできることについて考えたりした。奈良町については、３年生のときに奈良町たんけんを行い、奈良町にあるいろいろな施設や、奈良町を訪れる観光客の意識について調べたり考えたりする活動を行った。しかし、これまでの学習では奈良町の魅力については学んだが、様々ある町名に注目したことはない。また、「飛鳥」という学校の名前について考えたこともなく、その歴史について知る児童はほとんどいない。

（３）指導観

まず、自分たちが聞いたことのある奈良町の町名を発表し、その由来について考える。児童はこれ

までに奈良町について学習してきているので、奈良町には昔ながらの街並みが残ることや、観光客が多いことなど、ある程度の知識はもっている。しかし、町名に注目したことはなかったため、その由来については知らないだろう。その後の町名調べの意欲をもたせるためにも、その由来を予想させ、町名調べの計画をたてる。そして、実際に奈良町に行き、町名調べをする。奈良町にある町名の看板には、その町の町名と、町名の由来について書かれている。いくつかの町名について調べることで、町名にはそれぞれに由来や歴史があることに気づかせたい。そして、奈良町の町名について気づいたことを話し合う。奈良町には様々な町名があり、それぞれに由来があるが、共通した言葉が用いられているものがある。たとえば、「辻子」、「突破」、「新屋」、「堂」、「院」である。この共通の語と名前の由来の関係について考えることで、奈良町が元興寺の旧境内にあったことや、元興寺がとても大きな寺であったことに気づくだろう。

次に、小学校の名前であり、自分たちにとって身近な名前である「飛鳥」の由来について調べる。「飛鳥」という地名は、今はこの地域にはなく、なぜ「飛鳥小学校」という名前なのか、また、これでなぜ「アスカ」と読むのか、明日香と飛鳥はどうちがうのかなどについて、インターネットなど活用して調べていきたい。本校の「飛鳥」という学校名にも、奈良町と同じように由来や歴史があることを知ることで、飛鳥の歴史の深さやその素晴らしさに気づかせるようにする。

次の単元の「飛鳥スマイルキッズ」は、これまで６年間の学びを通して感じてきた、「誇れる飛鳥や奈良」のために、自分たちにできることを考え、実際に活動するものである。たとえば、地域の清掃活動や、地域の人たちとの交流活動、観光客へのガイドなどである。本単元の学習を通して、飛鳥や奈良の対する誇りと愛着をさらに深め、地域のために活動する「飛鳥スマイルキッズ」に意欲的に取り組めるようにしていきたい。

（４）ＥＳＤとの関連

・学習を通して主に養いたいＥＳＤの視点

【多様性】：町名や地名には、様々な意味や由来があることに気づくことができる。

【公平性】：時代を超えて町名や地名が伝わってきたことを考えることができる。

【責任性】：町名調べから地域に誇りと愛着をもち、自分たちが地域のために活動することが大切であることを考え、そのための活動を進めることができる。

・学習を通して主に養いたいＥＳＤの資質・能力

長期的思考力･･･町名や地名の歴史の深さを知り、これから地域のためにできることを考える。

協働的行動力･･･互いの意見を出し合い、みんなでよりよい町のために行動することができる。

・ＥＳＤで育てたい価値観

世代間の公正

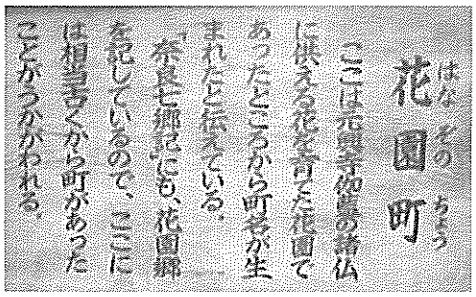
・ＳＤＧｓとの関連

目標 11　「住み続けられるまちづくりを」

４．評価規準

ア　知識・技能	イ　思考・判断・表現	ウ　主体的に取り組む態度
①町名や地名の由来を知り、その意味や歴史の深さを理解している。	①町名や地名に見られる共通性について考えたり、表現したりしている。 ②これからの地域のために、自分たちにできることを考え、表現している。	①町名や地名に関心をもち、意欲的に調べたり考えたりしている。 ②自分たちの地域を大切にしていこうとする意欲と行動力をもっている。

5．単元展開の概要（全 10 時間）

主な学習活動	学習への支援	◇評価・備考
1．これまでの学習を振り返り、町名について興味をもつ。① ・飛鳥や奈良について１年生からどんな学習をしてきたか振り返る ・町名クイズ	・今までの学習を振り返り、「飛鳥」のすばらしさを確認させるとともに、身近な奈良町についてまだ知らないことがあることに気づかせる。	◇ウ①
2．町名調べの計画をたてる。②	・奈良町を３つのエリアに分け、学級ごとで手分けをして調べる。	◇ウ①
3．町名調べに行く。③④ 	・家の表札や電柱などに書かれている町名に注目させる。 ・町名の説明の看板を見て、その由来をメモさせる。	◇ウ①
4．町名調べから分かった町名の由来について話し合う。⑤⑥ ・薬師堂町、瓦堂町 ・納院町、勝南院町、中院町 ・中新屋町、芝新屋町、西新屋町 ・高御門町、今御門町、下御門町  花園町（はなぞのちょう） ここは元興寺伽藍の諸仏に供える花を育てた花園であったところから町名が生まれたと伝えている。 『奈良七郷記』にも、花園郷を記しているので、ここには相当昔から町があったことがうかがわれる。 「堂」とは、仏像などが収められていた建物 「院」とは、大きな寺の中にあった小さな寺院 「新屋」もとは元興寺の境内であったところに新しく家が建てられた 「御門」とは、元興寺のいくつかあった門の一つ 元興寺に関係のある名前が多い。	・看板の説明から町名の由来を確かめたり、町名の共通性を考えたりする。	◇イ① ◇ウ①
5．話し合った結果から分かったことや考えたことを出し合う。⑦ 元興寺って大きな寺だったんだなあ。 元興寺と興福寺は隣り合っていてどちらも大きいなあ。	・奈良町は元興寺の旧境内に新しくつくられた地域であることを地図から確かめさせる。	◇ア①
6．「飛鳥」の由来について調べる。⑧ ・なぜ、飛鳥小学校なのか？ ・なぜ、「アスカ」と読むのか？ ・飛鳥と明日香のちがいは？	・インターネットを活用し、調べていく。	◇ウ①
7．調べて分かったことを出し合い、感じたことを話し合う。⑨		◇ア① ◇イ①

元興寺は、もともと明日香の地につくられた飛鳥寺（法興寺）という日本最古の寺である。平城遷都とともに、飛鳥寺が奈良の都に移され、この地を「飛鳥」と呼ぶようになった。明治の初め、学制発布によってこの元興寺の境内につくられた研精舎が飛鳥小学校の前身である。 **飛ぶ鳥の　明日香の里を　置きて去(い)なば** **君があたりは　見えずかもあらむ** 万葉集にもいくつか詠まれているように、明日香の枕詞として「飛ぶ鳥」を冠しているうちに、「飛鳥」をそのまま「アスカ」と読むようになったという説や、渡来人が日本の安住の地とした場所を「安住（アスカ）」と名付けたという説がある。漢字がなかった時代から「アスカ」と呼ばれていて、当て字を日が３つ入る「明日香」としたが、後年、２文字でないと縁起が悪いとして「飛鳥」と書くようになった説もある。平成の大合併で、飛鳥村を含む３つの村が合併する際、「飛鳥」は使わず「明日香村」としたので、今も飛鳥と明日香が混在している。		
８．今後自分たちが飛鳥や奈良のためにできることを話し合う。⑩ ・観光客を笑顔にする ・地域の環境をよくして笑顔にする ・地域の人と交流して笑顔を作り出す	・次の単元である「飛鳥スマイルキッズ」について説明し、どんなことができるか話し合う。	◇イ② ◇ウ②

６．成果と課題

人の名前にも、名付けた人のいろいろな思いや願いがあるように、町名や地名にも様々な由来や願いが時代を超えて込められていることを実感できた【多様性】【公平性】。そして、そんな歴史が詰まった場所に生きていることに喜びと誇りを感じることができた。［世代間の公正］

奈良の、ほんの小さな場所に、たくさんの思いが詰まった町がたくさんあった。そんな中で、私たちは「飛鳥」という、小さいけれど1400年の歴史のある場所で暮らしているのがうれしいと思った。

名前の由来に天皇とかの名前も出てきて、やっぱり奈良はすごいと思った。「飛鳥」という昔から伝わってきた美しい名前があるから、「飛鳥」をずっと美しくしていきたいと思う。

ふだんは何も考えないで歩いている道だけど、何百年、何千年前にもここをだれかが歩いていて、歴史が私たちとつながっていると感じることができた。1400 年も前のことと今の自分たちがつながっているのは、本当にすごいことだと思う。だからこそ、途切れさせずきちんと未来へつないでいく責任が私たちにはあると思う。この町をどうすればもっとよくなるか、真剣に考えていきたい。

本単元は、これまで６年間の地域を見つめ考える学習を振り返り、さらに地域への理解を深めることによって、次単元「飛鳥スマイルキッズ」により効果的につながる学習にと位置付けて展開した。現在、活動に向けて具体的にどのように進めていくかを計画中である（長期的思考力）。児童一人一人がより主体的に、よりよい飛鳥や奈良のために行動できる実践力を発揮できるように、互いに意見を出し合いながら進めていけるようにしたい（協働的行動力）。

2019 年度 近畿 ESD コンソーシアム成果発表会・実践交流会

実践発表 概要

奈良教育大学附属幼稚園
5 歳児担任 鎌田大雅

テーマ

ならの鹿のためにできること

ねらい

◎鹿に思いを寄せ、自分たちにできることを考え、思いを出し合う。
◎友達と目的を共有する。

活動概要

本園の 5 歳児は 11 月中旬に、園から歩いて、奈良公園を通り東大寺二月堂に遠足に行く。園から歩いていくことができるところに二月堂があることを知り、さらに春日山原始林や神社など世界遺産や地域遺産の中にあることを体感することを目的として行っている。事前に大学のユネスコクラブの学生に二月堂についての話を聞かせてもらう機会をつくり、事前に聞いたことや知ったことを自分たちの目で確かめに行くことも目的としている。

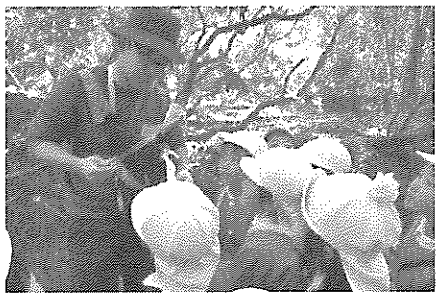
今年は遠足に行く 2 週間くらい前に、鹿がプラスチックごみを食べすぎたことが原因で死んでしまったことが載っているポスターを保育室に貼ったことがきっかけで、子どもたちと鹿について話し合いの時間をもつことになった。

話し合いの中では「ほんっとうにかわいそう」「鹿がゴミを食べて死んじゃうのかわいそう」「おいしくなかったんちがうかな？」「ゴミ食べてしんどかったやろうな」など、子どもたちから、鹿の立場に立ち、ポスターと話を聞いて感じたことを自分たちの言葉で表現していた。

ある子どもから「鹿が間違って食べないようにゴミを拾おうよ」と、声が上がり、「そうしよう」「いっぱい見つけよう」と周りの子どもたちも思いを一つにしました。そこで、保育者から二月堂遠足の際にゴミを拾いながら行くことを子どもたちに提案した。

ゴミ3．2キロが子どもたちにも実感できるように、かごに自分たちの水筒を入れ、実際に全員が持ち上げる機会をつくった。「こんな重たいのがお腹にずっと入ってたのか」「がんばってゴミ拾おう」と、実際に重さを知るとより、鹿の気持ちに近づき考える姿が見られた。

遠足当日は、ゴミ袋とヒバサミを５つ持って出発した。奈良公園に入るまでの住宅街にはあまりゴミは落ちていなかった。しかし、公園に入り、少しわき道にそれたところたくさんのゴミが落ちていることに気付くと、そこから子どもたちの目の色が変わり小さなゴミも見逃すまいと真剣に道中を進んだ。



遠足の道中で拾ったゴミの総重量は1．7キロであった。拾ったゴミを子どもたちも見られるように保育室に並べ、登園してきた子どもたちが「ジュース飲みかけのままや」「これって何に使ったものなんかな？」「ガラスのビンなんか食べたら大変」と、口々に話していた。

活動に至るまでの子どもの育ちと経験

今年の子どもたちがなぜポスターを見て「鹿のためにゴミを拾いたい」となったのかを、子どもの育ちや経験の側面から考察する。

○鹿に思いを寄せる

年長になり、年下の友達とかかわる機会

地域の老人介護施設に行き高齢者の方とかかわった経験

相手の思いに寄り添う

○自分たちにできることを考える

遊びの中で、より面白くなるようにと考えながら遊ぶ経験

自分たちにできることを考える力

物事を自分事として捉えようとする

○友達と目的を共有する

遊びの中で友達と目的を共有しながら遊ぶ

運動会で目的を共有して取り組む

グループでの活動に取り組む

クラス・仲間集団
意識の高まり

友達と目的を
共有する

○自分の思いを言葉にして伝える

遊びの中で楽しかったことを振り返り話す

話し合いやグループ活動で友達と思いを伝え合う

自分の思いを
言葉にする

意見を出し合い
認め、共感する

まとめ

・ESD で育てたい見方・考え方

多様性：鹿を守るため、一緒に生きていくために自分たちにできることはいろいろあること

相互性：自分たちが起こした行動は鹿や奈良の自然のためになっていること

公平性：奈良の鹿をこれからもずっと守り続けたいと思う気持ち

連携性：クラスみんなでやろうとする気持ち

保護者にも知ったことややったことを伝えること

責任性：鹿のためを思って最後までゴミを拾い続けたこと

・ESD で育てたい資質・能力

今回の実践を振り返り、幼児期に育てたい資質能力は ESD の観点からみた育てたい資質能力の基礎を担っていることがうかがえた。以下の ESD で育てたい資質・能力の視点で今回の活動を見るとどう捉えられるのかを会場の皆さんと考えたい。

クリティカルシンキング
システムズシンキング
長期的思考力
コミュニケーション力
協働的問題解決力

幼児教育をESDの観点で捉える際に、活動ばかりに目が行きがちになるが、子どもたちの育ちや経験がどのようにその活動に生きているのかを見取るという保育者の専門性が必要になってくることが考えられる。

今回の発表の機会をいただいたことで、幼児教育と ESD との関連性を探ることにつながった。コンテンツベースではなく資質・能力ベースで子どもの姿や活動を捉え、ESD の考え方に即した幼児期で育てるべき資質・能力とは何かを引き続き探っていきたい。

小学校第３学年　総合的な学習の時間学習指導案

浦添市立前田小学校
教諭　　仲村　出

１　単元名　たんけん　はっけん　ほっとけん

２　単元目標

・地域の伝統文化や産業、風景等、様々な「たからもの」を調べる活動を通して、自分たちが住んでいる地域の良さを再認識し、大切にしなければならないことを理解することができる。
【知識・技能】

・調べた「たからもの」から考えたことや気付いたこと等を話し合い、わかりやすく整理してまとめ、伝えたいことを適切に表現することができる。【思考・判断・表現】

・地域の良さやそれを守る人々に対する自分の考えをもち、地域の一員として関わって活動できることはないか意欲的に考えることができる。【主体的に学習に取り組む態度】

３　単元について

（１）教材観

本教材は、小学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編の第３章「各学校において定める目標および内容の取り扱い」（６）探求課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力において配慮する事項として、「ウ　学びに向かう力、人間性などについては、自分自身に関すること及び他者や社会との関わりに関することの両方に視点を踏まえること」にあたるものである。学習指導要領の第１の目標を踏まえ、地域や学校の特色に応じた課題、児童の興味・関心に基づく課題などを踏まえて設定した単元である。

本教材で扱う地域学習は、児童の住んでいる前田地域に焦点を当てて学習を進めることとしており、昔から遺っているものとして、前田を象徴する岩「ワカリジー」や、昔から人々の生活と関わりのある「井戸」、五穀豊穣を願った「前田の綱引き」、田を守るために始まったと言われている「前田棒」がある。また、新しくできるものとしては、那覇から敷かれる「モノレール」がある。それらを調べていくなかで、古い町並みの良さに気づくとともに、自分たちの住んでいる地域の伝統文化を守るために自分たちができることを考える教材となる。

このように地域との関わりは大きく、３学年の総合的な学習の時間で地域のよさに触れる活動は意義深いものであると考える。児童が地域に自分の足で出かけ、地域に住む人々、物、自然と直接関わることを通して、自分の住む地域に対する愛着やこだわりをもち、これからも地域に関わっていこうとする気持ちを育む活動を通して SDGs の目標 11「住み続けられるまちづくりを」を目指すこととする。

（２）児童観

児童は前学年の生活科の学習を通して、身近な地域に関心をもち、様々な場所を調べ地域の場所や人との関りを広げ、地域に親しみをもち学習を進めてきた。本学年ではその生活科の学習を生かし、４月からの社会科の「私たちの大好きなまち」という単元を通して、自分たちの住んでいる市の「まちたんけん」を行ってきた。自分たちの住む地域がどのようになっているのか学習課題をつくり、見通しを立て、解決するための地域探検を行った。自分たちの学校を中心に四方位を確認しながらそれぞれの方位に特徴があることに気づくことができた。その気づいたことを白地図に色付けたり、公共施設や地図記号を記入したりする活動を行い、地域や市の特徴をまとめることができた。

事前アンケートでは、「自分の住んでいる地域が好き」と答えた児童が 78%、「前田には自まんできるものがある」と答えた児童が 58%、「大人になっても前田に住みたいか」という質問に児童は 74%の児童が住みたいと答えており、自分たちの住んでいる地域に興味関心があり、地域学習に肯定的な考えをもつ児童が多いと考える。

しかし、地域への関心はあるがその理解はまだ漠然としている段階である。そこで、地域の特

色を更に深める活動を通して、地域の文化遺産や自然・新しい建物等に視点を当て焦点化し、活動を主体的に解決していく学習に発展させるようにしていきたい。

（３）指導観

３学年にとっては、総合的な学習の時間に初めて取り組むこととなる。「たんけん　はっけん　ほっとけん」をテーマに地域の文化遺産や自然・新しい建物等に興味や関心をもたせ、自分たちの住んでいる地域から課題を見つける学習を展開していきたい。

これまで児童は社会科の学習で、自分たちの住む地域に関心を持ち、地域の様子や違いに気づかせる学習を行ってきている。更に浦添市の地形、土地利用、施設や交通の様子などについて調べ、同じ市内でも場所によって違いがあることに気づき、パンフレットにまとめる活動を行った。

「ふれる」では社会科との関連として、市内巡りを通し浦添市全体として見てきた中で、前田地域の位置付けや、自然や緑が豊富であること、文化遺産が数多くあったり、新しい建物等開発が進んでいたりする地域であること捉えさせ、自分の調べたいことを見つけさせる。

「つかむ・見通す」では、課題別にグループを作り、調べたいことを話し合って明確にさせ、調べる計画を立てさせる。

「調べる」では、地域の歴史ガイドの人材活用や、グループでのフィールドワーク、インタビューや資料活用等、色々な方法で調べさせていく。また、調べてきたことをその都度まとめさせ、新たな課題についての追及の時間も設定し学習意欲を高めていく。

「まとめる・伝え合う」では調べたことをどのようにまとめるかを話し合わせ、うまく伝えるための効果的な方法を考え発表会を行えるようする。

それぞれが調べた「たからもの」を地域の方々や、他学年にも広めていけるよう継続して取り組んでいきたい。そして、児童自身が、地域に関わる活動を行うことで、地域の一員としての自覚が育ち、ふるさと意識を持ち、持続可能な社会づくりの観点から、つながりを尊重する力を身につけ、郷土に対する親しみや愛着を自覚できるようにしていきたい。

（４）ESD との関連

・学習を通して育てたい ESD の視点

【相互性】: 地域の「たからもの」を調べる学習を通し、地域が華やかになっていく一方で、自然環境への影響、交通渋滞等様々な事象が、自分たちの暮らしへの影響にもつながっていることに気づくことができる。

【公平性】: 地域の「たからもの」をまとめて伝える学習を通し、開発が進んでいる地域の中で、古い町並みの良さや伝統文化に気づくとともに、自分たちの住んでいる伝統文化を守るための人々の活動や思いに気づくことができる。

・学習を通して主に育てたい ESD の資質・能力

地域は、開発地域として注目されている。地域の急激な変化を児童は体感し始めており、自分たちの暮らしから見つめようとする関心が高まってきている。

そこで、これらの課題を自分事として様々な側面から捉えさせ、他の事象と関連付けて考えさせていきたい。また、分かっていることを基にどんなことが言えるか視野を広めて考えさせることを通し、システムズシンキングの育成を目指していきたい。

４　単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・課題解決に必要な知識・技能を活用する。 ・地域のよさ、人々の思いを理解することができる。	・自分の思いや願いをもち、課題を見つけることができる。 ・調べたことをもとに根拠を明確にしながら考えをもつことができる。 ・自分の考えや思いを分かりやすく整理し、相手に伝えることができる。	・地域社会の一員として自分の考えをもち、その実現に向けてはたらきかけることができる。 ・学習で培った考えや思いを生活に生かそうとすることができる。

5　単元展開の概要

過程	時	主な学習活動	【評価規準】（評価方法）《ESD の観点》
ふれる	2	○オリエンテーション ・総合的な学習の時間の進め方について知らせ、活動意欲をもたせる。 ・多様な追究の仕方を知らせる。	【主体的に学習に取り組む態度】 ・調べ学習の進め方やまとめ方がわかる。 《ESD の観点》⑦参加
	2（本時）	○前田の「たからもの」から連想することをイメージマップにしよう。 ・「たからもの」について話し合い、イメージを広げる。	【思考力・判断力・表現力】 ・これまでの学習を通して地域の「たからもの」を考えることができる。　（ワークシート） 【主体的に学習に取り組む態度】 ・学習したことや身近なことから、前田地域について調べようとする意欲をもつことができる。（ワークシート） 《ESD の観点》③多面　⑥関連
つかむ　見通す	2	○課題をつくろう。 ・調べたいことの自己課題を決定する。 ・各自の課題を発表し、友だちの課題を知る。 ・各課題別コースのグループを決める。	【思考力・判断力・表現力】 ・自分の調べたい課題を見つけることができる。（ワークシート） 《ESD の観点》①批判
	2	○活動計画を立てよう。 ・調べたいことを話し合わせ、調べることを明確にする。 ・同じ課題別にグループを組み、活動計画を立てる。	【知識及び技能】 ・課題解決に必要な情報を整理し、調べることをまとめることができる。（ワークシート） 【主体的に学習に取り組む態度】 ・意欲的に計画を立て、これからの学習に見通しをもつことができる。 《ESD の観点》②未来　④伝達　⑤協力
調べる	14	○地域の「たからもの」を調べよう。 ・課題に向かって活動を進める。 ガイドと町歩き　調査　交渉　取材 グループフィールドワーク ※調べたことのまとめを随時行う。 ※新たな課題の追及を行う。	【思考力・判断力・表現力】 ・既習事項を使って解決に向けて調べたり考えたりすることができる。（ワークシート） 【主体的に学習に取り組む態度】 ・計画をもとに意欲的に課題に取り組むことができる。（ワークシート） 《ESD の観点》①批判　③多面　④伝達　⑤協力　⑥関連　⑦参加
まとめる　伝え合う	5	○まとめ方を工夫しよう ・各グループでまとめ方や発表の仕方を話し合う。 （パワーポイント　壁新聞　紙芝居　等）	【思考力・判断力・表現力】 ・既習の表現方法について振り返り、分かりやすく見やすい表現を工夫することができる。 （パワーポイント　壁新聞　紙芝居　等） 《ESD の観点》④伝達
	4	○発表会の準備をしよう ・まとめかたや発表の仕方を工夫し、うまく伝えるための効果的な方法を考える。 ・役割分担を行い、練習をする。	【思考力・判断力・表現力】 ・分かりやすく伝えるために何をどのように伝えるのか考え工夫することができる。（準備・練習） 《ESD の観点》④伝達
	4	○前田地いきの「たからもの」を伝えよう① ・グループごとにまとめたことを発表する。 ・他のグループの発表を聞き、良かった点や感じたことを発表する。	【思考力・判断力・表現力】 ・まとめたことを、相手に分かりやすく伝えることができる。 （パワーポイント　壁新聞　紙芝居　等） 《ESD の観点》④伝達
広げる　振り返る	3	○前田地いきの「たからもの」を伝えよう② ・前田地域の「宝もの」について調べたことを地域の方や他学年に紹介する。	【思考力・判断力・表現力】 ・まとめたことを、相手に分かりやすく伝えることができる。 （パワーポイント　壁新聞　紙芝居　等） 《ESD の観点》④伝達
	2	○活動を振り返ろう ・これまでの活動を振り返り、総合的な学習の時間でできるようになったことを話し合い、まとめる。 ・地域の一員として自分でできることは何かを考えさせ、自分の成長に気づかせる。	【主体的に学習に取り組む態度】 ・探求的な活動を通して、自分たちの住む前田地域の将来について考え、深く関わろうとすることができる。（ワークシート、観察） 《ESD の観点》⑥関連　⑦参加

５　成果と課題

○社会科単元と関連させ、浦添市全体として見てきた中で、自分が住んでいる地域の特徴を捉え、様々な諸課題を見つけることができた。また、地域の伝統文化に興味・関心をもたせることができた。

○課題別にグループを作り、調べたいことを話し合って明確にさせ、調べる計画を立て実践させることで、主体的に地域への関わりをもつことができた。（フィールドワーク、インタビュー等）

○地域の方々や外部機関（NPO、沖縄県、浦添市）と一体となって学習することで、広い視野で地域学習に取り組むことができ、児童の知識・理解を深めることができた。

○調べてきたことをまとめる活動を通して、分かっていることを基にどんなことが言えるか視野を広めて考えさせることで、新たな課題について発見したり、地域の良さを再確認したりすることができた。

○学習してきたことを、どのようにまとめわかりやすく伝えるかを常に意識させながら活動に取り組むことで、目的をもって活動している。

●地域の様々な課題を見つける活動では、課題や自分事として捉えられない児童が数名いた。「課題として捉える理由」と「課題としてとらえられない理由」を話し合わせ考えさせてもよかった。

●主体的に地域への関わりをもたせるための外部機関との連携の仕方や情報の共有の仕方。

●グループでまとめる際の活動内容、役割分担等の充実を図る手立てが必要。

●分かりやすく伝えるための効果的な発表方法。

第５学年　総合的な学習の時間学習指導案

指導者　川上村立川上小学校
教諭　　川﨑　貴寛

１．単元名

「自分たちの川上村は自分たちで守る」川上村の防災教育　～６０年前の伊勢湾台風の記憶から～

２．単元の目標

・伊勢湾台風による川上村での被害について学び、防災や減災の大切さについて理解する。
（知識・技能）

・川上村の防災や減災の取組について考え、防災や減災に必要な取組について考える。
（思考・判断・表現）

・防災や減災に取り組む地域の方々の思いから自分たちに出来ること、これからの川上村に必要な取組について考える。（主体的に学習に取り組む態度）

３．単元について

（１）教材観

本単元では、伊勢湾台風の被害から６０年を迎える今年、川上村での被害の様子を学ぶことや当時を知る方への聞き取りから学習をスタートし、これからの川上村の防災や減災に必要な取組について学習を深めていく。伊勢湾台風による川上村での被害は、５３名が死亡、１９名が行方不明と「村史最大の惨禍」であった。しかし、川上村で生活する人たちは川上村の大きな出来事にもかかわらず、自分たちの村でどのような被害があったのかを知る人は少ないと感じる。また、川上村の過疎化や高齢化の課題と並行して伊勢湾台風の被害を経験し当時のことを語ることができる地域の方も限られてきている。このような現状のなかで伊勢湾台風の被害から６０年を迎える今年、これからの川上村を担う子どもたちが伊勢湾台風の被害から川上村の防災や減災について学習することはとても意味深いものだと考えた。この学習を通して子どもたちが「自分たちの川上村は自分たちで守る」という意識を高め、いつまでも安心して住み続けられる村づくりへ参画しようとする態度を育んでいきたい。

（２）児童観

川上小学校では毎年、総合的な学習の時間に地域の学習を進め、地域に愛着をもっている児童が多い。本学級の児童は、昨年度に水のつながりについて学習し、水のつながりが人のつながりをつくることについて学んだ。そして、子どもたちは今年、総合的な学習の時間に川上村の歴史的な出来事について学習したいと伝えてくれた。子どもたちは日頃からテレビなどで社会の出来事に興味を持って学校で会話をする姿がある。現在、南海トラフ地震や地球温暖化による異常気象や豪雨災害など様々な課題があるなかで「自分たちが生活する川上村は自分たちで守る」という意識を子どもたちがもてるように学習を進めていきたい。

（３）指導観

本単元では、伊勢湾台風による川上村での被害を切り口にし、防災や減災について学習を深める。文章や映像に残る記録だけでなく、当時の伊勢湾台風の被害を経験された方の記憶にも触れながら学びを深めさせたい。次に、これからの川上村を担う子どもたちが、伊勢湾台風の教訓から「自分たちの川上村は自分たちで守る」という地域愛を具体的な行動に移していくことを大事にしながら学習を進める。自分たちが学習した内容を基に、今後の自然災害から自分たちの川上村を守るためにどのような取組が必要かを考え、自分たちが学習した取組を川上村民に広く知ってもらうための手段も考えて具体的な行動に移す。

学習を通して、自分たちがこれまで学習してきた内容を生かし、自分たちが考えた自分たちにできることを率先して行おうとするリーダーシップを育みたい。また、防災に携わる人たちや行政の方々、川上村で生活する地域の方々と協力しようとする協調性を育み、気候変動に具体的な対策を行いながら住み続けられるまちづくりをしようとする態度を育んでいきたい。

（４）ＥＳＤとの関連

・学習を通して主に養いたいＥＳＤの視点

【責任性】：伊勢湾台風の悲惨さや防災・減災の大切さを学んだ自分たちにできることを考え、自分たちの川上村を自分たちで守ろうとする意識を川上村民に発信する。

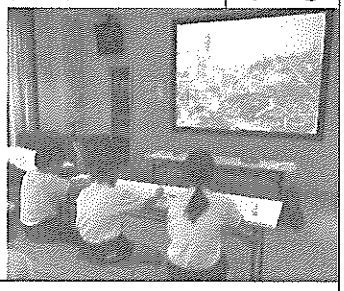
・学習を通して主に育てたいＥＳＤの資質・能力

【協働的問題解決力】：子どもたちは、伊勢湾台風の聞き取りや防災の取組について学習を進め、自分たちにできることは何かを考えながら学習を深める。次に、学習した内容を防災パンフレットとしてまとめる。そして、村民全員に防災パンフレットを配布することにより学習した自分たちだけでなく、村民の防災意識も高めながら協働的問題解決力を育てることができる。

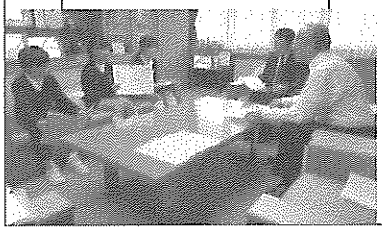
４．評価規準

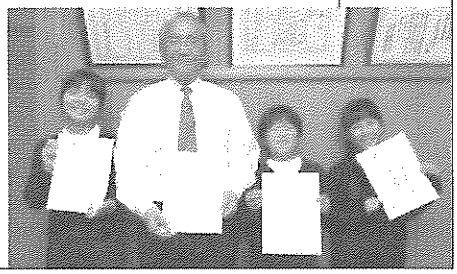
ア　知識・技能	イ　思考力・判断力・表現力	ウ　主体的に学習に取り組む態度
①　川上村での伊勢湾台風の被害について理解する。 ②　防災活動の取組やそこに携わる方々の話から防災や減災について理解する。	①　伊勢湾台風のような自然災害の被害から地域を守るためにはどのような取組が必要かを考える。	①　伊勢湾台風の被害を体験された方や防災活動に携わる方の思いにふれて、自分たちの住む地域を自分たちで守るためにできることを考える。

５．単元展開の概要（全８時間）

時	主な学習活動	学習への支援	◇評価・備考
1	・豪雨体験から伊勢湾台風の被害を受けた当時の川上村の様子について興味をもつ。	・豪雨体験から伊勢湾台風の被害を受けた川上村の当時の様子について想像したことや疑問に感じたことなどを自由に出し合わせる。 学習課題： 伊勢湾台風の被害を受けた当時の川上村はどのようなようすだったのだろうか。 	◇ア①
2	・川上村での伊勢湾台風の被害について知る。（動画や書籍で調べる）	・家屋被害、人的被害の数や写真から具体的な被害の様子について理解させる。 ・調べ学習でわかったことをまとめて整理する。 ・調べ学習から更に興味を持った当時の様子を地域の方の聞き取りから確認出来るように意識をもたせる。 	◇ア①
伊勢湾台風当時の川上村の様子について聞き取り調査をする。（家庭学習）			
3	・当時の様子を聞き取り、被災者の気持ちや心の部分についての理解を深める。	・実際に伊勢湾台風の被害を体験された方の言葉から当時の様子を想像する。（自分たちが調べたことと対比させながら） ・当時の様子（避難所での生活） ・生活がどのように変わったのか ・支援や復旧の活動について ・当時と現在を比べて思うこと ・記録だけではなく記憶の内容（心の部分）を大切にさせる。 ・これから伊勢湾台風のような被害から地域を守るために必要なこと、地域を守る取組にどのようなものがあるのか興味をもたせる。	◇ア① ◇イ①
4	・地域を自然災害から守るための取り組みについて考える。	学習課題： 地域を自然災害から守るためにどのような取組があるのか。 ・防災活動に携わる方の重要性を意識させる。	◇ア②
5	・防災・減災のためにどのような取組をしているのか聞き取る。	学習課題： 行政以外に自分たちにできることはどのようなことなのか。 ・自分たち村民が具体的にできることと周りの人たち（行政や消防団、消防署）に協力してもらうことについて考えさせる。	◇ウ①

6	・今後の自然災害から自分たちの生活を守るために必要なことについて考える。	・公助だけでなく、自助や共助の大切さについて意識をさせる。 ・聞き取りから学んだことを整理し、実際に村民が防災や減災のために取り組んでいることに興味をもたせる。	◇イ①
行政以外にも村民が取り組んでいる防災活動や防災意識を聞き取り調査する。（家庭学習）			
7	・自分たちにできる取組を周知する方法について考える。	・学習発表会で学習したことを伝えようと意欲を高めさせる。 （協力してもらった方に学習の成果を伝える意識をもつ。） ・自分たちが学んだ伊勢湾台風のことや防災・減災の取組を村民の方に広く知ってもらうための方法について話し合う。	◇ウ①
8	・村長さんに自分たちが考えた防災や減災の取組を提案する。	・以下の２つを提案する。 ① 学習発表会で伊勢湾台風での川上村の被害について伝え、現在の村民の方の防災や減災についての意識を持ってもらう。 ② 防災減災パンフレットを作成し村の広報に入れて全村民に配布する。	◇ウ①





６．成果と課題

学習を始めた時は川上村の１つの歴史について学習しているような感覚であった子どもたちが、伊勢湾台風の聞き取りをきっかけに学習に取り組む姿勢が大きく変わった。涙を流しながら話してくれた方々の思いを大事にし、川上村を自然災害から守るために自分たちにできることは何かを真剣に考えられるようになった。

A児

防災の学習をする前は、川上村の歴史について学びたいという思いがあった。学習を進めるなかで、伊勢湾台風の被害にあった方や村の防災活動に携わる方の思いに触れ、伊勢湾台風のことや防災のことを知らない人に伝えていきたいという気持ちを強くもつようになった。

B児

学習の最初は、防災への関心が薄かったが、学習を通して自分たちが生活する川上村を自然災害から守っていきたいという気持ちが高まった。今後も防災の意識を強め、災害が起きた時には村民と協力して川上村を守っていこうと考えることができた。

C児（２学期からの転入）

自分たちのことが考えの中心だったが、学習に携わってくれた人たちや自分たちの生活を支えてくれる人たちへの感謝の気持ちをもてるようになった。川上村に来てよかったと自分の生活する地域に愛着をもつことができた。

2019年度　近畿ＥＳＤコンソーシアム成果発表会・実践交流会

ESD実践交流会　第５分科会

春日山原始林を題材としたESDの実施について

杉山拓次

春日山原始林を未来へつなぐ会　事務局長

春日山原始林について

春日山原始林は、UNESCOの世界文化遺産「古都奈良の文化財」の８つの構成資産の一つとして指定されている。また、それ以前に国の特別天然記念物に指定されている森林でもある。この二つの「冠」は相関関係にある。春日山原始林が９世紀に神山とされ、禁伐地となったことで、天然記念物として指定されるような希少な森林生態系が残された。

一方で春日山原始林は、近年、自然環境としての価値が著しく損なわれている状況が発生している。奈良県では「春日山原始林保全計画」を策定、また市民団体「春日山原始林を未来へつなぐ会」が発足し市民の担い手として2014年より活動を展開している。

春日山原始林を題材としたESDの実践

春日山原始林の自然環境を保全し、次世代にその価値をつないでいくという活動を進める上では、具体的な現地での保全活動と同等のレベルで、普及啓発活動を積極的に行うことが不可欠となる。春日山原始林を未来へつなぐ会では、一般市民向けに観察会を行うほか、イベントでのガイドツアー、子ども・親子向けイベント、学校での出前授業などを実施しているが、いずれも結果的にESDの視点を持つものとなっている。2018年からは近畿ESDコンソーシアムの授業づくりセミナーにおいて、授業づくりの支援・実践協力を行なっている。

ESDの実践での課題と対策

春日山原始林が貴重な森林として持続可能な状況を維持・回復させていくために必要な対策は、非常にシンプルなものとして捉えることができる。そのため、実践した際の対象者（児童や学生、一般等）が課題へついての理解を深めることは比較的容易であるが、春日山原始林の価値については、「特別天然記念物」「世界文化遺産」などの冠に依存する形の表面的な価値にとどまってしまう恐れがある。ESDを「行動化を促す学び」と捉えると、対象者それぞれが春日山原始林の価値を発見することが非常に重要な要素となる。そのため、特にフィールドワークにおいては、五感を使った体

験活動を行うほか、その日、その時の状況で見つけることのできた動植物や、景観の美しさなどを紹介するように心がけ、自然の中での過ごし方を自らの行動から伝えることを意識している。

春日山原始林を題材とした学びが目指すもの

春日山原始林の保全の立場から、ESD を意識するとどうしても「春日山原始林の希少性」が強く表現されてしまう。「特定の自然環境の保全に向けての活動」という位置付けを持つため、当会の立場からすれば構わないのだが、本来 ESD が目指すものは、教材の対象ではなく、持続可能な社会を実現するための人材育成にある。そのため、実践にあたっては「春日山原始林」という特定の特殊な自然環境に触れることをきっかけに普遍的な「人と自然のあり方」への気づきを促すことが重要である。

第３学年　総合的な学習の時間学習指導案

指導者　奈良市立都跡小学校
教諭　　三木　恵介

１．単元名

つかう責任　のこす責任～わたしたちのくらしと奈良筆から～

２．単元の指導目標

・奈良筆についての製作過程や生産者の想い・工夫、また作られたものがどのようにして使われているのかを調べたりまとめたりすることを通して，地域で作られた文化的な価値をもったものを使用していくことが持続可能な社会に繋がっていくこと理解することができる。　（知識・技能）

・奈良筆を扱う薬師寺と自分たちのくらしについて調べたことを比較・関連付けて考えることを通して，地域で生産されたものと自分たちのくらしとの関わり方について多角的に考え，適切に表現することができる。　（思考力・判断力・表現力）

・奈良筆についての製作過程や生産者の想い・工夫、また作られたものがどのようにして使われているのかに関心をもち，意欲的に学習に取り組み、持続可能な社会づくりに主体的に関わろうとすることができる。　（主体的に学習に取り組む態度）

３．単元について

（１）教材観

奈良の筆作りはおよそ1200年前までさかのぼり，現在まで続く奈良筆にその特徴が遺されている。奈良筆は「練り混ぜ法」と呼ばれる複数の動物の毛を混ぜ合わせる技法により，非常に繊細な穂の動きを実現している。奈良筆の穂の製作は，基本的に全行程を職人による手作業で行われている。

現在，児童が書写などで使う筆は，100円均一や中国製などの安い値段で手に入れることが可能である。しかし，安価な値段で購入できる背景には，大量生産・大量消費という側面があり，そこには販売者側の利益と使用者側の消費という経済的な側面での持続性しか存在しない。その持続性の裏には，環境の非持続性だけでなく，奈良筆などの繊細な穂先の実現という文化の持続性を満たすことができていない。一方で，職人が奈良という地元で奈良筆を作り，それを地元の寺社が使い続けるということは，環境・経済・文化の全側面の持続性を満たしている。職人の手によって文化の持続性が保たれ，地元の者が使い続けることによって経済の持続性も保たれ，さらには良いものを長く使い続けることは環境の持続性にも繋がるのである。

本実践で重点的に扱いたいＳＤＧｓの視点として⑫「つくる責任　つかう責任」を挙げたい。生産者の製作過程における工夫や文化継承への思いに気付かせ「つくる側」の視点を養うとともに，薬師寺で筆が使われていることに迫ることで「つかう側」の視点にも気付かせたい。さらに単元のまとめでは，地域の地場産業の製品を扱うことが環境・経済・文化の全側面の持続性に繋がっているということに児童自身が気付くことによって，自分たちには「のこす責任」があるという態度を培わせたい。

（２）児童観

児童はこれまでの奈良市の様子の学習から，奈良市ではお茶やいちご作りが盛んなことを知っている。しかし，奈良市で昔から筆づくりが盛んであることを知っている児童は全くいない様子であった。また 3 年生になって始まった書写の授業で使用する筆の中にも，奈良市で作られたものがあることに気づいている児童はいなかった。児童にとって筆は単なる道具であり，自分たちのくらしと結びつきのある存在にはなっていなかった。

（３）指導観

指導の際には，まず奈良筆の特徴や職人の想いに触れることで「作り手の想い」に気付かせたい。そうすることで児童は，地域で作られた奈良筆というものに愛着や誇りをもつことができる。次に奈良筆が地域にある薬師寺に奉納され，使用されていることに目を向けさせ，薬師寺を訪問する。そこで児童は「使い手の想い」に触れることとなる。作り手が良い筆を作り続けることが，使い手が思いを込めた字や作品を遺していけることに繋がっていることを，一連の学習から児童に気付かせていきたい。

そして単元の最後には，安価な大量生産された筆か奈良筆のどちらを今後使っていきたいかという問いを児童に投げかける。その時，児童が「奈良筆を使いたい。」と答えられるよう，それまでの学習で「作り手」と「使い手」の想いにしっかりと迫らせていきたい。さらに本単元では，「使いたい」という考えにとどまらず，奈良筆を使い続けることが社会の持続性にも繋がっていることにまで目を向けさせていきたい。それが本実践の目標である。

（４）ESD との関連

・学習を通して主に養いたい ESD の視点

【相互性】：奈良筆の学習を通して，作る側（文化の持続）・売る側（経済の持続）・使う側（環境の持続）は，相互の関わり合っていることに気付くことができる。

【責任性】：作り手の思いと使い手の思いに触れることで，持続可能な社会の視点を養い，モノを長く使い続けることの大切さに気付くことができる。

・学習を通して主に育てたい ESD の資質・能力

①クリティカルシンキング：価格の違う筆を比べことで、奈良筆を使い続ける必要性を批判的に捉え、クリティカルシンキングの素地を養う。

②システムズシンキング　：「作り手」「売り手」「使い手」のつながりから，文化・経済・環境の持続性が相互に関連し合っていることに気付く力を養う。

４．評価規準

知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
①奈良筆についての製作過程や生産者の想い・工夫などを調べたりまとめたりしている。	①奈良筆を扱う薬師寺と自分たちのくらしについて調べたことを比較・関連付けて考える。	①奈良筆についての製作過程や生産者の想い・工夫に関心をもち意欲的に考えようとしている。

②地域で作られた文化的な価値をもったものを使用していくことが持続可能な社会に繋がっていくこと理解している。	②地域で生産されたものと自分たちのくらしとの関わり方について多角的に考え，適切に表現している。	②持続可能な社会づくりに主体的に関わろうとしている。

5．単元展開概要

全16.時間

主な学習活動	学習への支援	◇評価・備考
1．夏の思い出を俳句にして，筆で表そう	・「奈良筆」についての学習への意識を高めておく。	①奈良筆についての製作過程や生産者の想い・工夫に関心をもち意欲的に考えようとしている。
2．奈良筆って、どんな筆？ ・あかしやの筆のパンフレットを見ながら、筆の違いについて話し合う。	・パンフレットを提示し、具体的な違いについて友達同士話し合いながら気付かせる。	
3．あかしやに行ってみよう ・伝統工芸士の松谷さんから奈良筆についての特徴や制作過程について話を聞く。	・奈良筆の値段を決めているのは、職人さんがどれだけ手間暇をかけたかによって変わることを理解する。	①奈良筆についての製作過程や生産者の想い・工夫などを調べたりまとめたりしている。（知・技）
4．奈良筆についてまとめよう	・「つくる側」の努力が、「つかう側」の思いと繋がっていることを意識させる。	①奈良筆を扱う薬師寺と自分たちのくらしについて調べたことを比較・関連付けて考える。（思・判・表）
5．筆の良さって何だろう？ ・鉛筆の字・パソコンの字・自分たちが筆で書いた字・書家の字などを見比べてみる。	・あかしやに展示されていた薬師寺で使用された奈良筆を想起させる。 ・筆と墨で書かれたものは，何百年と遺るということ，先人たちの想いが伝わってくるということに気付かせる。	
6．薬師寺を訪問して筆を使う人の思いにふれよう		②地域で作られた文化的な価値をもったものを使用していくことが持続可能な社会に繋がっていくこと理解している。（知・技）
7．奈良筆を使うことはやっぱり大切？ ・奈良筆を使うと社会に何が起こるか考えてみよう。	・良いものを適正な価格で購入することが文化・環境・経済の持続性を保つことに気付かせる。 ・大量生産・大量消費は、経済的な持続性は	

	保たれても、文化・環境の持続性はたもたれないことに気付かせる。	
８．奈良筆と同じように、自分たちの暮らしの中の「大切に遺して使っていきたいもの」をさがそう	・奈良筆を使っていくことが，どうして大切なのかを考えながら，自分たちのくらしと結び付けていく。	②地域で生産されたものと自分たちのくらしとの関わり方について多角的に考え，適切に表現している。 （思・判・表）

６．考察と課題

（１）児童の変容

本実践をおこなうまで，奈良筆の存在すら知らなった児童は，学習を進める中で確実に奈良筆への愛着を深めていった。しかし，作り手側の視点のみの学びでは，その愛着は「奈良で作られた筆だから」や「職人さんが一生懸命作っているから」といった感情的な愛着に留まっていた。

しかし，筆についての学習や薬師寺訪問の学習を通して児童は，筆本来が持つ価値に気付き，使う側の立場として筆への愛着を深めることができた。

そして，学習の最後には「作り手」「売り手」「使い手」のつながりを考えることで文化・経済・環境の持続性について考えを深めることができた。この学びによって児童は，愛着という主観的なものの見方から，社会のために奈良筆を遺していかなければならないのだという，客観的なものの見方にまで考えを深めることができ，育てたいESDの資質・能力を養うことができたと考える。

（２）社会科学習とＥＳＤ・ＳＤＧｓとの学びの関連について

学習指導要領３年生社会科の目標には，「社会的事象の特色や相互の関連，意味を考える力，社会に見られる課題を把握して，その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断する力，考えたことや選択・判断したことを表現する力を養う。」とある。しかし、実際の教科書の取り扱いは，生産と販売の学習に留まり，消費者としての行動すなわち使う側の視点は，授業者に委ねられている。

本実践は，社会科で①作り手（生産），②売り手(販売)を，総合的な学習の時間で③使い手（消費）を横断的に扱うことで，この３者の相互性を明確に可視化することができた。ＥＳＤ・ＳＤＧｓの視点から新学習指導要領に基づく社会科学習の展開を再構築できたことが本実践の大きな成果である。

	奈良筆		安価な筆	
作り手	職人 →奈良筆の継承	文化の持続 ○	機械化 →職人の衰退	文化の持続 ×
売り手	地域の店舗 →地域の活性化	経済の持続 ○	大型店舗 →地域の衰退	経済の持続 △
使い手	良いものを長く →環境への配慮	環境の持続 ○	すぐにダメになる →大量消費・生産	環境の持続 ×

英語科学習指導案

東京都立立川国際中等教育学校
教諭　　町田　恵理子

1．単元名

Total English 3 Lesson7 -The Diary of Anne Frank-

2．単元の目標

(1) 間接疑問文や新出の表現（too-to や so-that 構文）を含んだ題材を理解することができる。（理解）
(2) 間接疑問文や新出の表現（too-to や so-that 構文）を用いて、自分の考えを表現できる。（表現）
(3) アンネ・フランクの日記や時代背景を理解し、世界をより良い世界にするために何ができるか、自分なりの考えをもって、他者と伝え合うことができる。（理解・表現）

3．単元について

（1）教材観

本単元では、アンネの日記を通して SDGs１６番「平和と公正をすべての人に」について考える機会となる題材である。アンネの日記を読む生徒たちは、アンネと同年代である。戦時下のユダヤ人の暮らしやアンネの気持ちを知り、自分の日常と比較することで、身近に感じさせる＝自分事化することができると考えた。アンネの生涯についての知識は、生涯について記事をジグソー法でクラスメイトと協働し、読んだ内容を絵に描いて英語で伝え合う活動を行う。日頃の課題から各個人の得意なことを活かし、パートナーシップを築いて課題を達成する経験に繋げたい。

（2）生徒観

３学年 AB 組の発展クラスの生徒は、物事に真面目に取り組む生徒が多い。ペアやグループワークは、場面設定次第で活発に行うことができる。当初は SDG s の認知度も低く、一部の生徒が昨年度理科の授業で導入があったという実態が分かった。３年生の教科書は、 SDG s につながる題材が多くあるので、いくつかの単元を通して、様々な視点から “What can you do to make the world a better place?” という Big Question に対する答えを考え続ける必要があると考えた。

生徒による授業振り返りアンケート抜粋

アンネや Jews の当時の暮らしと自分たちの暮らしを比べてみて、なかなか衝撃を受けた。彼女らの生活がおかしいのか、私たちの生活が恵まれているのか、、。でも戦争はあってはいけないし、なぜ人間が人間を差別するのか、殺すのかと疑問に思った。私の生活は多分恵まれている。親と買い物に行って、洋服をねだったり、喧嘩をすることもある。ただ恵まれていると感じることができた今、私は何ができるだろうか。感謝をし、勉学に励む以外にできることはあるのだろうか。

自分たちの普段の生活がいかに自由なのかが分かったと共にアンネたちの生活の不自由さが分かり、自分の境遇に感謝して、これからの人生をちゃんと生きようと思った。

（３）指導観：指導上の工夫、配慮すること。評価方法など。

本時では、課題解決のために他者との協力が不可欠であるタスクを設け、生徒の協働学習を促す。生徒は互いに異なる情報を持っているので課題解決のためには、自分の言葉や絵を用いて自分が持っている情報を伝えると同時に相手から情報を得る必要がある。そのために、あいづちやジェスチャー、アイコンタクトなどもコミュニケーションを効果的に取る大きな役割を果たすことを実感できると考えた。

（４）ESD との関連

【多様性】

Total English ３で学習する、環境問題(Reading1)やブータンで農業を教えた日本人（Lesson4)、音楽を通した世界の諸問題への貢献（Lesson5)、といった SDGs につながる様々な題材を通して、各個人が“What can we do to make the world a better place?”に対する考えを深めることができる。

【連携性】

限られた時間の中でタイムマネジメントを行い、他者と協働して課題を達成することができる。

【責任性】

生徒一人ひとりが好きなこと・強みを生かし、課題の達成に携わることができる。

４．評価規準

ア　コミュニケーションへの関心・意欲・態度	イ　外国語表現の能力	ウ　外国語理解の能力	エ　言語や文化についての知識・理解
①　アンネ・フランクの生涯や時代背景に関心をもち、積極的に活動に取り組んでいる。 ②　協働学習において、自分が果たす役割を考え、自発的に取り組んでいる。	①　間接疑問文や文中で扱われた特有の表現を用いて自分の考えを表現している。 ②　強勢、イントネーションなどを意識して、アンネの日記を再生している。 ③　アンネの生涯や時代背景をもとに自分の考えを加えて英語で伝えている。	①　間接疑問文や新出の表現を含んだ文を読んだり聞いたりしたことを理解している。 ②　アンネの日記や時代背景に関する記事を読んだり聞いたりし、その内容を理解している。	①　間接疑問文や文中で扱った特有の表現(too-to/so～that 等)を理解している。 ②　平和について自分事として考えるために十分なアンネの生涯や時代背景を理解している。

５．単元展開の概要

全８時間

時	主な学習活動	評価規準（評価方法）
第１時	Pre－reading ・帯活動　1min chat ・単元を貫く問い　“What can you do to make the world a better place?” の提示 ・既習単元（Reading1/Lesson4/5）の retelling .既習単元と SDG s のつながりを知るワーク	・ア-② 各活動に自分が果たすべき役割を考え、主体的に参加している。
第２時 (本時)	Introduction ・帯活動 1min chat・じゃれマガ ・“My ordinary week” ・ユダヤ人の生活ルールとの比較　4corners ・Guess Work　“Who is Anne Frank?” ・Anne Frank Museum Tour activity ・Fireplace reading(Lesson7 通し読み) HW:Story-board of the Diary	・イ-③ アンネの生活と自分の生活を比較して感じたことを英語で共有している。 .ア-①②・イ-②・エ-④ アンネの生涯に関する文を読み、ペアで絵に描いて、他者に伝えている。 ・イ-③ウ-① アンネの日記を通して読み、分かったことや感じたことを共有している。
第３時	While reading ・帯活動 1min chat ・New Words check ・Story board of the Diary of Anne Frank ・Retelling に向けた音読トレーニング Step1　音トレ Step2　意味トレ(4levels) Step3　Read and look up HW: Summary of the Diary and my opinion	・エ-① 新出表現の意味や発音、イントネーションを理解している。 ・イ-③　ウ-② アンネの日記を絵で表し、概要を他者に伝えている。 ・イ-② 強勢やイントネーションに留意して、本文を音読している。
第４時	Post-reading ・帯活動 1min chat ・Homework 課題　peer-editing ・Retelling of the Dairy with using their story-board and summary and my opinion the way to make people in the world live in peace. ・Question making of the Diary HW : Grammar original notebook（間接疑問文）	・エ-① クラスメイトの要約文を読み、誤りを見つけて正している。 ・イ-②③ アンネの日記をもとに、世界の人々がどうしたら平和に暮らせるのか、自分の考えを英語で伝え合っている。 ・ウ-① 本文に関する問題を考えて、他者と出し合っている。
第５時	Grammar ・帯活動 1min chat ・Word counter challenge of Lesson7	・イ-②③ 自分で書いた絵だけを見て、他者に日記の要約と考えを他者に伝えることが

	・HW を用いて、grammar に関する Mini-teacher ・間接疑問文や特有の表現を用いた言語活動 ・本文における留意事項の共有 HW:特有の表現を用いた例文　１５文以上	できる。 ・イ-①エ-① 新出文法事項や構文等を用いて、自己表現ができる。
第６時	Review ・帯活動 1min chat ・Word counter challenge of Lesson7 ・HW share ・Review ・HW : Anne’s quote poster	・イ-① 新出文法事項や構文等を用いて、自分の気持ちを表現している。 ・エ-① Lesson７の文法事項を書いたり、読んだり、話したりしている。
第７時	Further study ・Gallery Walk of Anne’s quotes “The World Largest Lesson”への参加 （世界一大きな授業） 世界の中の人として、難民問題をはじめ、アクティビティを通して世界の現状を知る活動 HW:Production What SDGs is related to the things I want to do to make the world a better place?	・イ-③エ-② お気に入りのアンネの言葉を引用し、ポスターに書いたものをギャラリーウォークで相互評価しあう。 ・ア-② 世界一大きな授業の各活動で、必要に応じて協働し、積極的に取り組んでいる。
第８時	Sharing お互いの意見を共有しあい、考えを深める。	ア-② Big question に対する自分なりの答えを SDG s につなげて、発表する。

６．成果と課題

(成果)

現任校で初めて、SDG s を導入する授業を展開することができた。前任校では、ESD（持続可能な社会の担い手を育む教育）の実践を目標に教科を超えて研究してきた。そこで SDG s と出会い、教育を通じて世界共通の課題を達成するために、いかに諸問題を「自分ごと」として捉え、行動を起こす生徒を育成できるかを模索している。教室での学びが世界と繋がっていると実感できる授業の実践、そして自律した学習者を育成したいという想いを持ち、日々授業案を模索し奮闘している中で、今回初めて新たな学校で SDG s を取り入れた授業実践ができたことは１つの成果であると考える。

（課題）

本単元では、Total English3 の Lesson7 The Diary of Anne Frank を題材に、当時の時代背景と自分たちの今の暮らしを比較する活動や、Anne の Biography をジグソー法で読み本文を導入していく活動を実践した。アクティブに生徒主体で授業を展開したいという想いが強く、コミュニケーションを取る活動を多く取り入れたが、やはり学習活動を盛り込みすぎていた。題材についての「問い」を明確にし、生徒にじっくり考えさせる場面がもっと必要であったと思う。授業を通して生徒に与えたい気付きや身に付けてほしい力を明確にして、授業を定めたゴールから逆向き設計でデザインする力を伸ばすことが必要であると考える。生徒が主体的に協働する授業実践を目指し、更に研鑽を積んでいきたい。

第１学年、第２学年　総合的な学習の時間　実践報告

指導者　奈良教育大学附属中学校
教諭　市橋　由彬・吉田　寛

１．単元名　「ひととの出会い」を通した学び　～２学年合同地域フィールドワーク（奈良めぐり）～

２．単元の目標

・ＳＤＧｓ・ＥＳＤを意識した地域フィールドワークのコースづくりを行う。　･･･（知識・技能）
・ランドスケープの視点でものごとを多角的にとらえ、さまざまな視点から考察するとともに、他者と意見を交流するなか（協同的な学び）で、多様な考え方に気づく。　･･･（思考・判断・表現）
・他者性を介した「ひととの出会い」を通した学びを行う。　･･･（主体的に学習に取り組む態度）

３．単元について

（１）教材観・ＥＳＤとの関連

・１、２年生の生徒が縦割り班で８つのグループに分かれて、以下の８コースの地域フィールドワークを実施した。本報告では、この中の（Ｄ）（Ｆ）コースについて述べる。

（Ａ）古地図散策	（Ｂ）観光とホスピタリティ	（Ｃ）奈良公園ランドスケープ
（Ｄ）ミツバチから生き方を考える	（Ｅ）共生　奈良シカ	（Ｆ）春日山原始林
（Ｇ）奈良のおいしいを守るために	（Ｈ・特別支援学級）先輩の働く姿・身近な世界遺産	

○［Ｄコース］ミツバチから生き方を考える

・Ｄコースは、「ミツバチから生き方を考える」というテーマで奈良めぐりを実施した。奈良市高畑在住の吉川浩氏に講師を依頼し、当日は奈良公園から春日大社参道、春日山原始林に生息する植物について解説していただきながら散策した。また、能登川沿いを下りながら、吉川氏が自然農法を行っている水田まで移動し、自然の恵みがいかにして街に下りてきているかを解説していただいた。吉川氏は無農薬でかつ雑草なども駆除せずに、稲作を行っている。生徒はその水田で、吉川氏が育てた稲に実った米粒を班に分かれて数える体験をした。１粒の米粒が 4,000 粒以上の米粒を実らせることに多くの生徒が驚き、また自然の偉大さを実感できる体験であった。最後に、生徒は吉川氏宅でニホンミツバチの観察を行った。実際に自分たちが１日歩いたエリアをニホンミツバチが活動していること、そのニホンミツバチが現在減っている原因に、自分たちが知らず知らずの内に加担しているという現実を知った。･･･【相互性】【連携性】
・SDGs11（住み続けられるまちづくりを）、SDGs12（つくる責任 つかう責任）、SDGs15（陸の豊かさも守ろう）、SDGs17（パートナーシップで目標を達成しよう）

○［Ｆコース］春日山原始林

・Ｆコースは、世界文化遺産「古都奈良の文化財」に含まれる「春日山原始林」を対象としたコースである。春日山原始林は、古来より春日大社の神域として信仰の場であったため、9 世紀頃には禁伐令が出されるなど積極的な保護がなされ、原生的な状態を維持する森林として特別天然記念物にも指定され守られてきたが、奈良県作成の『春日山原始林保全計画』によると、近年では、シカをはじめとする野生生物の食害による照葉樹林の更新不良やナラ枯れ被害の拡大等により、原生的な森林が変容していることが明らかになっている。２年生の生徒たちは春日山原始林を未来へつなぐ会の事務局長である杉山拓次氏から適宜アドバイスをいただきながら、現地の下見、事

前学習（「自然環境班」と「文化・歴史班」に分かれての調べ学習やポイントガイド練習、１年生へのレクチャー）を経て、本番当日は春日山遊歩道から若草山山頂に抜けるコースを散策した。また、事後学習では表現活動として「春日山原始林の世界観」というテーマで各自が絵を描き、それを貼り合わせて附属中学校版「春日山原始林曼荼羅」を完成させるとともに、「伝える」ということに着目することから、自然環境に対する思いがどのように育まれていくかを考えた。

・・・【相互性】【公平性】【連携性】

・SDGs11（住み続けられるまちづくりを）、SDGs13（気候変動に具体的な対策を）、SDGs15（陸の豊かさも守ろう）

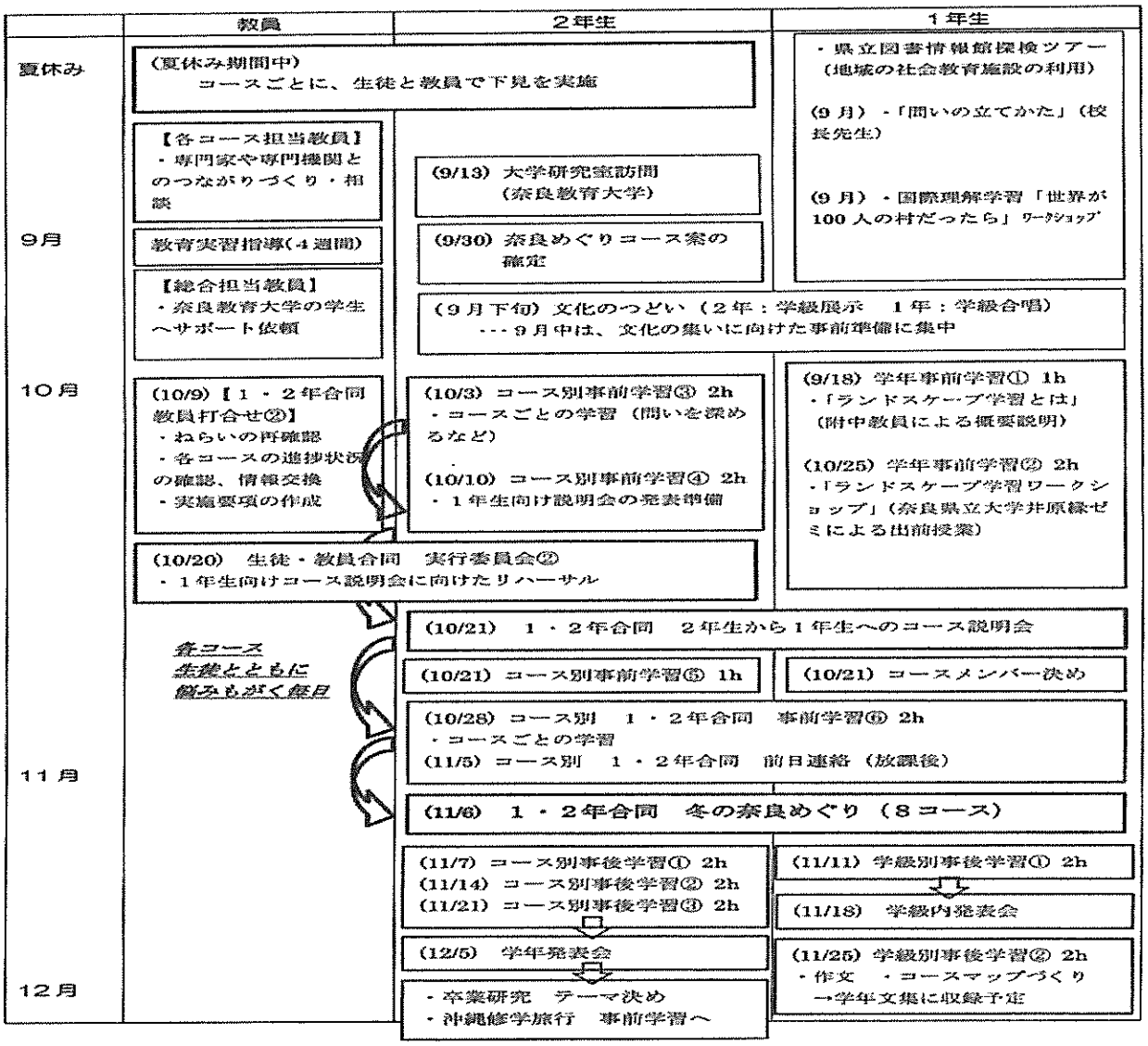
４．評価規準

知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
［Ｄコース］ミツバチから生き方を考える		
・よりよい未来を創るため、自分たちが消費しているものの背景とそれらを消費することでの影響を考え、選択できるようになる。	・人間中心の考え方ではなく、すべての生物が共存していくための考え方を身につける。	・自分たちの生き方にある課題と向き合う。（自分事化する。）
［Ｆコース］春日山原始林		
・春日山原始林と人との関わりを自然・文化の面など、幅広い視野から理解している。	・これまでの人間との関わりの中で、どのように森がのこされてきたのか（自然環境に対する思い）を考える。	・「自然の気持ち良さ」を五感で感じる。

５．単元展開の概要

〔１・２年合同　冬の奈良めぐりに向けて〕

	教員	２年生 「探求の基礎を身につける」	１年生 「学び方を学ぶ」
４月	（春休み）【職員会議】 ・縦割り冬の奈良めぐりの改変について合意形成	（４月）　学年・学級開き 春の奈良めぐり（斑鳩方面）	（４月）　学年・学級開き 春の奈良めぐり（平城宮跡）
５月	【各学年教員】 ・学年会議	（５月中旬） 臨海実習（鳥羽・答志島方面）	「学び方を学ぶ」 ・「なぜ、学ぶのか」 ・マインドマップの書き方
	【総合担当教員】 ・大枠の素案の作成	（5/29）　１・２年合同　ESD・SDGs 入門講座 （奈良教育大学　中澤准教授による講演）	
６月	（6/28）【１・２年合同教員打合せ①】 ・各コース担当教員の割り振り ・ねらいの確認 ・今後の流れの確認	（6/24） ・動画「SDGｓとは」「SDGｓと社会」視聴 ・興味関心のあるテーマの選択 ※マッチングがうまくいかなかった	・「ようこそ先輩」 （卒業生から、附中の学びがどのようにつながっていくのかを聞く）
７月		各コーステーマ案の提示 （7/5）・希望調査 ・メンバーの確定	
		（7/8）コース別事前学習① 1h ・テーマと目的を考える （7/10）コース別事前学習② 1h ・プラン（内容）を考える	
	（7/19）　生徒・教員合同　実行委員会① ・顔合わせ　・コースごとに教員と生徒リーダーが打合せ		



6．成果と課題

ＥＳＤは、持続可能な社会づくりに関する価値観と行動の変容を促す教育である。

本実践では、「ひととの出会い」を通して、「教師の変容」と「子どもたち（生徒）の変容」が次のような場面で見られた。

（1）「ミツバチから生き方を考える」に関する考察

「教師の変容」という点においては、「ひとに出会う」価値を教師自身が見出だしたことが大きな転換点だったといえる。教師自身が吉川氏の語りを聴くことを通して、確固たる信念と危機感、自分事としての問題意識を感じて行動されていることを感じ取り、吉川氏の生きざまに生徒を触れさせることによって、生徒が自らの生き方をふり返り、葛藤する中で自分事として「つくる責任・つかう責任」に思考が行き着くのではないかと考えるように変化していった。

当初は、ＳＤＧｓの理解促進が学びの主目的であり、ミツバチはその材料（教材）という位置づけであった。ところが、吉川氏という自然農法や養蜂の実践家と出会ったことによって、吉川氏の生き方から学ぶという、「“こと・もの”からの学び」から「“人”からの学び」に大きく方向転換をした。ＥＳＤでは価値観や行動の変容を重視しているため、「こと・もの」から「～という状況なので○○しよう」ではなく、人の生き方から学ぶ方が、目的にかなっているといえる。

同様に「生徒の変容」についても、これまでは漠然と「自然のために･･･」と言っていたことが、自分事としてとらえることによって多くの課題が見つかるようになり、葛藤が生じるようになった。理想と現実の中で葛藤し、自分の中である種の「折り合い」をつけていきながらも、中学生にとって葛藤の中で様々なものの見え方が変わり、多角的に考えようとすることにつながるのではないかと考えた。

（２）「春日山原始林」に関する考察

春日山原始林の実践から明らかになったことは、自然環境を教材とする場合、課題については生徒にテキスト化して伝えることが容易ということである。春日山原始林においても、ナラ枯れやナンキンハゼ、増えすぎたシカによる食害などの課題は伝えやすかった。

一方で、自然環境の「よさ」「価値」を伝えることの難しさが改めて浮き彫りになった。自然環境のよさに気づかせるために、杉山氏はネイチャーゲームをしたり、目を閉じて森の声を聞かせたり、風を体感させたりすることで自然環境に着目させ、意識させる活動を取り入れている。その活動を通して自然環境に関する気づきを得る生徒もいれば、そうでない生徒もいる。杉山氏は「自分は春日山原始林が好きでこの仕事をしているのだが、この「好き」という感覚をすべての生徒と共有するのは難しい」とおっしゃっている。

「よさ」や「価値」は、感覚的なものであるため、伝えることが難しい。

このことから、価値観や行動の変容を促すには、合理的・科学的な「知識」だけではなく、「感性」「感動」が必要であるという提案をする。

杉山氏は春日山原始林でガイドをされる際には、思いもかけなかったものを見つけると、その都度ツアー参加者に紹介しているが、杉山氏の生き物を見つけた「喜び」「驚き」は、ツアー参加者に伝染し、共感することがあると言われている。これは、「ミツバチから生き方を考える」の考察の「生徒の変容を促すには、まずは教師の変容から」と関連する。指導者が感動したことが子どもに伝わるということである。

そして、もう一つは、「フィールドワーク」、つまり、現地でこそ感じ、学べることである。

フィールドワークしながら色々と話したり見せたりすることによって、子どもの「あこがれ」が喚起され、「よさ」や「価値」への共感が生まれるのではないだろうか。見過ごしがちな生き物を目ざとく見つけて喜んだり、自然環境に関わる話題を色々と提供するためには、下見をしたり文献を調査したりといった事前研修が必要である。春日山原始林について「知っている」ことが想定を持たせ、想定通りの生き物を発見できたり、想定以上の生き物が発見できたりという「感動」が子どもに伝わり、あこがれを生むことで、子どもの春日山原始林に対する関心が高まるのである。

知識だけでは人の行動は変わらない。知識と感動（感性の揺さぶり）があって、人は自らの行動を変えていく。あるいはＥＳＤが目指す変容を促すためには、ＥＳＤが模範となるような生き方をされている方と子どもを出会わせるのが効果的ではないだろうか。

一方、行動の変容をみる時期については、教育の成果はすぐに出るものと、ずっと先になって出るものがあるという共通認識のもと、すぐに結果を求めようとする昨今の教育情勢に流されることなく、長期的視野で子どもの変容を促す教育が求められている。

なお、本実践では、「ひとに出会う学び」への比重が大きすぎて「ランドスケープ学習の視点」が不足していたことが課題として挙げられる。「ひととの出会い」を通してその人の「生き方」に迫るとともに、その人が生きてきた歴史的な時間・空間の背景を地理的な読み取りも踏まえて深めていくことによって、いのちの在り方（働き方や暮らし方などの存在様式の多様性）に気づく機会ともなり、自分事化が図りやすくなると考える。

第６学年　社会科実践報告

指導者　奈良市奈良教育大学附属小学校
教諭　　河野　晋也

１．単元名　「明治の国づくりをすすめた人々」

２．単元の目標

・討幕運動や明治維新という日本の変化とそれらにかかわる人物の働き、社会の変容の実際について、資料をもとに調べ西洋化に向かう社会の様子を理解している。（知識・技能）

・より良い社会を創ることを目指して行動した人や当時の人々の願いを考えたり、歴史的事象の背景や文化の継承の在り方について考えたりしたことを適切に表現している。（思考・判断・表現）

・江戸幕府が倒れ、明治維新が始まる経緯に関心をもち，かかわった人々の業績について進んで調べ、文化や社会の担い手としての自己の在り方を見直している。（主体的に学習に取り組む態度）

３．単元について

（１）教材観

西洋化が進んだ江戸時代末期から明治時代初めにかけては、画一的な価値観がくずれ、新たな考え方や多様性を認めていく社会変革の時代であると捉えることもできる。また一方では、西洋化をすすめたことで、当時の日本らしさが見えにくくなっていく時代とみることもできる。この二つのとらえ方に気づくことで、また、当時の日本人の見方や考え方を知ることによって、どのような社会を創ろうとしていたのか、それを我々がどのように判断するか、を迫ることができる教材である。この点から、ESD の価値観のうち「文化の多様性尊重」に関わる教材である。SDGs については、直接的な現代社会の諸課題に向き合う教材ではないが、諸外国や他文化からの影響を受けつつ、どのように自国、自社会を創っていくかを考える教材として、Goal17 に関わる実践である。

西洋化するということは、それまでの文化、習慣、制度、産業、教育などありとあらゆる分野が変革していくといって過言ではない。今の子どもたちが洋食を食べ、洋服を着、椅子に腰かけるという当たり前の所作も大きな変化として当時の人々に受け止められていたことだろう。より良い社会の担い手として変革をめざすＥＳＤにおいて、社会が変容するということの意味を考えさせることは重要である。この変化は、開国の影響によるものと捉えることができるが、一方で、より良い社会やくらしを求めて人々が行動した結果と捉えることもできる。将軍や貴族などの身分の高い人がつくりだした社会変革ではなく、下級武士や市井の人々の願いや行動も含めた社会変革としてみることで、より良い社会をめざし創り上げていくモデルとして学ぶことができる。

もう一つの明治時代のとらえ方は、西洋諸国の価値観が広がることで、日本独自の文化が見えづらくなったという捉え方である。実際に、今“日本”をイメージさせるものは、江戸時代以前のものを指すことが多い。外国人向けの土産物を見れば、着物やせんすなど和風雑貨がたくさん置かれている。鹿鳴館などをつくって西洋化に取り組み、何とか条約改正のために国際社会における立場を向上させようとする政府の思惑と反して、当時の日本を訪れる外国人たちは、古くから続く日本の価値を見出していたものも少なからずいた。小泉八雲や、フェノロサなどがその好例だろう。より良い社会を目指すあまり、本来持つ良さを見失うことは、文化的に画一化していくことにつながる。自国の文化の良さを見出すことの大切さについても考えさせる教材である。

（２）児童観

江戸時代末期から明治時代初めにかけての関心は比較的高いようである。人名についても、ペリーについて知っている児童は、13 人（27 人中）、西郷隆盛については 12 人、と半数近くの児童が聞いたことがあると答えた。一方で、岩倉具視、徳川慶喜などはそれぞれ３人、５人と少なく、著名な人物だけを知っている状況であり、断片的な知識を保持しているようである。

また、西洋化がすすむ時代ということから、「日本の文化と聞いて思い出すもの」を問うと、下図のようなものが挙がった。多くが江戸時代までに形作られたものを“日本らしい”と捉えていることが判る。「和食」や「和菓子」のように現代社会でも見られるものもあるが、「着物」「浮世絵」「茶道」など普段の生活では見られにくくなったものも、自国の文化として捉えていることが興味深い。

着物 10（袴含む）、和食８（すきやき、寿司３を含む）、建物５（瓦、畳、襖、障子を含む）、和菓子４、歌舞伎３、茶道３（茶筅）、習字３、すし２、浮世絵２、城２、寺２、扇子、下駄、ちょんまげ、神社、相撲、剣道、忍者、日本刀、竹、京都、花火、和紙、舞妓、百人一首、和歌、けん玉、かるた、箸、漢字、団扇

（３）指導観

まず西洋化の意味について考えさせる。そのためには、当時の人にとって、西洋文化をどのように捉えていたのかを想起させることが必要である。そこで日本人が描いた様々なペリーの似顔絵を見せて、当時の日本人が捉えていた外国人や開国を迫るペリーのイメージを知った。それらを見ると良い印象を持っていたようには感じられない。しかしたった 15 年で国内は西洋化を進めるようになり、外国人の描かれ方も変化する。15 年間の間の様々な出来事を調べさせ、なぜ西洋文化を受け入れることにしたのかという問いについて話し合う。

次に、明治時代を特徴づける様々な変化に目を向ける。江戸時代と明治時代を比較すると、乗り物、建物、食事など様々な違いが見える。これらのちがいについて調べさせ、明治時代についての児童なりの捉えを持たせる。さらに「明治時代とはどんな時代だったのか」という問いに対して、それぞれが調べたことを踏まえて表現させることで、近代化の様子を確かめる。この話し合いを踏まえて、人々の価値観がどのように変わったのか、また急に変わることができたのかを考えさせ、それまでの文化と融合させながら新たな文化を取り入れていった明治時代の姿を掴ませたい。

（４）ESD との関連

・学習を通して主に養いたい ESD の視点

【多様性】：西洋文化が流入した当時の日本の様子やそれによって変容していく様子を調べ、文化の多様性に気づくことができる。

【相互性】：西洋文化が流入する過程とそれによって起きる社会の変化を調べることを通して、国家間・文化間の相互性に気づくことができる。

【責任性】：時に対立したり協力したりしながら、より良い社会を創ろうとした当時の人々の様子を調べることで、社会の担い手としての責任の重要さを理解することができる。

・学習を通して主に育てたい ESD の資質・能力

ペリーの似顔絵などを通して、当時の日本人が欧米諸国や西洋文化をどのように捉えているかを想起することは、現在の文化を当たり前と捉えている児童にクリティカルシンキングを働かせるこ

とを促すことができる。また、西洋文化を取り入れることによって、起こる様々な影響を調べていくことはシステムズシンキングを養うことにつながる。当時の人々がより良い社会を目指して変革を成していった様子を踏まえ、これからの社会の在り方を考えたり、伝統的な文化を維持していく必要性を考え、これからの社会の担い手としてどのような社会を目指していくべきか、どのように文化を継承していくかを考えることは長期的思考を育むことにつながる。さらに単元の終末において、文化がより良い物へと発展しながら継承されていくことは、伝統的な文化を継承するという自己の在り様をクリティカルに捉えなおすことにつながる。

4．評価規準

知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
・西洋諸国が開国を求めた背景について知り、当時の日本に与えた影響を理解する。 ・明治時代の社会の様子と人々のくらしの変化を関連付け、明治時代の特徴をつかむ。	・欧米諸国の影響を考え、西洋文化が広がった理由を考える。 ・より良い社会を創ることを目指して行動した人や当時の人々の願いを考え、文化や社会が変容していく様子を表現している。	・開国と日本社会の変化の様子について関心をもって調べようとする。 ・より良い社会を創るために活動した人の姿に関心をもち、持続可能な社会の担い手としての在り方を考えようとしている。

5．単元展開の概要

全○時間

主な学習活動	学習への支援	◇評価　・備考
1．学習問題をつくる ・ペリー来航の目的を知り、そのことが日本にどのような影響を与えたのかを理解する。 ・ペリー来航後15年で明治政府が樹立し、西洋化にすすむことになったことを知り、課題をもつ。①②	・ペリーの似顔絵について、様々な描かれ方をしている数種類を提示する。 ・明治政府が樹立したことで、西洋化をすすめる政策が採用されていくことを伝える。学制など例示する。	◇開国と日本社会の変化の様子について関心をもって調べようとする。（態度）
なぜ当時の人々は、西洋文化を受け入れることにしたのだろう		
2．明治政府樹立までの15年間に何があったのかを調べよう③④ ・班ごとに調べるテーマを定める。 ・調べたことについて、グループで話し合い、模造紙（1／4）にまとめる。 ・他の班に調べたことを説明する 3．なぜ人々は西洋化を受け入れたのか話し合う。⑤ ・調べたことをもとに、西洋化を受け入れた理由を考える。	・ペリー来航後、15年間の期間の出来事に限定して調べさせる。 ・西洋文化を取り入れたことで、どのように社会や生活が変化していったのかを踏まえながら、話し合わせる。	◇西洋諸国が開国を求めた背景を知り、当時の日本に与えた影響を理解する。（知・技） ◇欧米諸国の影響を考え、西洋文化が広がった理由を考える。（思・判・表）

４．江戸時代と明治時代の違いについて調べる。⑥⑦ ・江戸時代の社会の様子と明治時代の社会の様子を比較して、どのような変化があったのかを調べる。 ・調べたことをまとめ、発表する。 ５．明治時代はどのような社会だったのか話し合う。⑧⑨ ・調べたことを互いに確かめ合い、明治時代が人々にとってどのような社会だったのか、話し合う。	・調べる活動を通して気づいたペアの子の良さを振り返りに書かせる。 ・調べたことをもとにしながら、明治時代がどのような時代だったのかを話し合う。 ・より良い社会を目指した人々の様子について話し合い、変容していく社会や文化の様子を出し合う。	◇明治時代になって変化したことを調べ、明治時代の特徴をつかむ。（知・技） ◇より良い社会を創ることを目指して行動した人や当時の人々の願いを考え、文化や社会が変容する様子を表現している。

６．成果と課題

西洋文化が広まった理由について、多面的にとらえることができた。１つは、西洋文化にあこがれたという点。２つ目は、幕府が倒れて、幕府の考えが古い考えがなくなったという点である。１つ目については、政府の視点で言えば不平等条約を解消するために欧米の進んだ文化を取り入れ、負けない国づくりが必要だった。市井の人々の目線で言えば、便利でかっこいい欧米の進んだ技術に対するあこがれが生まれたことにたどり着いた。このことから、江戸時代の文化、社会の在り方に疑問をもった人々、鎖国を忌避する人々の存在に気づき、２つ目の幕府に反対する藩や人々の動きが変えてしまおうと思ったという幕末の社会の動きに目を向けていった。その例として児童からは世直し一揆や、打ちこわしなどが不満の表れとしておきただけでなく、“あからさまに幕府に反対する人が増えてきた”という現象だととらえることができた。明治政府としては、新たな政府をつくる原動力であり、人々にとっても古い考えを改める機会となった。

「明治時代とはどのような時代か」を問うことで、多様な目線にたつ様々な人が、様々なとらえ方でより良い社会を目指したことに気づいていった。ＥＳＤにおいては、人々がより良い社会の在り様を目指して変革していく重要性を理解することは不可欠だと考える。この点を確認できたこと、そのために視野を広く持つ必要性があることを理解することは必要だったと考える。

最後には、「日本らしさが消えた時代かもしれない」という児童の発言を取り上げ、伝統的な、価値ある文化を継承する意味を考えた。古い日本の良さを残そうとして奈良で演説をしたフェノロサなどを取り上げ、文化を継承する意味や自分たちの役割を考えていった。そこでは、大きく二つの結論にたどり着くことができた。１つは、文化はよりよいものを取り入れ変容していくものであり、古いものをそのまま残すだけでなく、変容させていくべきものという考えであり、もう１つつは昔からのこるものを大切に保全し、学びながら新たな社会を創るという考えの２点を確認することができた。このことは、これからの社会をどのようにつくっていくかを考える上で重要なヒントになると考えている。

第４学年　総合的な学習の時間　学習指導案

指導者　長浜市立高時小学校
教　諭　足立　康輔

１．単元名　「大谷川のオオサンショウウオを守るために、わたしたちにできること」

２．単元の目標

・大谷川の水質環境や、大谷川に生息するオオサンショウウオについての生態や特徴について知ることができる。（知識・技能）

・大谷川やオオサンショウウオについて気づいたことをまとめたり、調べたことから考察し、自分の考えをもつ。また、友達と話し合ったりして、考えを深め、まとめたことを表現し、発信することができる。（思考・判断・表現）

・大谷川のオオサンショウウオについての学習を通して、地元古橋に関心をもち、地域の方や大学教授に進んで質問したり、調べたりすることができる。（主体的に取り組む態度）

３．単元について

（１）教材観

本校は滋賀県長浜市木之本町に位置する。学区内には、己高山や国の特別記念物であるオオサンショウウオが生息している大谷川をはじめとする豊かな自然、己高閣、世代閣などの重要文化財等が多数存在する。また、それらを大切に保護しておられる多くの地域の方々がおられる。また、学区内の古橋は、お茶の発祥の地と呼ばれ、大きな茶畑もあり、毎年、全校で茶摘みをしている。このように、本校は学区内にある貴重な地域資源を生かして、各学年が総合的な学習の時間に学年に応じた学習を進めている。

本単元で大谷川やオオサンショウウオについての学習を進める価値は数多くある。まずは、教育活動の関連性である。第４学年では、毎年、県の事業である「やまのこ宿泊体験学習」に参加し、森林体験や水生生物調査などを行う。そのような活動と、総合的な学習の時間で学ぶ大谷川の水生生物調査がつながりをもち、やまのこ学習の高山キャンプ場での水質と、わたしたちにとって身近な大谷川の水質を、見た目や触感、採取できた生き物などを通して比較することができる。

次に、大谷川に生息するオオサンショウウオを保護しておられる地域の方々については、「古橋のオオサンショウウオを守る会」に所属されている方や、本校と教育支援事業に関して協定を締結した長浜バイオ大学の教員の方々から、大谷川やオオサンショウウオについて詳しく教えていただくことができるということである。地域の方からは、大谷川が流れる古橋地区に着目して、学ぶことができる。大学教授からは、大学が行っている大谷川の調査のことや、一般的なオオサンショウウオについての知識などを学ぶことができる。このような知識を有する方たちから学ぶことで児童にとって、さらに学習が興味深いものになる。

最後に児童が大谷川やオオサンショウウオについて学んだことを、発信する機会を地域の方々が設けてくださることである。毎年、本校の児童は学区内にある鶏足寺を中心に開かれる「紅葉祭り」に参加し、総合的な学習の時間で学んだことを発表させていただいている。そこで、児童が大谷川やオオサンショウウオについて学び、それらを守っていくためにできることを地域の方だけでなく、観光客を始め、多くの方々に発信することができる。そのような啓発活動をしていく上で、自分事として問題意識をもち、仲間と協働的に発表の内容や方法を考えることができる。また、昨年度に限っては、「第１５回　日本オオサンショウウオの会　長浜市大会」や「地域遺産学習発表会～わたしのまちのたからものを受け継ぐ～」というような場面で発表できる機会もあり、多くの場で啓発してきた。

（２）指導観

本単元を進めるにあたり、貴重な地域の人材を活用していく。第一は、「古橋のオオサンショウウオを守る会」の方である。地元古橋に根ざした大谷川やオオサンショウウオ、そしてそれらをどのように地域で守っているのか教えていただく。第二は、長浜バイオ大学の教員の方々である。世界や日本のオオサンショウウオのこと、大学が実践している大谷川の調査のことなど専門的に教えていただく。また、児童の質問にも回答していただく。そして第三に、自治体職員（長浜市役所　歴史遺産課）の方である。昔の大谷川やそれを囲む地域の様子を、現代の大谷川と比べながら教えていただく。

このような地域の人材を活用することで、大谷川やオオサンショウウオを守るために、地域の方をはじめとして、多くの方々が大切に保護されていることに気づかせたい。そして、自分たちがこれからできることをクラスで話し合い、どのようなことができるのか考えさせ、行動化できるように進めていきたい。

（３）ESD との関連

○学習を通して主に養いたい ESD の視点

・大谷川に生息するオオサンショウウオについて調べる学習を通して、大谷川が自然、生き物、古橋の地域やそこに住む人々とつながり合っていることを理解する。【相互性】

・地域の方や長浜バイオ大学の教授、自治体職員の方に教えていただいたことを、大谷川や、オオサンショウウオを守っていくために発信していきたいという心を養う。【責任性】

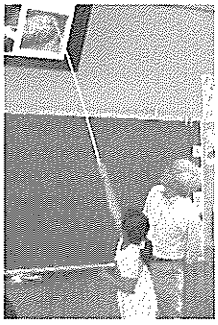
○学習を通して主に育てたい ESD の資質・能力

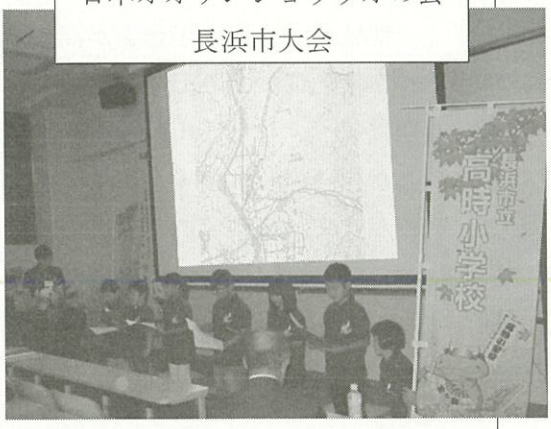
・大谷川やそこに生息するオオサンショウウオを守っていくためにできることについて自分の考えをもち、行動したり、友達と話し合い、地域の方や多くの方々に知ってもらうためにどうすればよいのか考える。【協働的問題解決力】

４．評価規準

知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
・大谷川の水生生物調査を通して、大谷川の水質について理解している。 ・地域の方や大学教授による出前授業を通して、大谷川やオオサンショウウオについて調べている。	・調べたことをもとに自分の考えを深めている。 ・大谷川やオオサンショウウオについて分かったことを、まとめている。 ・大谷川やオオサンショウウオを守るためにできることを、多くの方に伝えるために文章を考え、表現している。	・大谷川やオオサンショウウオに関心をもち、意欲的に調べたり、質問したり、まとめたりしている。 ・大谷川やオオサンショウウオを守っていくために、多くの人々に発信していきたいと考え、取り組んでいる。

5．単元展開の概要（全１２時間）

主な学習活動	学習への支援	◇評価・備考
1．大谷川について知る。 ・水生生物を採取し、分類することで大谷川の水質を調べる。 	○指標生物を通して、大谷川の水質に気づかせる。 ○やまのこ体験学習で水生生物調査をした川と結果を比べさせる。	◇大谷川の水生生物調査を通して、大谷川の水質について理解している。（知・技）
2．「古橋のオオサンショウウオを守る会」の方から話を聞き、地域の自然、大谷川やオオサンショウウオについて知る。 	○地域の方がオオサンショウウオをどのように守っておられるのか、工夫や配慮に気づかせる。	◇地域の方による出前授業を通して、大谷川やオオサンショウウオについて調べ学習を深めている。（主学）
3．長浜バイオ大学の教授から話を聞き、大谷川の調査や、交雑種問題などを知る。 	○地域の方との保護活動の相違点を考えさせる。	◇大学教授による出前授業を通して、大谷川やオオサンショウウオについて調べている。（主学）
4．大学教授に質問する。 	○これまでの出前授業を振り返り、自分が知りたいことについて、事前に考えさせる。	◇大谷川やオオサンショウウオに関心をもち、意欲的に調べたり、質問したり、まとめたりしている。（主学）
5．自治体職員の方から話を聞き、昔と今の大谷川の様子について知る。	○昔と今の大谷川の写真を見せていただき、異なる点を考え、地域の方が大谷川やオオサンショウウオをどのように守ってこられたのか考えさせる。	◇大谷川やオオサンショウウオに関心をもち、意欲的に調べたり、質問したり、まとめたりしている。（主学）
6．自分たちにできることはなにか話し	○オオサンショウウオの生態や、	◇大谷川やオオサンシ

合う。	地元の方がされていることをみんなで振り返り、行動に移せることを決定する。また、見通しを持たせて、計画を立てる。	ョウウオについて分かったことを、まとめている。（思・判・表）
７．みんなで大谷川やオオサンショウウオを守っていくために、看板を製作する。 	○一人ひとり役割をもつことができるように、ペアで活動し、役割分担させる。 ○看板を作る時に、注意する点や、効果的なキャッチコピーを考えさせる。	◇大谷川やオオサンショウウオを守っていくために、多くの人々に発信していきたいと考え、取り組んでいる。（主学）
８．学んできたことを発表しよう。 ・１０月６日（土）第１５回　日本オオサンショウウオの会　長浜市大会 ・１１月２３日（金）紅葉祭り ・１２月８日（土）地域遺産学習発表会 ～わたしのまちのたからものを受け継ぐ～ 紅葉祭り  日本オオサンショウウオの会 長浜市大会 地域遺産学習発表会	○聞いていただく方々に伝わるように文章を構成させる。 ○原稿の構成や発表練習の時間を十分に確保し、改善点などを話し合わせる。	◇大谷川やオオサンショウウオの保護のために考えたことを、多くの人々に発信するため取り組みを進めている。（主学） ◇大谷川やオオサンショウウオを守るためにできることを、多くの方に伝えるために文章を考え、表現している。（思・判・表）

第４学年　総合的な学習の時間実践報告

指導者　奈良市立平城小学校
教諭　　新宮　済

１．単元名　秋篠川のめぐみを未来へ

２．単元の目標

・秋篠川の現地調査を通して、川の水質状態や秋篠川の恵みについて考えることができる。
（知識・技能）

・秋篠川の恵みを、川の流域や未来につなげていくために、地域の課題を踏まえて自分たちができることを考えられる。（思考・判断・表現）

・秋篠川の流域に住む一人として、秋篠川の恵みを調べ、その恵みを川の流域や未来につなげていくために自分たちができることを実践する。（主体的に学習に取り組む態度）

３．単元について

（１）教材観

本学習では、平城地域を大切に思う心を養うために、地域社会の担い手意識や当事者意識を育てることを目的に、地域のよさを見つける学習を目指している。そこで本校のすぐ隣を流れる秋篠川を教材化した。教材化した理由は２つある。

１つ目は、「秋篠川の恵み」に気づくことが、平城地域を大切に思う心を養うことにつながると考えたからである。秋篠川は、奈良市内の大渕池を源流にして、上流では平城小学校校区にある秋篠寺を流れ、中流では世界遺産の平城宮跡や薬師寺をめぐって佐保川に合流し、さらに大和川と名前を改めて、奈良盆地から河内平野、大阪湾へと注ぐ大和川水系の河川である。奈良時代には、平城京の物資を南北につなぐ川として、平城京の西側を真っすぐに流れる流路として付け替えられ、「西の堀河」として物流を担った歴史をもち、現在にいたってもその流路は変わらず流れている。古くから、地域で盛んな米作りの農業用水としての役割や、地域の水遊びの場所であったことからも、平城地域の人々の暮らしと深く結びついた川である。また秋篠川は、生物多様性を有する点でも貴重である。さらに農業の収穫にかかわる祭りが多彩なことや、世界遺産の平城宮跡や唐招提寺、薬師寺の前を流れているため文化的景観の役割も担っている。このような多面的な役割を果たしている秋篠川の恵みに気づくことで、その恵みを生む川が自分たちの誇りとなり、地域を大切に思う心につながると考えた。

２つ目は、秋篠川に関わる「人の営み」に出会い憧れることで、地域社会の担い手意識が高まると考えたからである。校区の秋篠川にはビニールゴミやペットボトルが落ちていたりして、環境的には決して良いとは言えない状態である。源流の地域では、現状の問題に気づき「秋篠川源流を愛し育てる会」を立ち上げて、住民による清掃活動や「川への思い」を託した標語の植桜樹掲示、秋篠川に生息する動植物の看板設置などの活動を展開している。しかし、本校が含まれる中流の地域では、その活動や意義は広まらず、地域の農家の方や一部の地域の住民の活躍で守られている。川を守る平城地域の大人と出会い、「秋篠川の様々な恵みを守り、それを未来につなげていく」という営みに憧れることで、自分も地域社会の一員としてできることを考え行動する児童が生まれると考えた。

（２）児童観

学習に入る前に児童に、「地域の秋篠川に興味がありますか」という質問をしたところ、「興味がある」と答えた児童が３名（34名中）であった。また「秋篠川はきれいな川か」というアンケート調査では、「はい」と答えた児童が３名、「いいえ」と答えた児童が22名、「わからない」が９名であった。これらの理由を質問すると、きれいな川と答えている児童は以前秋篠川で魚を見つけたことから判断していた。汚い川と答えている児童は、ゴミを見つけたことや川の濁りから判断していた。「わからない」と答えている児童は、秋篠川を注意して観察したことがないと言う答えが大半であった。最後の質問として、秋篠川について知っていることを聞くと、「わからない」や「無回答」で答えている児童が12名いた。回答できた児童についても「広い・大きい」や「魚がいた」など不確なコメントが多かった。しかし、秋篠川について「きれいにしたい」と答えた児童が２名いた。

以上のことから児童にとって秋篠川は身近なものになっていないと考える。また、川の汚れに関しては当事者意識が働かず、現状の理解すらおぼつかない児童もいることがわかる。

（３）指導観

秋篠川を児童にとってより身近なものしていくために４つの工夫を行なった。１つ目は、博物館の方や地方自治体の方と協働して秋篠川と吉野川源流で生物調査を行なった。水中の生物だけでなく、陸上の生物や植物も観察することによって、川には地域によって様々な生態系が育まれていて、様々な恵みをもたらすことを実感させた。２つ目は、吉野川源流への遠足の事後学習として、森と水の源流館の館長尾上氏と一緒に、川には生き物のすみかという役割だけでなく、農業用水、文化的側面、レクリエーション、海の幸をつくるなど、多面的な役割があるということを学ばせた。３つ目は、吉野川で見つけた川の多面的な役割をモデルにして、秋篠川にも多面的な役割があるのかを確かめさせた。児童がグループに分かれて確かめたい役割を選択し、地域の方に聞き取り調査をさせた。
このような学習を通して秋篠川への興味が高まったなかで、４つ目として秋篠川と吉野川との空間軸による比較、秋篠川の時間軸による比較を行い、地域の現代的課題であるプラスチックゴミ問題に気づかせた。環境省の方からプラスチックゴミが生態系に影響を与えていく話をしてもらい、さらに海洋汚染問題とのつながりに気づかせることで切実感を持たせた。プラスチックがなかった頃の地域の秋篠川の暮らしと今の暮らし、また川にほとんどゴミがない吉野川源流の人のくらしを比較することを通して、自分たちのライフスタイルを変革していこうとする行動化につなげていきたい。

（４）ESDとの関連

・学習を通して主に養いたいESDの視点

【相互性】：秋篠川の役割（恵み）を調べることを通して、地域の秋篠川が生物多様性を支えているだけでなく、川の多面的な役割として大きな恵みをもたらし、自分たちの生活に深く関わっていることに気づくことができる。

【責任性】：森と水の源流館館長尾上氏の営みを学ぶことで、責任の重要さを実感できる。

・学習を通して主に育てたいESDの資質・能力

【クリィティカル・シンキング】：吉野川源流の人のくらしと秋篠川流域のくらしを考えることを通して、自分たちのライフスタイルを変革していこうとする行動を考える。

・ESDで育てたい価値観

【世代間の公正】：自分の世代だけでなく秋篠川のめぐみを未来へつないでいこうと考え行動する。

・SDGs のどれに貢献できるか

目標 15 陸の豊かさを守ろう　目標 14 海の豊かさを守ろう　12 つくる責任つかう責任

4．評価規準

知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
様々な調査をして、秋篠川の水質や役割についてわかったことを書いている。	秋篠川のめぐみを未来につなぐために自分たちができることを考えている。	自分にできることを考えて、仲間と協力しながら調査・行動を進めている。

5．単元展開の概要

	学習内容	●留意点
1学期	○秋篠川について知っていることを確認する。 ○学習問題を作る。	●秋篠川の水質環境について興味を持たせる。
	平城地域の秋篠川は、どのような川なのだろう	
	○奈良県河川課の方と一緒に秋篠川の水生生物指標調査を行う。 ○調べたことを保護者に発表して評価をもらう。	●指標調査から秋篠川の水質を分析し、秋篠川がどのような川であるかを考えさせる。 ●評価だけでなく、児童の発表から秋篠川のイメージがどう変化したかも伝えてもらう。
2学期	○奈良大学附属博物館へ行き、調査結果を報告し評価してもらう。 ○遠足で川上村の吉野川源流へ行き、生物調査をし、森と水の源流館の見学をする。 ○遠足でわかったことをまとめ、森と水の源流館の館長さんに発表して評価をもらう。 ○新しい学習問題をつくる	●生物学研究者から、大学が 22 年間調査している成果を聞く。 ●吉野川の生態系を理解させるために、学芸員の方と一緒に水中、陸上の生物調査や植物観察をさせる。 ●吉野川は多面的な役割をもっていることにきづかせる。
	秋篠川のさまざまな役割をさがそう	
	○秋篠川の多面的な役割を聞き取り調査する。 ○秋篠川の現代的課題に気づく。 ○秋篠川の現代的課題（海洋汚染問題）について、環境省の方に聞き取りをする。 ○新しい学習問題をつくる	●吉野川の多面的な役割が秋篠川にもあるか、興味のある役割をグループにわかれて調べさせる。 ●秋篠川と吉野川の多面的な役割の比較や、今と昔の秋篠川を比較することで、秋篠川のプラスチックゴミ問題に気づかせる。 ●プラスチックゴミが河川に及ぼす影響について話をしてもらう。
	秋篠川のめぐみを未来へつなげるための私たちにできることを考えよう	
3学期	○秋篠川のめぐみを未来へつなげる行動を考える。 ○自分たちの行動をまとめて地域の方に発表する。	●吉野川源流のくらしをもとに、自分の生活を見直し行動指針をつくらせる。 ●一人ひとりの行動を可視化していく。

６．成果と課題

本実践は年間を通じて行うことを計画しているので、12 月 13 日までの成果と課題を考察した。成果として「秋篠川への興味の変化」をあげる。表１によると秋篠川に興味がある児童が４月の３名から 12 月に 27 名にまで変化していることである。これは２つのことが要因であると考える。

１つ目は単元のなかで体験や調査活動、出会いを取り入れストーリーのある学びにしたことによる効果である。まず、体験については、４月と９月に追究する疑問を持って秋篠川と吉野川源流の水中、水辺、周辺や関係する博物館で調査をしたことである。直接体験することで、授業での感動や発見、疑問が教室で学ぶより多く生まれ、心に残るものとなったと考えられる。次に追究活動を重ねたことである。吉野川や秋篠川の役割についての調査は、児童にとって難しいものではあったが粘り強く続けたことで川への興味が高まった。授業のなかで児童が「役割調べを続けているうちに興味を持った」と変化を語っていたことからも考えられる。最後に出会いの工夫である。本実践では、表２に掲げた方々と出会い交流を重ね、「追究の評価」をしてもらう活動と「人の営み」に出会わせる活動を取り入れた。専門家に評価してもらうことで、自分たちの追究への自信となり、さらに調べたいという新たな追究のエネルギーとなった。また授業に協働していただいた方々は、川についての持続可能な社会の形成者である。彼らの川へ思いや、それにつながる営みについて授業で語ってもらうことで、深く感動しその生き方に憧れる児童が多数出た。そのような憧れる経験が増えることで、彼らと同じように秋篠川に興味をもつことができるようになったと考える。

調査をした状況	興味ある	興味ない
単元の導入時（4月）	3	31
秋篠川生物調査後、河川課による口頭質問（6月）	32	2
奈良大学博物館見学の際、学芸員による口頭質問（８月）	5	28
吉野川源流体験、森と水の源流館での吉野川の役割り探し後のふりかえり（9月遠足）	14	19
見つけた吉野川の役割を森と水の源流館館長に評価してもらう授業後ふりかえり（10月	25	6
秋篠川の役割について地域のフェスタや交流会で聞き取りし評価をもらう授業後のふりかえり（11月）	28	3
秋篠川の役割を環境省から評価してもらう授業後のふりかえり（１２月）	27	2

表１　秋篠川への興味について調査結果

２つ目は、秋篠川観の変化である。表２は、本実践での秋篠川へのメージの変化をみるために授業の発言やふりかえりを抽出したものである。児童に、ほとんどイメージのなかった秋篠川が、①現在の水質環境、②これを見守る関係機関の存在、③秋篠川の役割、④秋篠川のゴミ（地域課題）、⑤地球規模の問題とのつながり⑥秋篠川を守るための行動へという順番で多様な見方になる変容が生まれた。川の役割に価値に気づき、⑤⑥のように「なんとかしなければ」というような切実感が生まれているところに ESD の醍醐味である価値観の変容が見られたと考える。要因として、地域と連携して長期的な実践にするコーディネーターとしての教員の役割がある。関係者と対話のなかで秋篠川への様々な見方が生まれたことを確認できたからである。

学習活動	連携した人	秋篠川について知っていること
導入	保護者 先輩児童	「わからない」と無回答（18名） 大人もわからない、でも先輩は知っている。
秋篠川生物調査	河川課 研究者	秋篠川は、やや汚い川である。
生物指標調査を奈良大学に報告	大学教員 学芸員	40年前から奈良大学が水質を見守っている。昔はもっとゴミがあった。
森と水の源流館吉野川源流調査	源流館 村民	吉野川には様々な役割があり、村の人みんなで守っている。
秋篠川の役割調査	地域教育協議会・農家	秋篠川にも様々な川の役割がある。 地域の農家が役割を守ろうとしている。
時間軸、空間軸で比較	大和川河川事務所元職員	現在の秋篠川には多くのゴミが溜まっている問題がある。（地域課題への気づき）
ゴミの影響調べ環境省に聞き取り	教育協議会 環境省 きんき環境館	ゴミの影響で秋篠川の役割が妨げられる。 海洋プラスチック問題とつながっている。 川を守るために自分にできることがある。
河川課・森と水の源流館に挑戦した行動を報告・評価	河川課 森と水の源流館	ゴミの影響で秋篠川を浄化する微生物が危ない守りたい。流さない生活に変える。

表２　秋篠川について知っていることの調査

課題は、今後の単元展開である。現在児童が自主的に秋篠川周辺のゴミ拾いを行っている。(12 月 13 日ゴミ袋５袋分収集)、このゴミを科学的な視点で分析し、SDGs 12 つくる責任つかう責任にまで視野を広げていき、消費行動やライフスタイルの変革の一歩につなげていきたい。

＊＊＊

小学生を対象としたESD実践・東大寺宿泊企画を通した大学生スタッフの学び

奈良教育大学ユネスコクラブ　代表　仲村　幸奈
前代表　谷垣　徹

＊＊＊

1．「東大寺に泊まろう！～世界遺産を体感～」について

本企画は、NPO法人奈良地域の学び推進機構主催のイベントであり、近畿ESDコンソーシアム後援、奈良教育大学ユネスコクラブ協力のもと、3年間開催してきた。世界遺産である東大寺二月堂に宿泊し、子どもたちが協力し合いながら2泊3日お寺での生活を、体験を通して学ぶ、生活体験プログラムである。世界遺産・東大寺での集団生活や日本文化体験プログラムを通じて、実践的な生きる力や礼節の大切さなどを、参加する子どもたちが自ら気づき、考え、学ぶという企画である。本企画は、小学校3年生から6年生を対象としており、地元奈良県だけでなく大阪府や京都府、また東京都からも参加者が多く集まる。奈良教育大学ユネスコクラブは本企画において、子どもたちと2泊3日を共にする活動班のリーダー、プログラム進行、また裏方の運営などを担当している。3年目となる2019年度は、東京学芸大学の学生もスタッフとして運営に関わった。

2．目的・ねらい

本企画の目的・ねらいは、以下の3点である。

（1）世界遺産での貴重な宿泊体験を通し、歴史文化に学ぶ態度を涵養する。
（2）仲間と協力し、やり遂げる達成感を味わう。
（3）大仏造立の歴史に触れ、現代の私たちの暮らしと照らし生き方を考える。

3．テーマ

本企画では、毎年一つのテーマを設定し、東大寺境内でのフィールドワークや東大寺僧侶による講話など、2泊3日のプログラムを構成している。2017年から2019年までのテーマは以下の通りである。

【2017年】「東大寺の歴史」
【2018年】「行基さんについて知ろう」
【2019年】「東大寺の始まり」

4．開催日時・参加人数

【2017年】11月10日（金）～11月12日（日）
参加人数：33名（奈良25名、東京8名）、学生：9名
【2018年】10月26日（金）～10月28日（日）
参加人数：30名（奈良20名、東京10名）、学生：15名
【2019年】10月25日（金）～10月27日（日）
参加人数：42名（奈良20名、東京22名）、学生：12名（奈良9名、東京3名）

※各年、参加者（小学生）、大学生スタッフのほか、NPO職員が運営にあたっている。
※奈良教育大学ユネスコクラブのほか、奈良ユネスコ協会青年部、奈良教育大学TNPサークルなどの学生も協働で関わっている。

５．プログラム内容

プログラムの主な内容は３年とも同様である。３日間の主なプログラムを以下に記す。

- 東大寺探索

東大寺境内を活動班に分かれ、学生リーダーと共に探索する。毎年設定されたテーマに沿って、各班で探索ルートを話し合い、ミッションに取り組みながら約３時間かけて回る。子どもたちは学んだことや気になったこと、疑問点等を、ワークシートにメモを取りながら探索を行う。参拝量などの金銭の管理、時間の管理も子どもたちが行う。

- 読経

僧侶の指導のもと、「般若心経」の読経の練習を行い、３日目にはその集大成として二月堂本堂に入堂し、般若心経を唱え、焼香をあげる。経本の大切さや読経するうえでの姿勢等も学ぶ。子どもたちは、正座という普段あまりすることのない姿勢を維持しながら、一生懸命集中してお経を唱える。

- 就寝

普段は僧侶が修行の際に使用する参籠所で宿泊する。自分たちで協力して布団を敷き、就寝する。また、３日間を通して作務衣を着用して活動する。

- 朝の清掃

毎朝早起きをして、使用させていただいている感謝の気持ちを込めて、二月堂の外回りや参籠所等を綺麗にする。東大寺の方から清掃の方法を指導していただき、心を込めて収集して清掃に取り組み、心も清める。

- 銭湯体験

東大寺の近くにある銭湯に向かい、入浴する。普段なかなか使うことのない銭湯を体験する。入浴する際の注意点や公共の場での過ごし方を学ぶ機会でもある。

- 写仏、川柳作り

仏様を書き写し、願い事を書き、最後大仏様の胎内にお納めすることで心願成就を祈願する写仏を、一人一枚心を込めて行う。川柳作りでは、３日間を通して感じたこと印象に残っていること等を「五七五」で表し、タラヨウの葉に書き、発表する。日本文化体験の一つである。

- 振り返り発表会

東大寺探索など、３日間を通して学んだことをもとに、各班で１枚の模造紙にまとめて発表する。興味を持ったこと、初めて知ったことなどを全員で共有しあえる機会である。最後には、タラヨウの葉に書いた川柳を発表する。保護者の方々にも発表をご覧いただいている。

６．本企画を通した大学生スタッフの学び

調査の目的

本調査では、本企画に携わった学生が、企画への参画を通してどのようなことを学んだかを明らかにする。年度によって学生の学びがどのように変化しているか、また運営スタッフ・活動班リーダーなどの与えられた役割によってその学びがどのように変化したかを明らかにする。

分析の手法

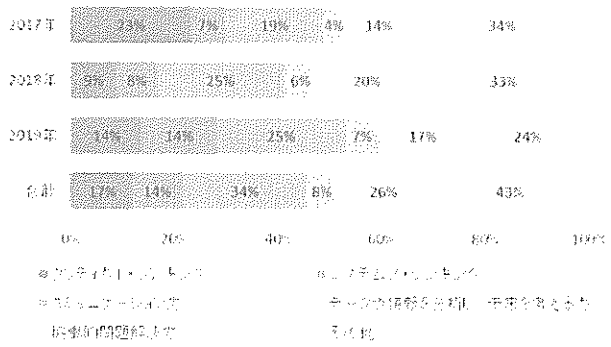
本企画に携わった学生が事後に作成した「学生スタッフ振り返りシート」の内容を分析する。各年の回答人数と、運営スタッフ・活動班リーダーの内訳は以下の通りである。振り返りシートの設問は３年とも共通のフォーマットを使用しており、以下に示すとおりである。

	回答人数	運営スタッフ	活動班リーダー
2017年	8人	2人	6人
2018年	15人	5人	10人
2019年	12人	3人	9人

【振り返りシートの設問】（3年間共通）
①スタッフを経験して得た学び
②改善点・来年に向けての提案
③その他、自由記述欄

各年の振り返りシートに書かれた内容を、ESDで育てたい能力の以下5つの観点（及び「その他」）に分類し、その出現回数をカウントした。

・クリティカル・シンキング（批判的思考力・代替案の思考力）
・システムズ・シンキング（多面的・総合的思考力）
・コミュニケーション力
・データや情報を分析し、未来を考える力（長期的思考力）
・協働的問題解決力



分析の結果

各年の分析結果は以下の通りである。

	クリティカル・シンキング	システムズ・シンキング	コミュニケーション力	データや情報を分析し、未来を考える力	協働的問題解決力	その他	合計
2017年	17	5	14	3	10	25	74
	23%	7%	19%	4%	14%	34%	
2018年	14	13	40	10	32	54	163
	9%	8%	25%	6%	20%	33%	
2019年	21	22	38	10	26	36	153
	14%	14%	25%	7%	17%	24%	
合計	52	40	92	23	68	115	390
	13%	10%	24%	6%	17%	29%	

【2017年】

クリティカル・シンキング【17】	・スタッフの人員不足（4） ・時間の余裕のなさ（3）	・目的、マナー・ルールの共有（4）
システムズ・シンキング【5】	・裏方の仕事（3） ・いろいろな立場を経験（2）	
コミュニケーション力【14】	・子どもとの関わり方（4） ・子どもに主体性を促す声かけ（2） ・注意する（2）	・子ども同士のコミュニケーション（2） ・リーダーとしての立場（2）
データや情報を分析し、未来を考える力【3】	・スタッフ間の情報共有（2） ・先を読んだ行動（1）	

協働的問題解決力【10】	・班での協力（4） ・男女混合の班（2）	・他のリーダーとの協力（2） ・スタッフとの連携（2）
その他【25】	・子どもの主体性（4） ・東大寺に関する知識（4） ・貴重な経験（3）	・笑顔（3） ・学生主体（2） ・学生での事前のフィールドワーク（2）

【2018年】

クリティカル・シンキング【14】	・学生間の情報共有、打ち合わせ（4） ・子どもの学びを深めるために（4）	・タイムスケジュールの見直し（3）
システムズ・シンキング【13】	・全体を見る（3） ・時間管理（3）	・スケジュール管理（3）
コミュニケーション力【40】	・子どもとの関わり（14） ・子ども同士の会話（10） ・学びを引き出す声かけ（6）	・事前の情報共有（3） ・注意（3） ・リーダー間のコミュニケーション（3）
データや情報を分析し、未来を考える力【10】	・アレルギー、常備薬などの把握（4） ・情報共有（3）	・先を読んだ行動（3）
協働的問題解決力【32】	・他のリーダーとの協力（11） ・スタッフとの連携（5）	・班の男女間の協力（5） ・班内の役割分担・協力（3）
その他【54】	・貴重な経験（8） ・子どもの安全、怪我なく（6） ・子どもの体調管理（6） ・東大寺に関する知識（5）	・生活体験プログラム（4） ・学生主体（4） ・フィールドワークでの子どもの学び（4） ・子どもに学びが伝わったか（4）

【2019年】

クリティカル・シンキング【21】	・タイムスケジュールの見直し（4） ・振り返り、発表の方法（4）	・事前の打ち合わせ（2）
システムズ・シンキング【22】	・タイムスケジュール管理（4） ・組織運営（4） ・多様な学生の視点、交流（4）	・他の班の子どもの様子（3） ・全体を見る（2） ・多くの役割（2）
コミュニケーション力【38】	・子どもとの関わり方（11） ・怒る／叱る（6） ・子どもの学びを促す声かけ（5）	・事前の情報共有（4） ・リーダー間のコミュニケーション（4） ・ほめる（2）
データや情報を分析し、未来を考える力【10】	・健康チェック、常備薬の把握（4） ・先を読んだ行動（3）	・体調管理の情報共有（2）
協働的問題解決力【26】	・他のスタッフとの協力（8） ・班内の協力（6）	・奈良と東京が一緒に（5） ・スタッフとの連携（3）
その他【36】	・東大寺についての知識（8） ・子どもの学びの反応（6） ・貴重な体験（5）	・子どものケガ、健康（4） ・体調管理（4） ・子ども主体（3）

２０１９年度　近畿ESDコンソーシアム成果発表会・実践交流会

実行委員会

実行委員長：高橋豪仁

実行委員　：河野晋也、北村恭康、鎌田大雅、河本大地、吉田寛、阪本さゆり、
小尾二郎、吉川俊美、谷垣　徹、仲村幸奈、中澤静男
植木久晴、西田裕美

２０１９年度

近畿ESDコンソーシアム成果発表会・実践交流会冊子

２０１９年１２月２６日　発行

近畿ＥＳＤコンソーシアム・奈良教育大学